り、(八)安仁、士衡の人を評するに(九)矯抗を立つるに及んでは、況んや復た此に殊なる者ならんや。又遠きを貴び近きを賤むるは人の常情、耳を重んじ目を輕んずるは俗の恆蔽なり。是を以て邯鄲曲を李奇に託し、士季論を(一〇)嗣宗に假る。此れ(一一)其效なり。然れども五言の興れるは諒に(一二)夐古にあらず。但(一三)關西鄴下既に已に同じきこと罕に、(一四)河外江南頗る法を異にするをなす。故に玄黃經緯の辨、金碧沈浮の殊、僕以爲らく亦其美を合せ善を竝ぶるのみと。今三十首の詩を作り、其文體に斅ふ。(一五)品藻淵流すといふに足らずと雖も、庶はくは亦(一六)商搉に乖くなしと云爾。

古離別

遠く君と別れて、乃ち(一七)鴈門の關に至る。(一八)黃雲千里を蔽ふ。遊子何れの時にか還らん。君を送りしは昨日の如きも、簷前露已に團なり。(一九)蕙草の晩るを惜まず、悲む所は道里の寒きなり。君は天の一涯にあり、妾が身長く別離す。一たび顏色を見んことを願ふも、(二〇)瓊樹の枝に異らず。(二一)兎絲と水萍と、寄る所終に移らず。

【八】安仁。潘岳なり。士衡は陸機。
【九】矯抗。反對說。
【一〇】嗣宗。阮籍なり。
【一一】其效。其證なり。
【一二】夐古。遙古なり。
【一三】關西。前漢をいふ。鄴下は魏なり。
【一四】河外。北朝をいふ。江南は南朝。
【一五】品藻淵流。原作の風味を體得して巧に之に摸すること。
【一六】商搉。量度なり。
【一七】鴈門。北方の山上にある關所の名。
【一八】黃雲。塵埃雲の如きなり。
【一九】蕙草。香草なり。晩は衰落すること。
【二〇】瓊樹。崑崙山上にある玉樹なり、故に容易に見難し。
【二一】兎絲。女蘿なり、蔓草の名。水萍はウキクサ。

【大意】是れ閨怨の詩なり。我れ夫と別れてより夫は遠く黃雲千里の鴈門關に至り、復た還るの期なし。夫に別れしは昨日の如きも、今や既に露繁き秋となりぬ。蕙草の凋衰は惜むに足らざれども、夫の行路の苦を思ひては悲に堪へず。一別の後相見るの難きは、瓊樹の見難きに異ならず。然りと雖も女蘿の松栢に託し、水萍の水に依るが如く、己も堅く夫に附きて心を移すことなきなり。

(二二)李都尉從軍陵

(二三)罇酒征人を送り、(二四)踟蹰親宴に在り。日暮れて浮雲滋し、手を握りて涙霰の如し。(二五)悠悠たる清川の水、(二六)嘉魴薦むる所を得たり。而るに我れ萬里に在り、(二七)結髮して相見ず。袖中に短書あり、願くは雙飛の燕に寄せん。

【大意】酒宴を開いて行人（漢に歸らんとする蘇武を指す）を送り、浮雲を見て特に感を深うし、手を握りて別を惜む。思ふに清川の魴魚は味の美なるを以て薦むる所を得、我は命拙きを以て夫妻相見るを得ず。願くは書を南飛の燕に寄せ、以て妻に與へんと欲す。

【二二】李都尉。都尉は官名、漢の李陵なり。
【二三】罇酒。樽酒なり。征人は行人なり。
【二四】踟蹰。徘徊なり。
【二五】悠悠。流水の貌。
【二六】嘉魴。魴は魚の名、嘉はよきこと。
【二七】結髮。夫妻となること。一本に結友に作る。

(二八)班婕妤詠扇

(二九)紈扇圓月の如く、機中の(三〇)素より出づ。畫き作す(三一)秦王の女、鸞に乘りて煙霧に向ふ。彩色は世の重んずる所、新なりと雖も故きに代らず。竊に愁ふ涼風至り、我が玉階の樹を吹かんことを。君子恩未だ畢へず、零落して(三二)中路に在り。

【大意】機中に紈素を織り、之を以て團扇を作る。其形圓くして月の如し。上に弄玉の鳳凰に乘りて天に昇る圖を描き、以て自ら慕ふ。彩色重んずべしと雖も、新を以て故に代ふべからず。常に秋風至り棄てて用ひられず、君子の恩愛中途にして絶えんことを恐る。

【二八】班婕妤。卷十四に見ゆ。
【二九】紈扇。白絹にて作りし團扇。
【三〇】素。白き絲。
【三一】秦王の女。列仙傳に「簫史は秦の穆公の時の人、よく簫を吹く、穆公に女あり弄玉と字す、之を好む、公遂に以て史に妻す、一旦皆鳳凰に隨つて飛び去る」とあり。
【三二】中路。中途なり。
【三三】飛閣。高閣なり。
【三四】神飆。靈風なり。
【三五】芙蓉。蓮花なり。
【三六】冠珮。近臣をいふ。
【三七】參差。簫なり。
【三八】小儒。文帝に擬して自ら謂ふ。

魏文帝遊宴曹丕

置酒して(三三)飛閣に坐し、逍遙して華池に臨む。(三四)神飈遠きより至り、左右に(三五)芙蓉披く。綠竹清水を夾み、秋蘭幽崖を被ふ。月出でて園中を照し、(三六)冠珮相追隨す。客南楚より來り、我が爲に(三七)參差を吹く。淵魚猶ほ伏浦し、聽く者未だ云に疲れず。高文一に何ぞ綺き、(三八)小儒安んぞ爲すに足らん。(三九)肅肅として廣殿陰り、雀聲北林に愁ふ。衆賓城邑に還る、何を以てか吾が心を慰めん。

【大意】高閣の上に宴し、下りて華池の側を歩すれば、清風遠きより來り、蓮花左右に開き、綠竹秋蘭水涯に茂る。折しも月出でて園を照し、近臣衣冠を整へて我に隨ふ。我に遠來の客あり。我が爲に簫を吹けば、淵魚出でて聽き、聽く者疲るるを覺えず。從遊の人各〻佳詩を作り、我の能く及ぶ所にあらず。忽ち日暮れ鳥塒に就くに至り、衆賓各〻散じ去り、また我が心を慰むるなし。

(四〇)陳思王贈友曹植

君王英賢を禮し、千金の璧を愜まず。雙闕(四一)馳道を指し、(四二)朱宮第宅を羅ぬ。(四三)冰井の臺に從容すれば、清池(四四)華薄に映ず。涼風芳氣を盪し、碧樹秋に先だちて落つ。朝に(四五)佳人と期し、日夕(四六)青閣を望む。裳を褰げて明珠を摘り、(四七)徙倚して蕙若を拾ふ。我が二三子を眷みるに、辭義(四八)金艭より麗し。(四九)延陵寶劍を輕んじ、(五〇)季布然諾を重んず。富に處て貧を忘れ

【三九】肅肅。靜なる貌。
【四〇】陳思王。曹植は陳王に封ぜられ謚して思といふ。
【四一】馳道。天子通行の道。
【四二】朱宮。朱塗の宮殿。
【四三】冰井。魏都に在る臺の名。
【四四】華薄。花叢なり。
【四五】佳人。良友なり。
【四六】青閣。佳人の居る樓閣。
【四七】徙倚。徘徊なり。蕙若は香草なり。
【四八】金艭。丹青といふが如し。
【四九】延陵。吳の公子季札延陵に封ぜられ、延陵季子といふ嘗て上國に使し徐君に過る、徐君其寶劍を愛す、季子心に之を許す、使して還れば徐君既に死せり、乃ち劍を墓樹に挂けて去る。
【五〇】季布。漢書に「楚人なり楚の諺に曰く、黃金百を得るは季布の諾を得るに如かず」

ず、有道(五一)葵藿に在り。

【大意】君王賢士を禮遇し、千金の璧を惜まず。故に馳道を夾んで王侯の邸宅相列れり。我れ冰井臺に遊び、清池の花叢と相映ずるを見る。時正に秋にして清風至り、芳樹既に凋落せり。我れ佳人の來るを待ちて青樓を望み、明珠と蕙草とを採りて之に贈らんとす。諸子（友を指す）の文辭は金玉より美なり。我れ因つて諸子と交り、寶劍を輕んじ信義を重んず。富に居て貧者を忘れざるは、有道の士の草野に在るを知ればなり。

とあり。

【五一】葵藿。草野といふが如し。

劉文學感遇 槙

蒼蒼たる山中の桂、(五二)團團たる霜露の色。霜露一に何ぞ緊なる、桂枝生じて自ら直し。橘柚南國に在り、(五三)君に因りて羽翼をなす。謬りて(五四)聖王の私を蒙り、身を文墨の職に託す。(五五)丹彩既已に過ぐ。敢て自ら彫飾せざらんや。華月方池を照すとき、金殿の側に列坐す。微臣固より賜を受け、鴻恩良に未だ測らず。

【大意】君（曹植を指す）は山中の桂樹の如く、霜露嚴急なりと雖も、勁直の性を渝へず。我れは南國の橘柚の如く、君が力によりて聲譽を得、遂に聖主の恩を蒙り、君が文墨の臣となれり。（平原侯の庶子となれるをいふ）恩遇を受くること此の如し。當に自ら勉勵彫

【五二】團團。霜露の凝る貌。
【五三】君。曹植をいふ。
【五四】聖王。魏の文帝を指す。
【五五】丹彩。恩遇に喩ふ。

飾すべきなり。今花月の方池を照す處、金殿の側に列坐して盛宴に預る。鴻恩を受くること測り知るべからず。

王侍中懷德 粲

伊れ昔(五六)世亂に値ひ、馬に秣ひて帝京を辭す。既に(五七)蔓草の別を傷み、方に(五八)杕杜の情を知る。(五九)崤函復た丘墟、(六〇)冀闕緬に縱横。棹に倚りて(六一)涇渭に汎び、日暮れて山河清し。蟋蟀桑野に依り、嚴風枯莖を吹く。(六二)鸛鷁幽草に在り、(六三)客子涙已に零つ。鄉を去つて(六四)二十載、幸に天下の平なるに遭ふ。(六五)賢主嘉賞を降し、(六六)金貂して玄纓を服す。宴に侍して(六七)河曲に出で、(六八)蓋を飛ばして鄴城に遊ぶ。(六九)朝露竟に幾何ぞ、忽たること水上の萍の如し。君子惠義を篤くし、(七〇)柯葉終に傾かず。(七一)福履既に綏んずる所、千載令名を垂る。

【大意】此れ魏武帝（曹操）の德を懷ふなり。われ昔漢末董卓の亂に遇ひ、帝都を去りて亂を避け、

【五六】世亂。漢末董卓の亂をいふ。
【五七】蔓草。詩經の篇名、野有蔓草なり。
【五八】杕杜。詩經の篇名。
【五九】崤函。崤山及び函谷關。
【六〇】冀闕。象闕なり、敎令を記列するを以て冀闕といふ、冀は記なり。
【六一】涇渭。二川の名。
【六二】鸛鷁。ともに水鳥の名。
【六三】客子。王粲に代りて謂ふ。
【六四】二十載。二十年なり。
【六五】賢王。魏の太祖を指す。
【六六】金貂。玄纓は侍中の服飾なり。
【六七】河曲。河のほとり。
【六八】蓋。車蓋なり。鄴城は魏の都。
【六九】朝露。人命に喩ふ。
【七〇】柯葉。枝葉なり。
【七一】福履。福祿なり。

既に別離行旅の苦を傷み、秦時の舊關城闕の丘墟となれるを見、或は川に棹さし或は山を越え、蟋蟀の草野に鳴き急風の枯草を吹き、水鳥の深草に隱るるに遇ひ、涙を流して亂離を悲めり。家を離れて二十年にして戰亂平ぎ、賢主（魏の武帝）我を擧げて侍中となす。乃ち鴈に從ひて宴遊をなす。夫れ人命は朝露の如し。武帝忽焉として崩じぬ。然れども恩義を厚うせるを以て、その遺澤永く盡きず。既に天の福祿を得て美名を後世に垂る。

秫中散言志康

曰に余師訓あらず、志を潛めて世塵を去る。遠く想ひて宏域を出で、高步して常倫を超ゆ。靈鳳羽儀を振ひ、景を西海の濱に戢む。朝に琅玕（一）の實を食ひ、夕に玉池の津（二）を飲む。順に處て故より累なく、德を養ひて乃ち神に入る。曠なる哉宇宙の惠、雲羅更〻四陳す。（三）哲人は義を識るを貴び、大雅身を庇ふを明にす。莊生は無爲を悟り、老氏は其眞を守る。天下皆一（四）を得、名實（五）互に賓主となす。

【七】琅玕。美玉なり。
【七】津。液なり。
【七】雲羅。雲の網。四陳は四方に張ることゝ。
【七】哲人。智者なり。
【七】大雅。詩經の篇名。
【七】一を得。老子に「天は一を得て以て淸く、地は一を得て以て寧く、王侯は一を得て以て天下の正をなす」とあり。
【七】名實。莊子に「名は實の賓たり」とあり。
【七】咸池。黃帝の音樂。爰居は海鳥の名、莊子に「海鳥魯郊に止る、魯侯之を廟に觴し九韶を奏して以て樂となし、太牢を具へて以て膳となす、鳥眩視憂悲して敢て一臠を食はず、敢て一杯を飮まず、三日にして死す、此れ己の養を

を養せば、鍾鼓或は愁辛。（六）柳惠直道を善し、（七）孫登人を知るに庶し。寫懷良に未だ遠からず、感贈して以て紳に書す。

【大意】われ師の敎訓を受けず。故に俗事に疎し。乃ち世間を出で俗輩を越え、鳳凰と同じく光景を匿し、瓊樹の實を食ひ、玉池の水を飮み、隱遁高潔の行をなす。既に順に處て累なく、道德を以て自ら養ふ。天地の惠廣大にして、雲羅の四方に布陳するが如し。夫れ智者は義理を識るを貴び、大雅は其身を庇ふべきを明にす。故に老子莊子は天眞を守り無爲を道とす。天下皆一を得、名實互に賓主となる。禮樂は美なりと雖も、鳥之を聞かば却つて悲愁辛酸す。（榮祿は美ならざるにあらざれども、之を視ること鳥の鐘鼓の音を聞くが如きに喩ふ）われ直道を以て幽繫せらるること、柳下惠の如し。かの孫登實に人を知るの明ありと謂ふべし。既に幽憤の懷を寫して、未だ眞理を盡さず、故に所感を述べて世人に贈り、又紳に書して自ら戒む。

阮步兵詠懷籍

【六】柳惠。柳下惠なり、嘗て士師となりて三たび黜けらる人曰く子未だ以て去るべからざるかと、曰く道を直くして人に事へば焉に往くとして三たび黜けられざらんやと。
【七】孫登。魏氏春秋に「初め嵇康嶽を中山に採り隱者孫登を見る、康之と言はんと欲す登默然として對へず、年を踰えて將に去らんとす、康曰く先生竟に言ふなきかと、登乃ち曰く、子は才多く識寡し、難いかな今の世に免るるやと」とあり。

(八二)青鳥海上に遊び、(八三)鷫斯蒿下に飛ぶ。(八四)沈浮相宜しからず、羽翼各〻歸あり。(八五)飄颺して年を終ふべし、(八六)沆瀣安んぞ是非あらん。朝雲變化に乘ず、光耀世の希なる所。(八七)精衛木石を銜む、誰か能く幽微を測らん。

【大意】海鳥は海上に遊び、小鳥は蓬下に飛ぶ。その高下相同からずと雖も、其の性に適して逍遙するは則ち相同じ。一は蓬下に飄颺し、一は大海に沆瀣するも、その樂は則ち一なり。何ぞ是非優劣あらんや。昔高唐の女神、化して朝雲となる。其の光色當代に稀なりしも、榮華は妄に冀ふべからず。精衛木石を銜みて大海を塡め、日夕勞苦すれども、蓬下幽微の處にあれば、誰か之を妨ぐる者あらんや。我れ之に倣はんのみ。

張司空離情

秋月(八八)簾櫳に映じ、光を懸けて(八九)丹墀に入る。佳人鳴琴を撫し、清夜(九〇)空帷を守る。蘭澤行迹

【八二】青鳥。海鳥なり。
【八三】鷫斯。からすの一種。詩經に「弁たる彼の鷫斯」とあり。蒿は蓬。
【八四】沈浮。沈は蒿下をいひ、浮は海上をいふ。
【八五】飄颺。輕飛の貌。
【八六】沆瀣。廣大の貌。
【八七】精衛。鳥の名、山海經に「發鳩の山に鳥あり精衛と名づく、赤帝の女娃東海に遊び溺死して反らず、化して精衛となり、常に西山の木石を取り以て東海を塡む」とあり。
【八八】簾櫳。櫳はかホマド。
【八九】丹墀。朱を以て塗りし階上の地。
【九〇】空帷。空閨といふが如し。

少く、玉臺(九一)綢絲を生ず。庭樹(九二)紅彩を發し、閨草(九三)碧滋を含む。(九四)延佇して綾綺を整へ、萬里(九五)所思に贈る。願くは(九六)湛露の恵を垂れ、我が(九七)皎日の期を信にせんことを。

【大意】明月簾窓に映じ、光を垂れて丹墀に入る。一美女あり空閨を守りて琴瑟を弄す。徑に往來の人なく、樓に人影なし。庭樹花を開き草は綠を含む。佇立して綾綺を整理し、以て遠く夫に贈らんとす。偏に夫の恩恵を垂れて、我が此心を信せんことを望む。

潘黃門述哀岳

青春(九八)天機を速にし、(九九)素秋白日を馳す。(一〇〇)美人重泉に歸し、(一〇一)悽愴して終畢なし。(一〇二)殯宮已に肅清、(一〇三)松栢轉た蕭瑟たり。俯仰して未だ弭む能はず、尋念ただ一のみにあらず。衿を撫でて寢を安置する室。肅清は寂寞。

【九一】綢絲。蚰蛛の巢。
【九二】紅彩。花なり。
【九三】碧滋。綠にして繁ること。
【九四】延佇。久しく立つこと。綾綺はアヤギヌ。
【九五】所思。夫をいふ。
【九六】湛露。夫の恩恵に喩ふ。
【九七】皎日。明なる日、堅き誓に喩ふ。
【九八】天機。天の運行。
【九九】素秋。秋の色は白、故に秋を素秋といふ。
【一〇〇】美人。潘岳の妻を指す。重泉は黄泉。
【一〇一】悽愴。悲傷なり。
【一〇二】殯宮。葬るまでの間、柩
【一〇三】松栢。墓に植ゑし木。蕭瑟は風の淋しく吹く聲。
【一〇四】悦然。自失の貌。
【一〇五】綺窓。アヤギヌを以て飾りし窓。
【一〇六】蕙質。美しき姿。
【一〇七】萱草。草の名、此草人を

らず、永懷夢寐に寄す。夢寐復た（一〇）冥冥たり、何に由りてか爾の形を覿ん。我れ（一〇A）北海の術に慙ぢ、爾（一〇）帝女の靈なし。駕して言に（一一）遠山に出で、徘徊して（一二）松銘に泣く。雨絶えて還雲なく、花落ちて豈英を留めんや。日月方に序を代ふ、（一三）寢興何れの時か平ならん。

【大意】此れ亡婦を悼む詩なり。春忽ち去りて今既に秋となりしも、妻の死を悲んで極り已むことなし。殯宮寂寞として墓上の松柏風淋し。我が尋思哀念ただ一途にあらず、寂寞を傷んで惘然として自失せるが如し。我が憂は萱草の能く消す所にあらず、ただ夢寐を借りて相見んことを思ふも、夢中見る所明瞭ならず。然れども我に北海の術なく、汝亦巫山神女の靈なし。何に由りてか相見るを得ん。出でて墓を弔ひ碑に對して淚を濺ぐ。ああ雨絶えては雲還らず、花落ちては英を留めず。（人の死して還らざるに喩ふ）復た如何ともすべきなし。日を經ること既に久しきも、追慕の情かくの如し。何れの時にか安んじて起臥するを得ん。

（一）冥冥。暗昧なり。
（一A）北海。列異傳に「北海の營陵に道人あり、能く人をして死人と相見しむ」とあり。
（一〇）帝女。宋玉集に「楚の襄王宋玉と雲夢の野に遊び朝雲の館を望むに氣あり須臾の間變化窮りなし、王問ふ此は是れ何の氣ぞと、玉對へて曰く昔先王高唐に遊び怠りて晝寢ぬ、夢に一婦人あり自ら云ふ我は帝の季女、名を瑤姬といふ、王の來遊を聞く、願くは枕席を薦めんと、王因つて之を幸す」とあり。
（一一）遠山。墓なり。
（一二）松銘。松下の碑なり。
（一三）寢興。起臥なり。

陸平原羈旅機

（一四）儲后嘉命を降し、恩紀（一五）微身に被る。（一六）明發桑梓を眷み、永歎して密親を懷ふ。念を流して（一七）南澨を辭し、怨を銜んで（一八）西津に別る。馬を馳せて淮泗に遵ひ、旦夕梁陳を見る。義に服して（一九）上列を追ひ、迹を矯げて宮臣に厠る。（二〇）朱黻咸髦士、（二一）長纓皆俊人。（二二）承華の內に契闊し。（二三）綢繆して歲年を踰ゆ。日暮聊か駕を摧べ、逍遙して（二四）洛川を觀る。（二五）徂沒拱木多く、（二六）宿草寒煙を陵ぐ。遊子（二七）感愾し易く、（二八）躑躅して還りて自ら憐む。願うて言に（二九）三鳥に寄す、離思徒然にあらず。

【大意】われ太子の恩命を蒙り、太子洗馬に任ぜられ、洛陽に客となりて、常に故郷の親舊を懷ひ、嘗て江岸を辭し渡津に別れ、淮泗梁陳を經て來りし時を憶ふ。既に古人の道に遵ひて高官に伍し貴人に交る。その人皆英傑の士なり。かくて太子に事へて數年を過ぎぬ。夕に馬を驅りて

（一四）儲后。太子なり。嘉命は美命なり。
（一五）微身。陸機自ら謂ふ。
（一六）明發。早曉なり。桑梓は故郷。
（一七）南澨。南方の江岸。
（一八）西津。西方の渡場。
（一九）上列。貴官の人。
（二〇）朱黻。赤き膝蔽を著けし侍臣。髦士は俊傑。
（二一）長纓。長き冠の紐。
（二二）承華。太子の宮門の名。
（二三）契闊は勤苦すること。
（二三）綢繆。纏緜なり。
（二四）洛川。川の名、洛水なり。
（二五）徂沒。死亡なり。拱木は墓上の大木。
（二六）宿草。墓上の草。
（二七）感愾。一に感慨に作る。
（二八）躑躅。徘徊なり。
（二九）三鳥。楚辭に見ゆ、當時見る所の鳥を指して言ふ。定名にあらず。

洛水の邊に遊び、墳墓の多きを見、忽ち感慨を起して自ら憐れみ、離思を三鳥に寄せて故郷に傳へんと欲す。

左記室詠史思

(一三〇)韓公賣藥に淪み、(一三一)梅生市門に隱る。(一三二)百年信に荏苒、何を用てか心魂を苦むる。當に(一三三)衞霍の將たるを學ぶべし、功を建てて(一三四)河源に在り。(一三五)珪組賢君の眄、(一三六)青紫明主の恩。(一三七)終軍才始めて達し、(一三八)賈誼位方に尊し。(一三九)金張貂冕を服し、(一四〇)許史華軒に乘る。王侯片議を貴び、公卿一言を重んず。太平歡娛多く、(一四一)蓋を東都の門に飛ばす。顧みて(一四二)張仲蔚を念ふ、(一四三)蓬蒿中園に滿つるを。

【大意】昔韓康は身を賣藥に淪め、梅福は門卒となりて隱れたりといふ。人生は暫時の夢の如し。何ぞ心を苦めて淪隱をなすべけんや。宜しく

【一三〇】韓公。後漢の韓康、字は伯休、常に名藥を長安市中に賣る。
【一三一】梅生。漢の梅福一朝妻子を棄てて去り名姓を變じて吳市の門卒となる。
【一三二】百年。人の壽命をいふ。荏苒は暫時なり。
【一三三】衞霍。衞青、霍去病、ともに漢の名將なり。
【一三四】河源。西域をいふ。
【一三五】珪組。珪は玉、組は綬。
【一三六】青紫。綬の色なり。
【一三七】終軍。漢書に「終軍長安に至りて上書す、武帝其文を異とし拜して謁者給事中となす」とあり。
【一三八】賈誼。漢書に「賈誼博士となる、文帝之を悅び超遷して歲中に太中大夫に至る」とあり。
【一三九】金張。金日磾、張安世、竝に累代漢に仕ふ。貂冕は冠なり。
【一四〇】許史。漢の許皇后、史良娣の家盛に奢侈をなす。華軒は美しき車。
【一四一】蓋。車蓋なり。
【一四二】張仲蔚。漢の扶風の人、隱れて仕へず、天官博物に明に好んで詩賦を作る、居る所蓬蒿人を沒す。
【一四三】蓬蒿。よもぎ。

衞青、霍去病の將となりて匈奴を征し、大功を建てしに倣ふべきなり。一たび功を建つれば、天子の恩顧を蒙りて金印紫綬を佩び、榮達すること終軍、賈誼の如く、衣冠を著け高車に乘ること金張許史の如くなるべく、王侯も其言を尊重するに至り、車を馳せて都門に遨遊するを得。飜つて張仲蔚を念ふに、蓬園中に茂りて人を沒せりといふ。何ぞかかる隱士に倣ふべけんや。

張黃門苦雨協

(一四四)丹霞陽景を蔽ひ、綠泉陰渚に涌く。(一四五)水鶴層甍に巢くひ、山雲柱礎を潤す。(一四六)有弇春節に興り、愁霖(一四七)秋序を貫く。(一四八)燮燮として涼葉奪ち、(一四九)戾戾として颸風擧る。高談して四時を玩び、(一五〇)索居して儔侶を慕ふ。青苔日夜黃なり、(一五一)芳蕤宿楚を成す。歲暮れて百慮交り、以て(一五二)延佇を慰むるなし。

【大意】雲集りて日を蔽ひ陰渚に綠水涌き、水鳥も高棟に巢くひ、雲氣柱礎を潤し、霖雨春より秋に至り、木葉漸く落ち急風頻に至る。われ高談して四時の景を玩び、離居して友を慕ふ。今や青苔漸く黃にして花草枯叢を成し、年將に盡きんとし、百慮心中に交れど

【一四四】丹霞。赤雲なり。陽景は日なり。
【一四五】水鶴。水鳥の名。層甍は高棟。
【一四六】有弇。雨の神。
【一四七】秋序。秋節なり。
【一四八】燮燮。漸漸なり。
【一四九】戾戾。急なり。颸風は風。
【一五〇】索居。離居なり。
【一五一】芳蕤。草木華盛の貌。宿楚は叢木。
【一五二】延佇。久しく待つこと。

も、友人の來るなく、我が久待の情を慰むるなし。

劉大尉傷亂琨

(一三)皇晉陽九に遘ひ、天下(一四)氛霧横はる。(一五)秦趙薄蝕に値ひ、(一六)幽幷虎據に逢ふ。伊れ余寵靈を荷ひ、感激して(一七)馳驅に徇ふ。(一八)六奇の術なしと雖も、冀くは張韓と遇はんことを。(一九)窖戚角を扣いて歌ひ、桓公遺ひて乃ち擧ぐ。(二〇)荀息險難を冒す、實に忠貞を以ての故なり。空しく日月をして逝かしめ、愧づらくは(二一)古人の度なきを。(二二)千里何ぞ(二三)蕭條たる、白日寒樹に隱る。袂を投じて既に憤懣し、枕を撫でて百慮を懷く。功名惜むらくは未だ立たず、(二四)玄髮已に素に改まる。時なる哉苟に齊に傅たらしむ、公疾む、之を召して曰く、是の藐たる諸孤を以て大夫に辱在す、其れ之を若何せんと、稽首し對へて曰く、臣股肱の力を竭し之に加ふるに忠貞を以てせん、其の濟るは君の靈なり、濟らずんば死を以て之に繼がん」とあり。

【二三】皇晉。大晉といふに同じ。陽九は災厄なり。

【二四】氛霧。亂賊に喩ふ。

【二五】秦趙。秦は姚弘の據る所。薄蝕は侵越は石勒の據る所。薄蝕は侵略。

【二六】幽幷。幽州は段匹磾の領する所。幷州は劉琨の領する所。虎據は威武の盛なるをいふ。

【二七】馳驅。奔走して賊を拒ぐこと。

【二八】六奇。漢書に「陳平、常に護軍中尉を以て從ひて臧荼陳豨を擊ち、凡そ六たび奇計を出す」とあり。

【二九】張韓。張良、韓信。

【三〇】窖戚。淮南子に「窖戚牛角を擊ちて歌ふ、桓公舉げて以て大田となす」とあり。

【三一】荀息。晉の大夫なり、左傳に「初め獻公荀息をして奚齊に傅たらしむ」とあり。

【三二】古人。窖戚荀息を指す。

【三三】城濠。城の周圍の溝。

【三四】蕭條。淋しき貌。

【三五】玄髮。黑髮なり。素は白髮。

【三六】會。運會なり。

【三七】冥數。運命なり。

會あり、治亂惟れ(二六)冥數なり。

【大意】此れ盧諶に贈る詩に擬せるなり。晉室災厄に遇ひ、亂賊四方に興り、秦趙皆賊の侵略に遇ふ。余乃ち段匹磾と幽幷二州に據りて之を拒ぐ。余既に君恩を蒙ること厚し。故に感激して討賊の事に從ふ。かの陳平が六奇の策なしと雖も、張良、韓信の漢の高祖に遇へるに同じからんことを望み、窖戚、荀息の忠貞を抱けるも、空しく歲月を送りて才略古人に及ばざるを恥づ。城を出でて北方沙漠の地に向ひ、天下を平定せんとすれば。戰亂を經て千里蕭條、荒野に人影なし。乃ち自ら憤怨憂慮し、安臥する能はず。功名未だ立たずして、白髮漸く多きを悲む。然りと雖も世の治亂は天命あり。徐に其機の至るを待たんと欲す。

盧郎中諶交諶

大廈異材を須ち、(二八)廊廟庸器にあらず。英俊世功を著し、多士(二九)斯位を濟す。眷顧して(三〇)綢繆を成し、廼ち(三一)時髦と匹す。(三二)姻媾久しく虛からず、(三三)契闊豈ただ一のみならんや。厄に逢ふこと既に已に同じく、危きに處るは恤ふる所にあ

【二八】廊廟。宰臣に喩ふ。庸器は凡庸の才。

【二九】斯位。天子の位。

【三〇】綢繆。親密なり。

【三一】時髦。當時の俊傑。

【三二】姻媾。婚姻を結ぶこと。

らす。常に先達の(一二四)槩を慕ひ、古を覩て得失を論ず。(一二五)馬服趙將となり、(一二六)疆場清謐を得たり。(一二七)信陵魏印を佩び、秦兵敢て出でず。(一二八)幄中の策なきを慨し、徒に(一二九)素絲の質に慙づ。羈旅して舊鄉を去り、感遇琴瑟に喩ふ。自ら顧るに(一三〇)杞梓にあらず。勉力(一三一)無逸に在り。更に以て友朋を畏る、(一三二)濫吹名實に乖く。

【一二四】契闊。勤苦なり。
【一二五】槩。志節なり。
【一二六】馬服。史記に「趙奢、大に秦軍を破る、趙の惠文王奢に號を賜ひて馬服君となす」とあり。
【一二七】疆場。境内なり。清謐は靜なり。
【一二七】信陵。史記に「魏の公子無忌、信陵君と號す」とあり。魏印は魏の將印。
【一二八】幄中。帷幄なり。
【一二九】素絲。白絲なり。淮南子に「墨子練絲を見て泣く、其の以て黄にすべく以て黑にすべきを以てなり」とあり。
【一三〇】杞梓。美材なり。
【一三一】無逸。逸樂に恥ぢざること。
【一三二】濫吹。韓非子に「韓の昭侯曰く竽を吹く者衆し、吾以て其善き者を知るなしと、田嚴對へて曰く、一一之を聽けば乃ち濫を知る」とあり。

【大意】劉琨に贈りて交情を謝するに擬するなり。大屋を構ふるには必ず瑰異の材を用ふべく、宰臣の職は凡庸の人に任ずべからず。英俊の人濟世の功を著し、衆士共に天子の位を翼く。我れ足下（劉琨を指す）の眷顧を受けて懇親を結び、當時の俊傑と相伍するを得、又婚姻を結び、（諶の妹、琨の弟に嫁す）同じく爭亂に遇ひて父母を喪ひ、勤苦すること一事に止らず。險厄に遇ふこと相同じきを以て自ら以て憂となさず。常に古人の志節を慕ひ其得失を觀、趙奢と信陵君とに則らんとす。然も帷幄に參して奇謀なく、善惡屢變ずるを慚づ。今や舊鄉を去りて幷州に在れども、尚ほ足下の恩遇琴瑟の和の如くなりしを懷ふ。自ら顧るに美材にあらず。勉めて逸樂に恥ることなきを期し、更に無能にして足下の下に在り、名其實に過ぎしを畏る。

郭弘農　仙　璞

(一三三)崦山靈草多く、海濱(一三四)奇石饒し。(一三五)偃蹇として青雲を尋ね、(一三六)隱淪して精魄を駐む。道人(一三七)丹經を讀み、(一三八)方士玉液を鍊る。(一三九)朱霞窻牖に入り、(一四〇)曜靈空隙を照す。(一四一)倣睨して木芝を摘り、波を陵いで(一四二)水碧を采る。(一四三)眇然たり萬里の遊、掌を矯げて(一四四)煙客を望む。永く(一四五)安期の術を得ば、豈(一四六)濛汜の迫るを愁へんや。

【大意】仙山には靈草あり、海濱には奇石あり、之を服用して以て仙となるべし。高山に登りて身を隱し、魂魄を留めて長壽を保つ。（魂魄身を去れば死するなり）山中には道士の仙書を讀み仙藥を

【一三三】郭弘農。郭璞卒して後弘農太守を贈らる。
【一三四】崦山。山なり。靈草は芝草、卽ち仙草なり。
【一三五】奇石。之を服して仙となるべし。
【一三六】偃蹇。高山に緣る貌。
【一三七】隱淪。迹をひそむること。精魄は魂魄。
【一三八】丹經。仙書なり。
【一三九】方士。道人に同じ。玉液は玉膏、仙藥なり。
【一四〇】朱霞。赤雲なり。
【一四一】曜靈。日なり。
【一四二】倣睨。縱誕の貌。木芝は紫芝、仙草なり。
【一四三】水碧。仙藥なり。
【一四四】眇然。遠き貌。
【一四五】煙客。仙人なり。
【一四六】安期。古の仙人の名。
【一四七】濛汜。日の入る處。

錬るあり、赤雲窓に入り日戸間を照す。ここに仙草を拾ひ仙藥を採り、一擧萬里に升り、手を擧げて飛仙を望む。よく仙術を脩め得ること安期の如くならば、豈歳月の身に迫るを愁へんや。

(一九八)張廷尉雜述綽

(一九九)太素既已に分れ、(二〇〇)吹萬形兆を著す。(二〇一)寂動苟に源あり、因つて(二〇二)殤子を夭なりと謂ふ。道喪びて(二〇三)千載を渉る。(二〇四)津梁誰か能く了にせん。思ふ(二〇五)扶搖の翰に乘り、卓然として風を陵いで矯らんことを。靜に(二〇六)尺棰の義を觀るに、理足りて未だ嘗て少からず。(二〇七)冏冏として秋月明に、(二〇八)軒に憑りて堯老を詠ず。迹を浪にして(二〇九)蚩姸なく、然る後に君子の道なり。(二一〇)領略一致に歸し、(二一一)南山綺皓あり。臂を交へて久しく變化し、火を傳ふるは乃ち薪草。(二一二)亹亹として玄思清く、胸中機巧を去る。物我俱に懷に忘るれば、以

【一九八】張廷尉。一本に孫廷尉に作るに從ふべし。
【一九九】太素。天地未だ分れざるをいふ。
【二〇〇】吹萬。元氣の萬物を生養すること。形兆は萬物のきざし。
【二〇一】寂動。靜動なり。
【二〇二】殤子。幼にして死せる人。夭はワカジニ。莊子に「殤子より壽なるはなし、而して彭祖を夭となす」とあり。
【二〇三】千載。千年なり。
【二〇四】津梁。道に喩ふ。
【二〇五】扶搖。風なり。
【二〇六】尺棰。一尺の杖。莊子に「一尺の棰日に其半を取れば、萬世竭きず」とあり。
【二〇七】冏冏。明なる貌。
【二〇八】軒。欄干なり。堯老は堯及び老子。
【二〇九】蚩姸。好惡なり。
【二一〇】領略。理要なり。
【二一一】南山。商洛山なり。綺皓は商山の隱者。
【二一二】亹亹。勉むる貌。玄思は深遠なる思。

て(二一三)鷗鳥に狎るべし。

【大意】天地の氣分れて萬物ここに生ず。大道の要はもと動靜源なし。今既に源あり。故に壽夭轍を異にし、殤子を以て夭となすに至る。大道喪びて今既に千年を歷、世復た之を明にする者なし。われ乃ち之を體得し、風に乘りて高く擧らんとす。かの一尺の棰を取りて其半を折れば、萬世を經るも窮り竭ることなし。欄に憑りて明月を望み、唐堯老子の德を歌ひ、混然として好惡を絕ち、乃ち君子の道となすに足る。大道の要は途を異にして一致に歸す。夫れ變化は執りて留むべからず、故に孔子と顏回と臂を交へて相守ると雖も、變化を停むる能はず。薪相繼ぎて火傳はる。甲死して乙生れ、乙來りて、甲去る。死生何ぞ哀むに足らんや。(事は莊子に出づ)此の深理を悟り、機巧の心を棄て、物我の差別を忘るれば、禽獸も我と狎れて懼るることなかるべし。

(二一四)許徵君自序詢

(二一五)張子內機に闇く、單生外像に蔽はる。

【二一三】鷗鳥。かもめ。莊子に「海上に人の鷗鳥を好む者あり、旦にして海上に之き鷗鳥に從つて遊ぶ、鷗鳥至る者百數、其父曰く吾聞く鷗汝に從つて遊ぶと、試に取り來れ吾之を玩ばんと、曰く諾と、明旦海上に之くに鷗鳥舞ひて下らず」とあり。

【二一四】許徵君。徵召に應じて仕へざる士を徵君といふ。許詢字は玄度、晉の高陽の人、會稽に寓居す。

【二一五】張子。莊子に「單豹といふ者あり巖居して水飲す、行

一時(二六)冥筌を排せば、(二七)泠然たり空中の賞。此の(二八)弱喪の情を遣り、神を資りて獨往に任す。藥を白雲の隈に采り、聊か以て養ふ所を肆にす。(二九)丹葩芳蘂を曜し、綠竹(三〇)閑敞を陰ふ。(三一)苒苒として意勝を寄せ、覺えず虛を陵いで上る。(三二)曲檻鮮颸を激し、石室幽響あり。去りて欲する所に從はん、得失(三三)外奬にあらず。至れる哉(三四)斤を操るの客、(三五)重明固より已に朗なり。(三六)五難既に灑落す。迹を超げて塵網を絕たん。

【大意】張毅は內治の幾微に暗く、單豹は外治の法則に暗し。此れ皆一方に偏して廣からざるなり。如かず塵俗の外に去り、泠然として空中を涉らんには。我れ既に生を好み死を惡むの情を棄て、わが神を持して獨往に任せ、仙藥を白雲の間に採り、紅花綠竹の閑地に居り、時に勝情を馳せて虛空に登り、或は曲窓石室に歸りて風響を聽く。願くは我が欲する所の道に從はん。得失は己の心に由る。何ぞ外物の勸勵する所ならんや。鼻上の堊を劉る者、容を動かさずして鼻上の堊を劉らしめし者、兩兩相待ちて始めて鼻を傷けず して堊を劉るを得るなり。今や世に相知の士なし。如かず養生の五難を脫落し、超絕して世事を去らんには。

殷東陽興、囑仲文

晨に遊んで萃る所に任す。悠悠として眞趣を蘊めり。雲天亦(三七)遼亮、時に賞心と遇ふ。青松(三八)秀蓼を挺で、(三九)惠色喬樹を出づ。清波の深きを極眺すれば、緬に石壁の素きに映ず。情を瑩きて(三〇)餘滓なく、衣を拂ひて塵務を釋つ。仁を求むること既に我より す。(三一)玄風豈外に慕はんや。直置宰る所を忘れ、(三二)蕭散慮を遺るるを得たり。

【大意】朝に遊んで觀望すれば、萬物竝に目中に聚り、悠悠として道の眞趣を蘊積し、雲天亦高明

【二六】冥筌。筌は魚を捕ふる器なり。塵俗に喩ふ。

【二七】泠然。涼しき貌。

【二八】弱喪。少にして故居を失ひし者をいふ。莊子に「予いづくんぞ死を惡むの弱喪にして歸るを知らざる者にあらざるを知らんや」とあり。

【二九】丹葩。紅花なり。芳蘂は枝葉。

【三〇】閑敞。靜廣の貌。

【三一】苒苒。遠き貌。意勝は俗に勝れる情。

【三二】曲檻。曲窓なり。鮮颸は涼風。

【三三】外奬。外部より勸勵すること。

【三四】斤を操るの客。莊子に「莊子曰く、郢人其鼻端を堊漫すること蠅翼の若し、匠石をして之を劉らしむ、匠石斤を運らし風を成す、聽して之を劉らしむ、堊を盡して鼻傷かず、郢人立ちて容を失はず、宋の元君之を聞き匠石を召して曰く、試に寡人の爲に之をなせと、匠石曰く臣嘗て能く之を劉れり、然りと雖も臣の質(容を動かざる人)死せること久し云云」とあり。

【三五】重明。鼻を傷けずして堊を劉る人と、容を動かさずして鼻を劉らせし人とをいふ。

【三六】五難。向秀嵇康の養生論を難じて曰く、養生に五難あり、名利滅せず此れ一難、喜怒除かず此れ二難、聲色去らず此れ三難、滋味絕えず此れ四難、神慮消散す此れ五難と。灑落は脫落なり。

【二七】遼亮。高明なり。

【二八】秀蓼。花なり。

【二九】惠色。媚色なり。喬樹は高樹。

【三〇】除滓。汙穢なり。

【三一】玄風。道をいふ。

【三二】蕭散。寂遠なり。

にして我が心に適し、青松花を開きて媚色あり。遠く山水を視れば、心中の汙穢を磨き去り、塵俗の事を解散す。われ既に道を我が身に求む。豈道を外物に求めんや。心專一にして主宰する所を忘れ、空遠にして思慮を遺れぬ。

謝僕射遊覽混

信なる矣、(二三三)物化に勞し、(二三四)憂衿未だ整ふる能はず。薄か言に郊衢に遵ひ、轡を捴べて(二三五)臺省を出づ。(二三六)淒淒として節序高く、(二三七)寥寥として心悟永し。(二三八)時菊巖阿に曜き、雲霞秋嶺に冠す。(二三九)眷然として良辰を惜み、徘徊して(二四〇)落景を踐む。(二四一)卷舒萬緒なりと雖も、動復(二四二)有靜に歸す。曾ち是れ(二四三)桑榆に迫し。歲暮れて乘る所に從ふ。(二四四)舟壑攀むべからず、懷を忘れて(二四五)匠郢に寄す。

【大意】我れ心を生死悲喜の事に勞し、常に憂を抱いて未だ安んずる能はず。乃ち郊外の道に遊びて情思を慰めんとし、車に駕して官署を出づ。時に秋風淒淒として心之が爲に覺悟し、秋菊を巖角に見、雲霞の山を蔽ふを見る。良辰の景に眷戀して、覺えず晩景に至る。萬物變化して止まずと雖も、皆同じく至靜に歸す。今我れ漸く老ゆ、亦心を執りて靜理に就かんと欲す。舟を海壑に藏すれば、人之を安固なりとなす。然も夜半に有力者（造物主）ありて之を負ひて走り、亦之を留むべきにあらず。人も亦是に同じ。自ら以て安固なりとなせども、四時變遷して留むべからず。遂に死に歸するなり。如かず百慮を忘れて知己に寄らんには。

陶徵君田居　潛

苗を種ゑて(二四六)東皐に在り、苗生じて(二四七)阡陌に滿つ。鉏を荷ふの倦ありと雖も、濁酒聊か自適す。(二四八)歸人煙火を望み、(二四九)稚子檐隙に候つ。(二五〇)君に問ふ亦何の爲ぞ、百年會ず役あり。ただ願くは桑麻成り、(二五一)蠶月紡績するを得んことを。(二五二)素心正に此の如し。(二五三)逕を開いて三益を望む。【大意】我れ隱居して農耕を事とす。身勞すと雖も酒を酌んで自ら慰するを得。夕に煙火を望んで

【二三三】物化。萬物の生死。莊子に「既に化して生れ又化して死す」とあり。
【二三四】憂衿。憂心なり。
【二三五】臺省。役所の名、尙書省なり。
【二三六】淒淒。風寒き貌。節序は氣節。
【二三七】寥寥。心の淸淨なる貌。
【二三八】時菊。秋菊なり。巖阿は山曲なり。
【二三九】眷然。顧戀の貌。良辰は好時。
【二四〇】落景。日暮の景。
【二四一】卷舒。盈縮變化なり。萬緒は萬端なり、多きをいふ。
【二四二】有靜。有の字意味なし。靜なり。老子に「夫れ物云云として其根に復歸す、根に歸るを靜といふ」とあり。
【二四三】桑榆。日の入る處、老年に喩ふ。
【二四四】舟壑。莊子大宗師篇に「夫れ舟を壑に藏し山を澤に藏するを固といふ。然れども夜半に有力者之を負ひて走る、昧者は知らざるなり」とあり。
【二四五】匠郢。二二四を見よ。知己者に喩ふ。

【二四六】東皐。東方の澤。
【二四七】阡陌。田のアゼ。
【二四八】柴車。粗惡なる車。
【二四九】歸人。陶潛自ら謂ふ。煙火は炊事の煙。
【二五〇】稚子。小子なり。
【二五一】君。陶潛自ら謂ふ。
【二五二】蠶月。養蠶の月。
【二五三】素心。本心なり。
【二五四】逕。庭中の小徑。漢の蔣詡、庭中に三逕を開けり。三益は三種の益友、論語に「益者三友、直を友とし諒を友とし多聞を友とするは益なり」とあり。

家に歸れば、童子喜んで我を簷下に待つ。因つて自ら問ふ。何が爲に自ら勞苦すると。自ら答へて曰く、人生百年皆勞役あり。誰か勞を免るる者あらんや。我れ耕織して自ら活計を營む。宿願ただ此の如し。時に益友を招きて、共に桑麻を談ずるのみ。

謝臨川遊山靈運

江海(二五五)遭廻を經にし、(二五六)山嶠盈缺を備ふ。(二五七)靈境信に淹留す、賞心徒設にあらず。(二五八)平明雲峯に登れば、杳として(二五九)廬霍と絶つ。(二六〇)碧障長く周流し、(二六一)金潭恆に澄澈す。桐林晨霞を帶び、石壁(二六二)初晰に映ず。(二六三)乳竇既に滴瀝、(二六四)丹井復た寥沈。(二六五)嵒崿轉た奇秀、(二六六)岑崟還て相蔽ふ。赤玉(二六七)瑤溪に隱れ、雲錦(二六八)沙汭に被る。夜は(二六九)猩猩の啼くを聞き、朝に(二七〇)鼯鼠の逝くを見る。(二七一)南中氣候暖に、(二七二)朱華白雪を凌ぐ。幸に(二七三)建德の鄕に遊び、奇を觀て(二七四)禹穴を經。身名竟に誰か辨ぜん、圖史終に磨滅す。

【二五五】遭廻。轉運なり。
【二五六】山嶠。山岳なり。盈は山をいひ、缺は谷をいふ。
【二五七】靈境。會稽をいふ。淹留は久しく留まること。
【二五八】平明。早曉なり。
【二五九】廬霍。二山の名。
【二六〇】碧障。玉山なり。
【二六一】金潭。臨海記に「白石山下に金潭あり、金光煥然たり」とあり。
【二六二】初晰。旭光なり。
【二六三】乳竇。鍾乳の穴。滴瀝は滴ること。
【二六四】丹井。朱砂の井。寥沈は深きこと。
【二六五】嵒崿。巖崖なり。
【二六六】岑崟。峻嶮の貌。
【二六七】瑤溪。玉溪なり。
【二六八】沙汭。沙岸なり。
【二六九】猩猩。鳥の名。
【二七〇】鼯鼠。むささび。
【二七一】南中。南方の國。
【二七二】朱華。紅花なり。
【二七三】建德。國の名、莊子に「南越に邑あり名けて建德の國と

且く(二七五)桂水の潮に泛び、月に映じて(二七六)海澨に游ばん。攝生は順に處るを貴ぶ。將に智者と爲に說かんとす。

【大意】江海は常に轉運して窮らず、山岳は高低の姿を備ふ。我れ久しく會稽の勝地に留り、山水の景を賞するは、孔子の所謂智者は水を樂み仁者は山を樂むものにして、決して偶然にあらず。朝に雲外の峰に登れば、杳然として高く廬霍二山に超え、衆山の竝び立てるを見、金水の淸く流るるを見る。更に赤霞と桐林と相映じ、旭光石壁を照し、鍾乳谷に滴り丹砂深井に湛へ、巖崖峻嶮にして沙石の美しきこと雲錦の如きあり。夜は猩猩の啼くを聞き朝には鼯鼠の飛ぶを見る。南方は溫暖なるを以て百花白雪を犯して開くあり。我れ嘗て建德の鄕に遊び、又禹穴の奇を探りしも、身名共に滅ひて今識る者なく、記錄する所の圖書亦見るべからず。願くは更に桂水に泛びて海上に遊ばん。時に安んじ順に處れば憂樂心に入らず。是れ攝生の理なり。我れ智者と此理を論ぜんと欲す。

顏特進侍宴延之

(二七七)太微帝宇を凝し、(二七八)瑤光神縣を正す。日を

いふ、其民愚朴にして私少く欲寡し」とあり。
【二七四】禹穴。夏禹の圖書を藏せし所。
【二七五】桂水。川の名。
【二七六】海澨。海岸なり。

【二七七】太微。星宮の名。帝宇は天子の宮殿。
【二七八】瑤光。北斗の第七星なり。神縣は赤縣神州なり。

揆りて書史を粲にし、都を相て聞見を麗にす。(二七九)漢に列りて仙宮を構へ、天を開いて寶殿を製す。桂棟(二八〇)夏屭を留め、(二八一)蘭橑冬霰を停む。青林(二八二)冥濛を結び、(二八三)丹巘葱蒨を被らしむ。山雲(二八四)卿靄を備へ、(二八五)池卉靈變を具ふ。(二八六)重陽清氛を集め、輦を下りて(二八七)玄宴を降す。(二八八)騖望して寰隧を分ち、(二八九)矚目して都甸を盡す。氣生じて川岳陰り、煙滅えて淮海見る。(二九〇)中坐朱組溢れ、(二九一)步櫩瓊弁筵る。禮登りて(二九二)睿情を佇うし、樂闋りて(二九三)皇眄を延く。(二九四)測恩踰逸に躋り、牒に泝つて浮賤に懵し。榮は(二九五)兼金を餽るより重く、(二九六)華を巡りて盈瑱に過ぐ。敢て(二九七)輿人の詠を飾り、方に(二九八)綠水の薦に慚づ。

【大意】匠人星宮に法りて天子の宮を作り、朱色の印綬。

【二九一】步櫩。長廊なり。瓊弁は玉冠。

【二九二】睿情。天子の感情。

【二九三】皇眄。天子の顧眄。

【二九四】測恩。深恩なり。踰逸は一本愉逸に作る。逸樂を極むること。

【二九五】牒。辭令書なり。浮賤は浮名ありて微賤なること。

【二九六】兼金。好金なり。

【二九七】華を巡る。未だ詳ならず盈瑱は盈尺の玉なり。

【二九八】輿人。衆人なり。左傳に「晉侯輿人の誦を聽く」とあり。

【二九九】綠水。古詩なり。

【三〇〇】赤亭。驛の名。

【三〇一】浦陽。江口の名。

【三〇二】千里別。古曲の名。

【三〇三】浮涙。落涙なり。

【三〇四】汎濫。廣く遊ぶこと。

【三〇五】苕亭。樓の高き貌。

星斗を觀測して方角を正し、書史に據りて日景を揆り、都(丹陽なり)を奠めて見聞を美麗にし、宮殿高く雲漢に聳え、香木を以て棟梁となし、夏涼しくして冬暖なり。宮を繞りて綠樹鬱葱として茂り、瑞雲搖曳して池草奇異なり。車駕ここに臨みて清宴を賜ふ。四方を遠望して雲煙の集散するを見、衣冠の臣の往來して樂めるを見る。禮成り樂終りて客將に散ぜんとするや、天子情を含んで顧眄することを久うす。ああ我れ深恩を賜りて逸樂を極め、職に任じて浮賤を恥づ。宴に侍するの榮華は兼金を賜るより重く、盈尺の璧に過ぎたり。我れ今輿人に倣ひて此詩を作り、以て陛下に獻ぜんとするも、終に古人綠水の詩に及ばざるを慚づ。

謝法曹贈別惠連

昨(三〇〇)赤亭の渚を發し、今(三〇一)浦陽の汭に宿す。方に雲峯の異なるを作す、豈伊れ(三〇二)千里の別のみならんや。芳塵未だ席に歇きず、(三〇三)涕淚猶ほ袂に在り。艫を停めて極浦を望み、棹を弭めて風雪に阻る。風雪既に時を經、夜永くして起ちて懷思す。(三〇四)汎濫たり北湖の游、(三〇五)苕亭たり南樓の期。翰を黷じて新賞を詠じ、(三〇六)奏を開いて疑ふ所を瑩く。芳を摘みて氣の馥しきを愛し、藥を拾ひて色の滋きを憐む。色滋きも(三〇七)沃若を畏れ、人事亦

銷鑠す。(三〇九)子衿

往く勿きを怨み、(三一〇)谷風輕薄を誚る。共に(三一一)延州の信を乘り、(三一二)仲路の諾に慙づるなし。(三一三)靈芝と(三一四)三秀を望み、(三一五)孤筠情の託する所。託する所已に殷勤、祇人を懷ふを攬すに足る。今(三一六)嶓嶕の外に行き、思を銜んで海濱に至る。子を覿んとするも杳として未だ儻えず、(三一七)款睇何れの辰にか在らん。(三一八)雜珮贈るべしと雖も、(三一九)疏華竟に陳るなし。陳ぬるなくして心(三二〇)悁勞す。(三二一)旅人豈遊遨せんや。幸に風雪霽れ、青春に及び、纓を解いて(三二二)前侶を候ち、(三二三)還望して方に鬱陶たり。煙景離遠するが若く、末響(三二四)瓊瑤を寄す。

【大意】此れ遠行の途上より鄉里の友に寄するに擬するなり。我れ昨日赤亭驛を發して、今日浦陽に宿せり。既に足下と雲山を隔つ。豈古人千里の曲あるのみならんや。足下の芳塵尙ほ席に殘り、別離の淚猶は我が袖に在り。風雪に阻てられて舟を停むるに因り、遙に足下を廻顧し、深夜起坐して思を馳す。乃ち嘗て共に北湖に遊び南樓に會し、筆を執りて新詩を詠じ、書帙を開いて疑義を尋ね、芳草を摘みて香色の盛美なるを愛し、坐に草木の枯槁し人事の衰散し易きを畏れ、子衿谷風の篇は輕薄にして友道の絶ゆるを誚れども、吾等は信を執りて、季札、子路の二人に慚ず、心を芝筠の芳堅なるに託せしことを思ふ。我が心を託すること既に此の如く深し。今却つて足下を懷ふの情を亂すに足るのみ。今嶓嶕二山の外を過ぎ、海濱に至らんとするに、足下を見ることを思へども杳として見るべからず。歡會の期亦知るべからず。空しく憂を增すのみ。幸に風雪霽れて春色江畔に滿つるに因り、舟を發せて前に致す能はず。空しく憂を增すのみ。疏麻の華を折りて足下に贈らんとするも、道遠くしんとし、廻顧して又憂ふ。相去ること既に遠し。乃ち此詩を贈りて音信を通ず。

【三〇六】猋。峽なり。
【三〇七】沃若。盛なる貌。
【三〇八】銷鑠。衰散なり。
【三〇九】子衿。詩經の篇名。朋友の道絶えて相往來せざるを詠す。
【三一〇】谷風。詩經の篇の名。
【三一一】延州。吳の季札なり、四九を見よ。
【三一二】仲路。仲由、字は子路、孔子の弟子なり。論語に「子路宿諾なし」とあり。
【三一三】靈芝。神芝なり。三秀は芝草、皆仙草なり。
【三一四】孤筠。竹なり。竹は四時色を改むることなし。
【三一五】嶓嶕。二山の名。
【三一六】款睇。相見て懇歡すること。
【三一七】雜珮。腰に佩ぶる玉なり詩經に「雜珮以て之に贈らん」とあり。
【三一八】疏華。瑤華なり。楚辭に「疏麻の瑤華を折り、將に以て離居に遺らんとす」とあり。
【三一九】悁勞。憂ふること。
【三二〇】旅人。謝惠連自ら謂ふ。
【三二一】江皐。江澤なり。
【三二二】前侶。前行の徒。
【三二三】還望。顧望なり。鬱陶は哀思すること。
【三二四】瓊瑤。音信なり。

王徵君養疾微

窈藹として瀟湘空し。(三二五)翠磵澹として滋し。(三二六)寂歷として百草晦き、(三二七)欷吸として鵾雞悲む。(三二八)清陰往來遠く、(三二九)月華前墀に散ず。(三三〇)藥

【三二五】窈藹。深遠の貌。瀟湘は二川の名。
【三二六】翠磵。綠の溪谷。
【三二七】寂歷。凋疎の貌。
【三二八】欷吸。疾き貌。鵾雞は鳥の名。
【三二九】清陰。日なり。
【三三〇】月華。月光なり。前墀は

を鍊りて〔三二〕虛幌を曠、悉を汎して遙帷に臥す。〔三三〕水碧驗未だ驩まず、〔三四〕金膏靈詎ぞ緬まん。北渚に〔三五〕帝子あり、〔三六〕蕩漾として期すべからず。悵然たり山中の暮、痾を懷いて此詩を屬す。

【大意】瀟湘の間に病臥する意なり。瀟湘幽深にして澹然として滋味なく、百草枯れて鵾雞悲鳴す。われ山中の虛室に在りて、藥を鍊り琴を彈ず。仙藥の靈驗尙ほ未だ顯れず。北渚に神女あれども、波に隨つて上下し、之と期會を結ぶべからず。悵然として病に臥し、遂に此詩を作りぬ。

【三一】前階。
【三二】虛幌。虛窓なり。
【三三】水碧。水玉、仙藥なり。
【三四】金膏。仙藥なり。
【三五】帝子。湘水の女神、娥皇女英。
【三六】蕩漾。波に隨つて上下することなり。

袁太尉從駕淑

宮廟は禮哀敬、〔三六〕枌邑は道嚴玄なり。恭潔明祀に由り、蕭駕〔三七〕祈年に在り。徒に詔して〔三八〕季月に登り、〔三九〕鳳を戒めて行川を濩す。〔四〇〕雲旆漢の徒るに象り、〔四一〕宸網星の懸るに擬す。〔四二〕朱櫂寒渚に麗く、〔四三〕金鉞秋山に映ず。〔四四〕羽衞流景に藹たり、〔四五〕綵吹沈淵に震ふ。〔四六〕詩を辨べ

【三六】枌邑。漢の豐邑に枌社あり、宋は漢の子孫なるを以て枌社を祭る。
【三七】祈年。豐年を祈ること。
【三八】季月。三六九十二、四季の月をいふ、ここは九月なり。
【三九】鳳。鳳蓋なり。行川は行く所の川。漢は麗なり。
【四〇】雲旆。天子の旗。漢はアマノガハ。
【四一】宸網。天子の車上の珠網。
【四二】朱櫂。朱漆を以て飾れる轎竿。
【四三】金鉞。馬冠なり。
【四四】羽衞。羽を負へる衞兵。
【四五】流景。日。藹は映なり。

て京國を測り、〔四七〕籍を履んで都壤を鑑る。〔四八〕萌謠玉律に響き、〔四九〕邑頌丹紱に被らしむ。〔五〇〕文軫桂海に薄り、聲敎〔五一〕冰天を燭す。和惠〔五二〕上笏を頒ち、〔五三〕恩渥下筵に洽し。幸に〔五四〕洛を觀るの後に侍す。豈〔五五〕河を巡るの前を慕はんや。義に服して方に沫むことなし。歌を展べて殊に未だ宣べず。

【大意】袁淑の御史中丞たりし時、宋の高祖が廟を拜し、竝に南郊に祭るに從ひて作れる詩に擬せるなり。禮祭の道哀敬を致し嚴肅を極め、恭潔にして事を脩め、親しく臨んで豐年を祈る。乃ち徒衆を戒めて宮殿を發し、車駕山川を照し、雲旗は天漢の廻旋するが如く、車上の珠網は天星の懸れるが如く、侍衞の士日光に輝き、簫管の聲深淵に震ふ。詩を陳べて京邑の風を觀、聽斷の書を視て都邑の寃枉を知り、田夫野老の歌頌を採りて、玉律朱紱の樂を製す。かくて聲敎洽く海內に及び、和澤大臣に及び、施いて微臣に及ぶ。我れ既に扈從して洛を觀るの幸を得たり。何ぞ前君河を巡るの美を慕はんや。天子の道義に服し

【四七】籍。聽斷の書なり。都壤は都邑なり。
【四八】萌謠。田夫の歌。
【四九】邑頌。邑老の頌。
【五〇】綵吹。綵衣を著たる人簫管を吹くなり。沈淵は深淵なり。
【五一】詩を辨べ。辨は陳なり、禮記に「天子五年に一たび巡狩し太師に命じて詩を陳べしめ以て民風を觀る」とあり。
【五二】文軫。軫は車なり。禮記に「書は文を同うし、車は軌を同うす」とあり、天下一統の證なり。桂海は南海。
【五三】冰天。北方の土。
【五四】上笏。大夫の爵なり。
【五五】恩渥。厚恩なり。
【五六】洛を觀る。湯王洛を觀、黃魚の瑞あり。
【五七】河を巡る。堯河濱に居る神龜圖を負ひて至る。

て已むことなく、歌詩を展ぶと雖も、未だ其美化を宣揚する能はず。

謝光祿遊莊

齡を肅へて郊際を出で、樂を徒して江陰に逗る。翠山方に[三五六]藹藹たり、青浦正に[三五七]沈沈たり。涼葉沙嶼を照し、[三五八]秋榮水滸を冒ふ。風散じて松架險に、雲鬱して石道深し。靜默して[三五九]緜野を鏡、四睇すれば[三六〇]曾岑亂る。氣清くして[三六一]鴈引を知り、露華にして猨音を識る。[三六二]雲裝信に斂を解き、[三六三]煙駕金を辭すべし。始めは[三六四]丹泉の術を整へ、終には[三六五]紫芳の心を覿ん。[三六六]行光自ら容裔たり、[三六七]弱思をして侵さしむるなし。

【三五六】藹藹。盛なる貌。
【三五七】沈沈。深靜の貌。
【三五八】秋榮。秋花なり。水滸は水濱。
【三五九】緜野。遠野なり。
【三六〇】四睇。四方を望むこと。曾岑は高山。
【三六一】鴈引。鴈行なり。
【三六二】雲裝。雲霓を以て衣裳となすなり。斂は印綬。
【三六三】煙駕。煙車なり。金は金印。
【三六四】丹泉。仙泉なり。之を飲めば死せず。
【三六五】紫芳。紫芝、仙草なり。
【三六六】行光。精神の滅びざるをいふ。容裔は自在の貌。
【三六七】弱思。俗慮なり。

【大意】舟を整へて郊端を出で樂を奏して江陰に止れば、山は翠色を疊み、江水は深靜なり。花葉沙洲を蔽ひ風雲去來し、松危く道幽なり。眸を放ちて山野を望めば、氣清く露白く、鴈行猿聲耳目に爽なり。ここに以て紫綬金印を棄て雲衣を纏ひ、煙車に乘り仙道を脩むべし。我が神滅びずして自在を得たり。故に俗念をして侵害せしめず。

鮑參軍戎行　昭

豪士は[三六八]尺璧を枉げ、[三六九]宵人は恩光を重んず。義に徇ひて利の爲にするに非ず、[三七〇]羈を執りて輕く[三七一]孟冬郊祀の月、[三七二]殺氣嚴霜を起す。戎馬粟芻ならず、軍士冰を漿となす。晨に[三七三]城皐の坂に上れば、[三七四]磧礫皆羊腸。[三七五]寒陰白日を籠め、太谷晦くして[三七六]蒼蒼たり。徒を息はしめて征駕を稅き、劍に倚りて[三七七]八荒に臨む。[三七八]鷦鵬飛ぶ能はず、[三七九]玄武川梁に伏す。翮を鍛ぐこと時に由りて至り、物に感じて聊か自ら傷む。[三八〇]豎儒一經を守る。未だ[三八一]行藏を識るに足らず。

【三六八】尺璧。盈尺の玉。
【三六九】宵人。小人なり。
【三七〇】羈。馬を制馭する絆。
【三七一】孟冬。初冬十月、この月天子冬を北郊に迎ふ。
【三七二】殺氣。寒氣なり。
【三七三】城皐。坂の名。
【三七四】磧礫。小石なり。羊腸は屈曲なり。
【三七五】寒陰。寒雲なり。
【三七六】蒼蒼。昏冥なり。
【三七七】八荒。八方なり。
【三七八】鷦鵬。一は小鳥。一は大鳥。
【三七九】玄武。龜なり。
【三八〇】豎儒。賤儒なり。
【三八一】行藏。出處といふが如し。

【大意】小人は禮遇の恩に戀戀たるも豪傑の士は厚祿を辭して顧みず。我れ義に徇ひて利を求めず、馬を驅りて故郷を去り、以て遠征の軍に從ふ。北地は寒氣烈しくして、飲食の物忽ち凍り、坂路屈曲して太谷晝暗く、大鳥も飛ぶ能はず、魚鼈も水中に潛む。此の苦寒の身を害する時に當りて

は、聊か自ら傷まざるを得ず。かの一經を守るの腐儒の如きは、何ぞ出處進退の理を知るに足らんや。我の如き豪士にして、始めて身を挺して王事に勤むべきを知るなり。

休上人怨別

西北秋風至り、㊀楚客心悠なる哉。日暮㊁碧雲合し、㊂佳人殊に未だ來らず。露彩方に㊃泛灩、月華始めて徘徊。㊄寶書君が爲に掩ひ、㊅瑤琴詎ぞ能く開かん。㊆巫山の渚を相思ひ、陽雲の臺を悵望す。㊇膏鑪沈燎を絶ち、㊈綺席浮埃を生ず。㊉桂水日に千里、之に平生の懷を因す。

【大意】秋風西北より來り、吾が客心を憂へしむ。日暮れ雲合して吾が友來らず。白露光を浮べ、月光流動するも、共に眞經を披き讀む能はず、玉琴亦彈ずべからず。遙に友の處を悵望すれば、香鑪火滅えて薰ぜず、宴席塵埃を生ず。因つて桂水の急流に託し、平生の情を通ず。

【一】休上人。惠休、姓は湯氏宋人なり。上人は沙門の尊稱。【二】楚客。休上人自ら謂ふ。悠は志を失ふ貌。【三】碧雲。青雲なり。【四】佳人。友人なり。【五】泛灩。浮光の貌。【六】月華。月光なり。【七】寶書。眞經なり。【八】瑤琴。玉琴なり。【九】巫山、陽臺。皆楚の地名神女を以て朋友に喩ふ。【一〇】膏鑪。香鑪なり。【一一】綺席。絹を張りし席。【一二】桂水。川の名。

騷上

(二)離騷經

㊀帝高陽の苗裔、朕が㊁皇考を伯庸といふ。㊂攝提を孟陬に貞し、惟れ庚寅吾以て降る。皇覽て余を㊃初度に揆り、肇めて余に錫ふに㊄嘉名を以てし、余を名けて正則といひ、余を字して靈均といふ。㊅紛として吾れ既に此の㊆內美あり、又之に重ぬるに㊇脩能を以てす。㊈江蘺と辟芷とを扈り、秋蘭を紉んで以て佩となす。㊉汩として余將に及ばざらんとするが若し。年歲の吾と與ならざらんことを恐る。朝には㊊阪の木蘭を搴り、夕には洲の㊋宿莽を攬る。日月忽として其れ淹しからず、春と秋と其れ㊌序を代

【一】離騷經。離は遭なり、騷は愁なり、後人之を尊んで經となす。【二】屈平。名は平、字は原。楚と同姓なり、楚の懷王に仕へて三閭大夫となる、同列の大夫上官靳尙、其能を妬みて之を王に譖す、王乃ち屈原を江南に流す、原乃ち離騷を作り、遂に自ら汨羅に投じて死す。【三】帝高陽。太古の帝顓頊なり。苗裔は後裔。【四】皇考。考は亡父なり、皇は美稱。【五】攝提。歲星の寅をさす年卽ち寅の年。孟陬は正月。【六】初度。初めて生れし時の規度。【七】嘉名。美名なり。【八】紛。盛なる貌。【九】內美。內質の美。忠貞なり。【一〇】脩能。脩は長なり。長遠なる材藝。【一一】江蘺。香草なり、辟芷も香草。【一二】汩。急速なる貌。【一三】阪。陂に同じ、西山の間をいふ。木蘭は香木。【一四】宿莽。冬に遇ふも枯れざる草。

(三)屈平

ふ。草木の零落を惟ひ、(一六)美人の遲暮を恐る。壯を撫して穢を棄てず、何ぞ(一七)此度を改めざる。(一八)騏驥に乘りて以て馳騁し、來れ吾れ夫の(一九)先路に導かん。

【大意】吾は顓頊高陽氏（五帝の一人）の末孫にして吾が父を伯庸といふ。攝提の歲正月庚寅の日を以て、我れ母體を降りて此世に生る。余の初めて生るるや父其規度を覽て後日必ず善行あらんことを測り、余に名くるに美名を以てして正則といひ、字を靈均といふ。（屈原、名は平、字は原なり、今正則といひ靈均といふは、其意義を釋きて美稱となせるなり）我れ既に天賦の美質あり紛然として内に具る。又之に加ふるに材藝を以てし、香草を結んで衣佩となす。（博く衆善を採りて自ら約束するに喩ふ）己の自ら脩むるに汲汲として、常に及ばざるが如きは、歲月人を待たず、事成らずして老い去らんことを恐るればなり。故に山間の木蘭、沙洲の宿莽を採り。以て益々我が身を脩む。天時過ぎ易く春去り秋來り、次を以て相代る。かくて我が君老衰して其盛時に仕ふる能はざるを恐る。君宜しく壯盛の時に及び、佞人を遠ざけ讒に惑ふことを改むべし。若し此態度を改め賢士を用ひば、我れ當に君を導いて先王の道に進ましめん。

【一五】序。順序。
【一六】美人。楚王をいふ。遲暮は老衰なり。
【一七】此度。惡行なり。
【一八】騏驥。駿馬なり。賢人に喩ふ。
【一九】先路。先王の道。

昔(二〇)三后の純粹なる、固に(二一)衆芳の在る所なり。のみならんや。彼の堯舜の(二二)耿介なる、既に道に遵ひて路を得たり。何ぞ桀紂の(二三)昌披なる、夫れ唯(二四)捷徑以て窘歩せり。惟れ(二五)黨人の偸樂する、路幽昧にして以て險隘なり。豈余が身の殃を憚らんや、(二六)皇輿の敗績せんことを恐る。忽として奔走して以て先後し、(二七)前王の踵武に及ばんとす。(二八)荃余が中情を察せず。反つて讒を信じて齊く怒る。余固に(二九)謇謇の患たるを知れども、忍んで舍む能はざるなり。(三〇)九天を指して以て正すことをなすも、夫れ唯(三一)靈脩の故なり。初め既に余と(三二)成言し、後に(三三)悔遯して佗あり。余既に離別を難らざるも、靈脩の數〻化するを傷む。余既に(三四)蘭を九畹に滋え、又(三五)蕙を百畝に樹う(三六)留夷と揭車とを畦にし。(三七)杜衡と芳芷とを雜ふ。(三八)冀くは枝葉の(三九)峻茂せんこ

【二〇】三后。三王なり、禹湯文王をいふ。
【二一】衆芳。羣賢に喩ふ。
【二二】申椒。茵桂。並に香木の名。賢者に喩ふ。
【二三】蕙茝。共に香草の名。賢者に喩ふ。
【二四】耿介。光大なり。
【二五】昌披。衣を被りて帶せざる貌、放縱にして檢束なき也。
【二六】捷徑。邪道なり。窘歩は窮歩なり。
【二七】黨人。讒人の黨。偸樂は苟且偸安なり。
【二八】皇輿。皇は君、輿は君の乘る所、國に喩ふ。
【二九】前王。先王なり。踵武は遺迹。
【三〇】荃。香草なり。君に喩ふ。
【三一】謇謇。忠言の貌。
【三二】九天。天なり。神明なり。
【三三】靈脩。君をいふ。
【三四】成言。要約を結ぶこと。
【三五】悔遯。悔い遁るること。佗は他志なり。
【三六】蘭。蕙。香草なり、忠信に喩ふ。十二畝を畹といふ。
【三七】留夷。揭車。皆香草なり忠信に喩ふ。
【三八】杜衡。芳芷。皆香草なり忠信に喩ふ。
【三九】峻茂。長茂なり。

とを、願はくは時を竢ちて吾將に刈らんとす。(四〇)萎絶すと雖も其れ亦何ぞ傷まん、衆芳の蕪穢せんことを哀しむ。衆皆競ひ進んで以て(四一)貪婪なり、憑つれども求索に厭かず。羌内己を恕して以て人を量り、各〻心を興して嫉妬す。忽として(四二)馳騖して以て追逐するも、余が心の急にする所にあらず。老(四三)冉冉として其れ將に至らんとす、恐くは(四四)脩名の立たざらんことを。

【大意】禹湯文三王の純德ありしは、羣賢を登庸せしを以てなり。豈ただ一二の賢臣を用ひし故のみならんや。堯舜の光德ありしは、よく正道に遵ひしを以てなり。彼の桀紂の如きは放縱にして檢束なかりしを以て、邪路に迷ひて困窮せり。今や讒人黨を成し苟も身の逸樂を圖り、行ふ所暗昧險狹なり。我れ殃の身に及ぶを畏れずして諫諍するは、唯國家の傾頽せんことを恐るればなり。故に常に奔走先後して君を輔佐し、先王の遺迹を繼がしめんとするも、君我が衷情を察知せず。却つて讒を信じて我を斥く。我れ直言の禍を招くを知れり。然も默視するに忍びず。是れ偏に君を愛し國を思へばなり。豈他意あらんや。今天日に誓つて之を斷言す。君初め余を信任し後讒を信じて志を改む。然も余は疏斥せられしを怨みず、ただ君が志屢〻變じて常操なきを傷むのみ。因つて益〻忠信を勉め時を以て進用せられんことを願へり。然も

【四〇】萎絶。萎み落つること。
【四一】貪婪。貪慾なり。
【四二】馳騖。奔走なり。追逐は求索すること。
【四三】冉冉。漸漸なり。
【四四】脩名。脩潔の名聲。

未だ進用を經ずして廢棄せられしを悲む。今の衆臣は財利を貪りて飽くことを知らず、私心を以て他人を忖度し、心を同うせざる者あれば之を嫉妬す。財利を求むるは余が急務にあらず。空しく老衰して美名を得ざるは、余の最も恐るる所なり。

朝には木蘭の墜露を飲み、夕には秋菊の(四五)落英を餐ふ。苟も余が情其れ(四六)信姱にして練要ならば、長く(四七)顧頷するも亦何ぞ傷まん。木根を擥りて以て茝を結び、(四八)薜荔の落蘂を貫き、菌桂を矯げて以て蕙を紉び、(四九)胡繩の纚纚たるを索にす。謇吾れ夫の(五〇)前脩に法るは、時俗の服する所にあらず。今の人に周はずと雖も、願くは(五一)彭咸の遺則に依らん。長太息して以て涕を掩ひ、人生の艱多きを哀む。余好く脩姱し以て(五二)鞿羈すと雖も、謇朝に誶めて夕に替てらる。既に余を替つるに(五三)蕙纕を以てし、又之に申ぬるに(五四)攬茝を以てす。亦余が心の善する所、九死すと雖も其れ猶ほ未だ悔いず。怨むらくは靈脩の(五五)浩蕩として、終に夫の(五六)人心を察せざらんことを。(五七)衆女余の蛾眉を嫉み、(五八)謠諑して余以て善淫すと

【四五】落英。落花なり。
【四六】信姱。信實美好なり。練要は精練要約なり。
【四七】顧頷。飢うること。
【四八】薜荔。香草なり。落蘂は落ちし蕚。
【四九】胡繩。香草なり。纚纚は索の長き貌。
【五〇】前脩。前代脩德の人。
【五一】彭咸。殷の賢大夫なり。
【五二】鞿羈。自ら拘束して放縱ならざるなり。
【五三】蕙纕。香草の佩、忠信に喩ふ。
【五四】攬茝。香草を取ること。益忠信を勵むに喩ふ。
【五五】浩蕩。思慮なき貌。
【五六】人心。人民の疾苦。
【五七】衆女。讒臣に喩ふ。蛾眉は美貌なり、忠直に喩ふ。

謂ふ。固に時俗の工巧なる、(五九)規矩に倣いて改め錯き、(六〇)繩墨に背いて以て曲れるに追ひ、(六一)周容を競ひて以て度となす。(六二)忳として鬱悒して余(六三)佗傺し、吾獨り此時に窮困す。寧ろ溘に死して以て流亡すとも、余は(六四)此態を爲すに忍びず。(六五)鷙鳥の羣せざるは、前代よりして固に異にして相安んぜん。心を屈して志を抑へ、尤を忍んで詬を攘はん。清白に伏して以て直に死するは、固に前聖の厚うする所なり。

【大意】木蘭の露を飲み秋菊の華を食ひ、香潔を以て自ら潤澤す。苟も我が脩むる所信實美好にして精練要約ならば、長飢すと雖も悔いず。余の香潔を以て自ら脩むるは、古人に倣はんと欲するのみ。然も是れ今の俗人の好まざる所なり。因つて涙を拭ひて人生の多艱なるを悲む。既に脩潔美好にして自ら檢束して放縱ならざるも、一たび君を諫めて忽ち疏斥せらる。脩潔忠信は余の善しとする所なれば、之が爲に誅殺せらるるも悔ゆる所にあらず。ただ君の民の疾苦を思はず、讒人余の忠正を嫉み、余を毀るに淫行あるを以てするを怨む。今の俗人は先王の法度に遵はず、道を曲げて

【五八】謠諑。譖ること。
【五九】規矩。法則なり。
【六〇】繩墨。規矩に同じ。
【六一】周容。迎合なり。
【六二】忳。憂ふる貌。鬱悒は心結ぼれて舒びざる貌。
【六三】佗傺。志を失ふ貌。
【六四】此態。邪佞の態度。
【六五】鷙鳥。鷹の類の猛鳥、忠正の士に喩ふ。
【六六】方圓。方木圓穴なり。

苟も容れられんことを求む。我れ如何に窮困するとも、此の陋態を爲すに忍びず。忠正の士の俗人と合はざるは、敢て今日に始まるにあらず。方木と圓穴との相合はず、忠邪道を異にする者の共に安んずる能はざるは、古より然り。余ただ心を屈し志を抑へて隱忍し、正道を守りて死に就かん。是れ古聖人の重んずる所なり。

道を相るの察ならざるを悔い、(六七)延佇して吾將に反らんとす。朕が車を廻らして以て路に復り、(六八)行迷の未だ遠からざるに及ばん。余が馬を(六九)蘭皐に步ませ、(七〇)椒丘に馳せて且焉に止息す。進んで入らず以て尤に離はば、退いて將に復た吾が(七一)初服を脩めんとす。(七二)芰荷を制ちて以て衣となし、(七三)芙蓉を集めて以て裳となす。吾を知らずんば其れ亦已まん。苟も余が情其れ信に芳し。余が冠の(七四)岌岌たるを高くし、余が佩の(七五)陸離たるを長くし、芳と澤と其れ(七六)雜糅し、唯(七七)昭質其れ猶ほ未だ虧けず。忽ち反顧して以て目を游ばしめ、將に往いて(七八)四荒を觀んとす。佩(七九)繽紛として其れ繁飾し、芳(八〇)菲菲として其れ彌〻章なり。(八一)人生各〻樂ふ所あり、余獨り好脩して以て常となす。(八二)體解すと雖も吾猶ほ未だ變

【六七】延佇。長立なり。
【六八】行迷。道に迷ふこと。
【六九】蘭皐。香蘭の生ずる澤。
【七〇】椒丘。丘上に椒あるなり
　椒は香木。
【七一】初服。初めの行。
【七二】芰荷。芰は菱、荷は蓮葉なり。
【七三】芙蓉。蓮花なり。
【七四】岌岌。高き貌。
【七五】陸離。長き貌。
【七六】雜糅。相交ること。
【七七】昭質。昭明の美質。
【七八】四荒。四方絶遠の地。

せず。豈余が心の懲るべけんや。

【大意】忽ち自ら疑ふ、前日君に事ふるの道を視ること未だ明ならざるなきや否やと。遂に車を廻らして舊路に歸り、迷の未だ遠からざるに及ばんとす。乃ち馬を芳澤の中に歩ませ、椒丘に登りて休息し、進んで諫め、聽かれずして禍に遇はば、復た退いて初めの善行に服せんとす、益〻我身を脩潔し服飾を整へ威儀を盛にし、昭明の美質を損せざらんことを期す。然も君の顧る所とならず。故に忽ち反顧して去り、四方絶遠の地に遊ばんとし、因つて益〻服佩を盛にし志意を脩潔す。人の好む所各自同じからず、或は財利を好み或は邪佞を愛す。我れ獨り脩潔を好み、之を以て常行となす。たとひ此が爲に殺戮せらるるも、其の操守を變ずることなきなり。

(八三)女嬃の嬋媛たる、(八三)申申として其れ予を詈る。曰く(八四)鯀婞直にして以て身を亡し、(八五)終然として羽の野に夭せり。汝何ぞ(八六)博謇にして好脩し、(八七)紛として盈てるに、(八八)判として獨り離れて服せざると。衆には(八九)戸說

【七九】繽紛。盛なる貌。
【八〇】菲菲。芳香の貌。
【八一】體解。殺戮せらるること。
【八二】女嬃。屈原の姉なり。嬋媛は牽懸の貌。
【八三】申申。丁寧反復なり。
【八四】鯀。鯀なり、禹の父、堯の臣なり、堯鯀をして水を治めしむ、鯀狷介剛直にして堯の命を用ひず、終に羽山に殛せらる。
【八五】終然。つひに。夭は死なり。
【八六】博謇。廣博忠直なること。
【八七】紛。盛なる貌。脩節は美節。
【八八】判。別るる貌。
【八九】戸說。戸ごとに說き人ごとに告ぐること。

すべからず。孰か云に余の中情を察せん。世竝び擧りて朋を好めり。夫れ何ぞ(九一)煢獨にして予に聽かざる。

【大意】吾が姊女嬃吾が行衆と合はずして放流せられしを見、反復我を罵りて曰く、昔鯀の水を治むるや、剛直狷介にして堯の命を用ひざりしを以て、終に羽山に殛せられて死せり。汝何ぞ博廣忠直にして自ら脩潔し、獨り美節をなす。今や讒佞の人朝廷に滿てるに、汝獨り蘭蕙を服し忠直を守り、判然として衆と離れて棄斥せらるるは何ぞやと。ああ外には羣佞に困められ、內には姊の詈に遇ふ。余の心は戸毎に說き人毎に告ぐべからざれば、誰か我が中情を察知する者あらん。況んや世人竝に朋黨をなせるに、我れ孤獨にして忠直を守るをや。誰か我が言を聽いて之を用ふる者あらん。

前聖に依りて(九二)節中せんとし、(九三)喟として心に憑りて(九四)重華に就いて詞を陳ぶ。(九五)啓九辯と九歌とあるも、(九六)夏康娛んで以て自ら縱にし、難を顧みて以て沅湘を濟りて以て南に征き、

【九一】煢獨。孤獨なり。
【九二】節中。折衷なり。
【九三】喟。歎く貌。
【九四】沅湘。二川の名。
【九五】重華。舜なり。九疑山に葬る、沅湘の南に在り。
【九六】啓。禹の子なり、九辯九歌は禹の樂章なり。
【九七】夏康。啓の子太康なり。

て後を圖らざりしかば、(九八)五子用て家巷に失へり。(九九)羿淫遊して以て(一〇〇)佚田し、又好んで夫の(一〇一)封狐を射る。固に(一〇二)亂流して其れ終ること鮮し。(一〇三)澆又夫の厥の家を貪れり。(一〇四)澆が身彊圍に被服し、欲を縱にして忍びず。日に(一〇五)康娛して自ら忘れしかば、厥首用て夫れ顚隕せり。夏桀の(一〇六)常に違へる、乃ち遂に焉に殃に逢へり。(一〇七)后辛の葅醢にする、(一〇八)殷宗用て長からず。湯禹嚴にして祇敬し、周は道を論じて差ふなし。賢を舉げて能に授け、繩墨を脩めて頗かず。(一〇九)皇天は私阿なし。人德を覽て焉に輔を錯く。夫れ維れ聖哲にして以て茂行あれば、苟に此の(一一〇)下土を用ふるを得。前を瞻て後を顧み、人の計を相觀して極む。夫れ孰か義にあらずして用ふべけん、孰か善にあらずして服すべけん。余が身を陷くして死に危づくも、余が初を覽て其れ猶は未だ悔いず。(一一一)鑿を量らずして枘を正せば、固に前脩も以て葅醢にせられぬ。曾て(一一二)猷猷して余鬱悒し、朕が時の當らざるを哀み、(一一三)茹蕙を攬りて以て涕を

【九八】五子。太康の兄弟五人なり。
【九九】羿。夏の諸侯なり。
【一〇〇】佚田。遊獵に耽ること。
【一〇一】封狐。大狐なり。
【一〇二】亂流。亂行なり、水に喩へて言ふ。
【一〇三】淫。羿の相寒浞。家は妻なり。
【一〇四】澆。寒浞の子なり。彊圍は多力なり。
【一〇五】康娛。安樂なり。
【一〇六】常。道なり。
【一〇七】后辛。殷の紂王なり。葅醢は鹽漬にすること。
【一〇八】殷宗。殷の家系。
【一〇九】皇天。天帝なり。私阿は私親阿附なり。
【一一〇】下土。天下なり。
【一一一】鑿。孔を穿つ具、ノミ。枘はホゾ、木端を刻みて孔に入るるなり。
【一一二】猷猷。哀泣の聲。
【一一三】茹蕙。臭かなる香草。

掩へば、余が襟を霑して(一一四)浪浪たり。

【大意】乃ち前聖に依りて折衷せんとし、嘆息憤懣して沅湘を濟り、舜に就きて陳述して曰く、啓よく禹の業を繼ぎ九州の物皆辯數すべく、九功の德皆歌ふべし。乃ち九辯九歌の歌章あり。其子太康慾を縱にして安逸に耽り、患難を思ひて後圖をなさざりしかば、終に以て國を失ひ、兄弟五人亦閭巷に居りて尊位を失へり。羿乃ち夏の衰亂に乘じ、之に代りて政をなししも、狩獵を樂みて民事を恤へず、寒浞を信任して相となすや、浞射て羿を殺し、又其妻を奪ふ。羿既に亂を以て政を得。其の終を克くせざるは固より宜なり。寒浞羿の妻を取りて澆を生む。多力を恃み情欲を肆にして自ら忍びず。終に少康の爲に誅せらる。夏桀は無道を以て湯王の誅する所となり、殷紂は忠臣を葅醢にせるを以て國を亡せり。獨り湯禹周文は天を畏れ賢を敬ひ、道義に遵ひて違ふことなし。夫れ天帝は聖明にして偏頗なし。萬民の中、德ある者を觀れば輔けて之を天子となす。是を以て明知德行あれば、終に天子となりて天下を有つなり。余既に古人の迹を觀て、將來の事を察するに、不義の用ふべからず、不善の行ふべからざるを明にせり。我れ既に危地に陷れるも、猶ほ初志を執りて悔ゆるなし。孔を量らずして枘を正うせば（君の賢愚を量らずして忠信を竭すに喩ふ）古賢哲と雖も罪過を蒙れり。詞を述べて終

【一一四】浪浪。淚の流るる貌。

り、自ら明時に逢はざるを悲み、香草を取りて涙を拭へば、涙流れて襟を霑す。

跪きて（一二五）衽を敷き以て辭を陳べ、玦に吾既に此の中正を得たり。（一二六）玉虯を駟にして以て（一二七）鷖に乗り、（一二八）埃風に溘して余上り征く。朝に（一二九）朝を蒼梧に發し、夕に余（一三〇）縣圃に至り、少く此の（一三一）靈瑣に留らんと欲すれば、日忽忽として其れ將に暮れんとす。吾（一三二）羲和をして節を弭め、（一三三）崦嵫を望んで迫づくなからしむ。路（一三四）漫漫として其れ脩遠なり、吾將に上下して求索せんとす。余が馬に（一三五）咸池に飲ひ、余が轡を（一三六）扶桑に揥び、（一三七）若木を折りて以て日を拂ち、聊か（一三八）逍遊して以て相羊す。（一三九）望舒を前にして先驅せしめ、（一四〇）飛廉を後にして奔屬せしむれば、（一四一）鸞皇余が爲に先づ戒め、（一四二）雷師余に告ぐるに未だ具はらざるを以てす。吾れ鳳凰をして飛騰せしめ、又之に繼ぐに日夜を以てす。

飄風屯りて其れ相離れ、雲霓を帥て來り御ふ。（一四三）紛總總として其れ離合し、（一四四）斑陸離として其れ上下す。吾れ（一四五）帝閽をして關を開かしむ、（一四六）閶闔に倚りて予を望めり。時（一四七）曖曖として其れ將に罷らんとす。幽蘭を結んで延佇す。世溷濁にして分れず、好んで美を蔽ひて嫉妬す。

【一二五】衽。裳際なり。
【一二六】玉虯。玉龍なり。
【一二七】鷖。鳳凰の類。
【一二八】埃風。塵風なり。溘は掩はるること。
【一二九】朝。轅を支ふる木。蒼梧は舜を葬りし處。
【一三〇】縣圃。崑崙山上にある仙山なり。
【一三一】靈瑣。神靈の居る所の門。極にあり。
【一三二】羲和。日輪の御者。
【一三三】崦嵫。日の入る處の山。
【一三四】漫漫。遠き貌。脩遠は長遠。
【一三五】咸池。日の浴する處。
【一三六】扶桑。木の名。日其下より出づ。
【一三七】若木。木の名、崑崙の西に在り。
【一三八】逍遊。相羊。皆遊ぶこと。
【一三九】望舒。月の御者。
【一四〇】飛廉。風の神。奔屬は走り從ふこと。
【一四一】鸞皇。靈鳥なり。
【一四二】雷師。雷神なり。
【一四三】紛總總。盛に聚る貌。
【一四四】斑陸離。亂れて分散する貌。
【一四五】帝閽。天門の番人。閽は門なり。
【一四六】閶闔。天門なり。
【一四七】曖曖。暗き貌。

【大意】　跪きて如上の詞を舜の前に述べ、耿然として自ら覺るらく、吾が心已に此の中正の道を得、上天と通じ間隔する所なしと。乃ち玉龍を以て鳳車に駕し、塵風に掩はれて天に上る。朝に蒼梧の野を發し、夕に縣圃に至り、暫く門外に留らんとすれば日忽ち暮れなんとす。乃ち日御に命じて徐行せしめ崦嵫を望んで之に近づくなからしむ。我が前途長遠なるも、日の未だ暮れざるに及んで賢君に遇はんと欲すればなり。因つて轡を扶桑に結びて以て日行を留め、西極の若木を折り日御を擊ちて還らしめ、月御を先驅となし風神を從者となし、奮飛して天に上らんとすれば、鸞鳳先づ我が行を沮み、雷神亦騶從の未だ具らざるを告ぐ。因つて鳳凰をして飛騰して先づ往かしめ、日夜相繼ぎて姑くも停ることなからしむ。然も中途にして回風に遇ひ、忽ち離散して去り、尋で雲霓を率ゐ來りて我を迎ふ。その盛衆なること總總として陸離たり。吾れ既に雲霓の輔を得たり。乃ち入りて天帝に謁せんとし、復た天門に倚り躊躇して敢て進まず。時に日將に暮れんとす。乃ち幽蘭を

結んで天帝に進めんとして又久立す。顧ふに世亂れて善否を分たず、好んで人の美を蔽ひて嫉妬す。天帝の左右亦此輩なきを保し難し。是れ余の遽に進見せざる所以なり。

朝に吾將に(一三八)白水を濟り、(一三九)閬風に登りて馬を纒がんとす。忽ち反顧して以て涕を流し、(一四〇)高丘の女なきを哀む。遂に吾れ此の(一四一)春宮に遊び、(一四二)瓊枝を折りて以て佩に繼ぎ、(一四三)榮華の未だ落ちざるに及び、(一四四)下女の詒るべきを相る。吾れ(一四五)豐隆をして雲に乘り、(一四六)虙妃の在る所を求めしむ。(一四七)佩纕を解いて以て言を結び、吾れ(一四八)蹇脩をして以て理を爲さしむ。紛總總として其れ離合し、忽ち(一四九)緯繣して其れ遷し難し。夕に歸りて(一五〇)窮石に次り、朝に髮を(一五一)洧槃に濯ふ。厥美を保ちて以て驕傲し、日に康娛して以て淫遊す。信に美なりと雖も禮なし。來りて違棄して改め求む。(一五二)四極を覽相觀し、天に周流して余乃ち下る。(一五三)瑤臺の偃蹇たるを望み、(一五四)有娀の佚女を見る。吾れ(一五五)鴆をして媒をなさしむ。鴆余に告ぐるに好からざるを以てす。雄鳩の鳴きつつ逝く、余猶ほ其の(一五六)佻巧を惡む。心猶豫して孤疑す。自ら適かんと欲すれども不可なり。鳳凰既に詒を受く。(一五七)高辛の我に先だたんことを恐る。遠く集らんと欲すれども止る所なし。聊か浮遊して以て逍遙す。(一五八)少康の未だ家せざるに及び、(一五九)有虞の二姚を留めん。理弱りて媒拙く、導言の固からざるを恐る。時溷濁して賢を嫉み、好んで美を蔽ひて惡を稱ぐ。閨中既に以て邃遠なり、(一六〇)哲王又寤らず。朕が情を懷いて發せず、余焉んぞ能く忍んで此と(一六一)終古せん。

【三八】白水。淮南子に「白水は崑崙の源より出づ、之を飲めば死せず」とあり。
【三九】閬風。山の名、崑崙山上にあり。
【一四〇】高丘。閬風を指す。女は賢君に喩ふ。
【一四一】春宮。東方青帝の舍。
【一四二】瓊枝。玉樹の枝。
【一四三】榮華。顏色に喩ふ。
【一四四】下女。神女の侍女。神女は賢君に喩ふ。
【一四五】豐隆。雷神なり。
【一四六】虙妃。伏犧氏の女、溺れて洛水の女神となる。賢君に喩ふ。
【一四七】佩纕。佩帶なり。
【一四八】蹇脩。伏犧氏の臣の名。理とは媒して言を通ずることと。
【一四九】緯繣。乖戾なり。
【一五〇】窮石。山の名、弱水の出づる所。
【一五一】洧槃。川の名、崦嵫山より出づ。
【一五二】四極。四方極遠の地。覽相觀は見ること。
【一五三】瑤臺。玉臺なり。偃蹇は高き貌。
【一五四】有娀。國の名。佚は美なり、佚女とは帝嚳の妃、契の母たる簡狄なり。
【一五五】鴆。惡鳥なり、羽に毒あり人を殺す、以て讒賊に喩ふ。
【一五六】佻巧。輕佻巧利なり。
【一五七】高辛。帝嚳なり。
【一五八】少康。夏后相の子なり。
【一五九】有虞。國の名、舜の後なり。姚は姓なり。昔寒浞、澆をして夏后相を殺さしむ、少康有虞に逃る、虞因つて妻すに二女を以てせり、事左傳に詳なり。
【一六〇】哲王。賢知の主。
【一六一】終古。永遠なり。

【大意】吾既に天門に進んで天帝に謁するを得ず。更に路を轉じて西のかた閬風山に遊ばんとし、半途にして顧望流涕して以爲らく、恐らくは閬風にも亦美女（賢君に喩ふ）なからんと。乃ち亦棄て去り更に東のかた青帝の宮に遊ばんとし、瓊枝を折りて佩に繼ぎ益〻長美ならしめ、年德猶ほ盛なるに及び、慇懃を青帝の女（賢君に喩ふ）に通せんことを冀ひ、因つて侍女の吾が媒をなすべき者を求む。然れども青帝の女果して我と歡をなすべきや否やを知らず。故に又雷神をして別り出づ。

に虚妃（賢君に喩ふ）の居る所を求めしめ、蹇脩をして媒をなさしむ。然も讒人復た相聚りて毀敗し、吾が意離合乖戻して通せず。吾が意亦移し難し。故に歸りて窮石山に宿り髮を洧槃に濯ひて以て自ら潔うす。かの虚妃己の美を恃みて驕傲なり。日に淫遊を事として禮法に循はず。故に棄て去りて別に美女を求めんとす。既に徧く天上界を周流し、青帝の女と虚妃とを見たるも、吾が意に適する者なし。故に下りて地上に求めんとし、忽ち瑤臺の佚女を認めぬ。因つて鴆鳥をして媒せしめしも、鴆鳥詐り告ぐるに好からざるを以てせり。更に雄鳩をして命を銜んで往かしめんと欲せしも、その輕佻巧利にして信任すべからざるを惡みて遣らず。因つて自ら往かんと欲すれども、禮に於て不可なるを如何せん。聞く彼の鳳凰既に高辛の幣物を受け、往きて佚女を求めんとすと。我に先だちて佚女を娶り去らんことを恐る。既に佚女を失ひ又他方に求めんとするも、向ふ所を知らず。暫く逍遙して悶を慰し、少康の未だ娶らざるに及び、己先づ二姚を娶らんとす。然も辭理少康に劣り、媒亦拙なるを以て、言を通ずるの堅固ならざるを恐る。ああ世亂れて賢を嫉み、美を掩ひて惡を擧ぐ。天上天下皆一なり。閨中深遠にして虚妃の輩求むべからず、賢主亦悟らず。我れ忠信の情を抱くも發用する能はず。焉んぞ能く久しく濁世に居るに忍びんや。

（一六二）瓊茅と筳篿とを索り、（一六三）靈雰に命じて余が

【一六二】瓊茅。靈草なり。筳は小〻折竹なり、楚人結草折竹を以

爲に之を占はしむ。曰く兩ながら美ならば其れ必ず合はん。孰か脩まれるを信じて之を慕はん。（一六四）九州の博大なるを思ふに、豈唯是にのみ其れ女あらんや。曰く勉めて遠く逝きて狐疑するなかれ、孰か美を求めて女を釋てん。何れの所か獨り芳草なからん、爾何ぞ故宇を懷へると。時幽昧にして以て（一六五）眩曜せり、孰か云に余の美惡を察せん。人の好惡其れ同じからず、惟此の黨人其れ獨り異り、戸ごとに艾を服して以て要に盈て、幽蘭は其れ佩ぶべからずと謂ふ。草木を覽察するも其れ猶ほ未だ得ず、豈（一六六）珵美の能く當らんや。糞壤を蘇りて以て（一六七）幃に充て、申椒は其れ芳しからずと謂ふ。

【大意】草竹を取り靈氛に命じて占はしむるに、曰く男女共に美ならば（君臣ともに賢なるに喩ふ）相合はざるなし。然れども楚國今溷亂の中に在るを以て、誰か汝の脩潔を慕ふ者あらんや。宜しく時を以て去るべきなり。天下の廣大なる、獨り楚にのみ美女あるにあらず。當に遠く往きて求むべし。今や美女賢夫を求めつつあり。豈汝を棄つることあらんや。何れの處か芳草（賢君に喩ふ）なからん。汝何ぞ故宇（故居なり）を思ひて去らざるやと。因つて自ら思ふに、世溷濁して余の善を知る者なし。他に往くと雖も合ふ所なかるべし。人の好惡は固より同じからざれども、楚國の黨人

てトふを篿といふ。

【一六三】靈氛。古の占を善くせし者の名。

【一六四】九州。支那全土の稱。

【一六五】眩曜。惑亂の貌。

【一六六】珵美。珵は美玉なり。

【一六七】幃。香囊なり。

に於て其最も甚しきを見る。艾は香草にあらずして、然も皆之を服して腰に滿て、幽蘭を以て臭惡となす。（讒人を親みて忠直の士を遠くるに喩ふ）草木の香臭すら辨ずる能はず。豈よく美玉の良否を辨せんや。糞土を取りて香囊に充て申椒を以て芳しからずとなす。（小人を近づけ君子を遠くるに喩ふ）是非顚倒せること此の如し。余豈よく之と合はんや。

靈氛の吉占に從はんと欲すれども、心猶豫して狐疑す。（一六）巫咸將に夕に降らんとす。（一六）椒糈を懷いて之を要せん。百神翳ひて其れ備に降り、（一七）九疑繽として其れ竝び迎ふ。（一七）皇剡剡として其れ靈を揚げ、余に告ぐるに（一七）吉故を以てす。曰く勉めて升降して以て上下し、（一七）矩矱の同じき所を求めよ。湯禹儼にして合はんことを求めしかば、（一七）摯皐繇も能く調へり。苟に中情其れ好脩ならば、何ぞ必しも夫の（一七）行媒を用ひん。（一七）說築を傅巖に操りしも、（一七）武丁用ひて疑はず。（一七）呂望の刀を鼓せるも、周文に遭ひて擧げらるるを得たり。（一七）甯戚の謳歌せるも、齊桓聞いて以て輔に該へぬ。年歲の未だ晏れざるに及べ、時亦猶ほ其れ未だ央きず。恐らくは（一八）鵜鴂の先づ鳴いて、百草をして之が爲に芳しからざらしめんとをと。

【大意】靈氛の占斷に從ひ楚を去らんと欲するも、楚は吾が宗國にして余は楚の世卿なれば、躊躇して去就を決する能はず。時しも巫咸今夕を以て天上より降ると聞く。乃ち椒糈を供へて之を迎へ、更に其の占斷を請はんとす。忽ち百神巫咸を擁して天上より降り、舜亦九疑の羣神をして來り迎へしむ。百神乃ち其光靈を揚げ、巫咸余に告ぐるに吉占を以てして曰く、勉めて天地に上下し、己と法度を同うする賢君を求むべし。昔禹湯は其身を處すること儼厲にして心常に己と合ふ者を求めしかば、伊尹、皐陶の如き賢臣を得、君臣よく和合せり。苟も中心善を好みて自ら脩潔せば、明君自ら擧用すべし。何ぞ左右の薦達を須ひんや。傅說は罪人となり版築を執りて傅巖に築きしも、高宗疑はずして之を擧用し、太公望呂尙は貧困にして自ら刀を振ひて屠者となりしも、文王に遭ひて擧用せられ、甯戚は牛角を叩きて不遇を嘆せしも、桓公之を擧げて輔相となせり。身未だ老いざるに及び、宜しく去りて賢君を求むべし。空しく時を失ふべからずと。

【六〇】巫咸。古の神巫なり。
【六一】椒糈。椒は香物、神を降す所以なり。糈は精米、神に享する所以なり。要は迎なり。
【七〇】九疑。舜を葬りし山。繽は盛なる貌。
【七一】皇。百神をいふ。剡剡は光る貌。
【七二】吉故。吉占なり。
【七三】矩矱。法度なり。
【七四】摯。湯の臣、伊尹なり。
【七五】皐繇は禹の臣、皐陶なり。
【七六】行媒。なかだち、左右の臣に喩ふ。
【七七】說。傅說なり、殷の高宗の賢臣。築は土工の道具。傅巖は地名。
【七八】武丁。殷の高宗。
【七九】呂望。太公望呂尙なり。鼓は鳴らすこと。

【七九】甯戚。衞の人なり、德を脩めて用ひられず、退いて商賈し、齊の東門外に宿す、桓公夜出づ、甯戚まさに牛に飯す、角を叩いて歌ふ、桓公之を聞き其賢なるを知り擧げ用ひて卿となす。
【八〇】鵜鴂。鳥の名、秋分の前鳴く、此鳥鳴けば草木凋落す。

【八一】瓊佩。玉のおびもの。偃〻　蹇は衆盛の貌。

何ぞ（八二）瓊佩の偃蹇たる、衆（八三）菱然として之を

蔽ふ。惟此の黨人の亮あらざる、恐らくは嫉妬して之を折かんことを。時(一八三)繽紛として其れ變易す。又何ぞ以て(一八四)淹留すべけん。(一八五)蘭芷も變じて芳しからず、(一八六)荃蕙も化して茅となりぬ。何ぞ昔日の芳草、今直に此の(一八七)蕭艾となれる。豈其れ他故あらんや、好脩の害なるなからんを長し。厥美を委てて以て俗に從ひ、苟に衆芳を(一八八)引くを得たり。椒は專ら佞して以て慢諂し、(一八九)椒は又其の(一九〇)佩幃に充たんと欲す。既に進まんとを干めて入らんとを務む。又何の芳か之れ能く祗まん。固に時俗の從流する、又孰か能く變化することなからん。椒蘭を覽るに其れ茲の若し。又況んや(一九一)揭車と江離とをや。

【大意】我れ瓊玉の美を佩ぶるも（徳の美なるに喩ふ）衆之を蔽ひて顯るるを得ざらしむ。彼の黨人の我を諒とせざる、遂に嫉妬して之を毀らんことを恐る。時世溷濁して善惡變易し、香草も變じて醜草となり、君子も變じて小人となりぬ。此れ他なし。好んで自ら脩潔する者は、往往にして禍に遭ふも、節を變じて俗に徇へば此患なければなり。余初め蘭を以て恃むべしとなせり。然も

【八二】蘙然。聚り蔽ふ貌。
【八三】繽紛。亂るる貌。
【八四】淹留。久しく留まること。
【八五】蘭芷。香草なり。君子に喩ふ。
【八六】荃蕙。香草なり、君子に喩ふ。茅は惡草、小人に喩ふ。
【八七】蕭艾。賤草なり、不肖者に喩ふ。
【八八】引。一本列に作る。
【八九】椒。茱萸なり、椒に似て非なるもの。
【九〇】佩幃。香囊なり。
【九一】揭車、江離。皆香草の名。

誠實なくして唯外貌の美好なるのみ。且つ其美を棄てて流俗に化し、苟も衆芳の列に伍せんと欲す。椒も亦芳烈の物なり。而も今變じて邪佞となり、茱萸は固より臭物なり。今香囊に滿たんと欲し、ただ進んで君に容れられんことを務む。又何ぞ能く其節を敬守する者あらんや。俗人上の化に從ふこと水の流るるが如し。誰か節を變じ行を改めざらんや。

惟茲の佩の貴ぶべき、厥美を委てて茲を歷るも、芳菲菲として虧け難く、芬今に至るまで猶ほ未だ沫まず。(一九二)調度を和して以て自ら娛み、聊か浮游して(一九三)女を求め、余が飾の方に壯なるに及び、周流して上下を觀ん。靈氛既に余に告ぐるに吉占を以てす。吉日を歷んで吾れ將に行らんとす。瓊枝を折りて以て(一九四)羞となし、(一九五)瓊靡を精げて以て糗となさん。余が爲に飛龍に駕し、(一九六)瑤象を雜へて以て車となす。何ぞ(一九七)離心の同じうすべけんや、吾れ將に遠く逝きて自ら疏にせんとす。遵りて吾れ夫の崑崙に道し、路脩遠にして以て周流す。(一九八)志雲霓の晻藹たるを揚げ、(一九九)玉鸞の啾啾たるを鳴らし、朝に(二〇〇)軔を天津に發し、夕に余西極に至る。鳳皇翼んで其れ旅を承け、高く翱翔し

【九二】調度。格調法度なり。
【九三】女。賢君に喩ふ。
【九四】羞。食料なり。
【九五】瓊靡。玉屑なり。
【九六】瑤象。玉及び象牙。
【九七】離心。己と志を同うせざる者。
【九八】志雲霓。一本に志字なし雲霓は以て旗とせるなり。晻藹は日を蔽ふ貌。

て(二〇一)翼翼たり。忽ち吾れ此の(二〇二)流沙に行き、(二〇三)赤水に遵ひて容與し、蛟龍を麾いて津に梁せしめ、(二〇四)西皇に詔げて予を涉さしむ。路脩遠にして以て艱多し。衆車を騰げて徑に待たしめ、(二〇五)不周に路して以て左轉し、西海を指して以て(二〇六)期となす。余が車を屯むること其れ千乘なり、(二〇七)玉軑を齊へて竝び馳せ、八龍の(二〇八)婉婉たるに駕し、雲旗の(二〇九)委移たるを載つ。志を抑へて節を弭むるも、神高く馳せて(二一〇)邈邈たり。(二一一)九歌を奏して韶を舞ひ、聊か日を假りて以て娯樂す。(二一二)升皇の赫戲たるに陟り、忽ち夫の(二一三)舊鄉を臨睨すれば、(二一四)僕夫は悲み余が馬は懷ひ、(二一五)蜷局して顧みて行かず。

【大意】我に瓊玉の美質あり、我れ自ら之を恃みて敢て苟も容れられんことを求めず。終に此の苦境に逢ひしも、今尙ほ其芳芬を毀損せず。法度を守りて自ら樂み年德の未だ衰へざるに及び、四方に遊びて賢君を求め、靈氛の吉占に從ひ、吉日を擇んで遠行せんとす。因つて香潔の物を取りて

【一九】玉鸞。車の鈴。啾啾は鈴の聲。
【二〇〇】天津。東極なり。
【二〇一】翼翼。高く翼を張る貌。
【二〇二】流沙。地名なり。
【二〇三】赤水。地名なり。容與は遊戲する貌。
【二〇四】西皇。帝少皞なり。
【二〇五】不周。山の名、崑崙山の西北にあり。
【二〇六】期。會合すること。
【二〇七】玉軑。車のクサビ。
【二〇八】婉婉。龍の卷曲する貌。
【二〇九】委移。垂れて動く貌。
【二一〇】邈邈。遠き貌。
【二一一】九歌。九德の歌、禹の樂なり。韶は九韶、舜の樂なり。
【二一二】升皇。天の堂なり。赫戲は光明の貌。
【二一三】舊鄉。楚國なり。
【二一四】僕夫。御者なり。
【二一五】蜷局。詰屈して行かざる貌。

糧食となし、明智の獸に駕し象玉の車に乘り、異心の者を棄てて自ら遠ざかり、雲旗を飜し玉鸞を鳴らして崑崙の長途を經、朝に東極を發して夕に西極に至り、忽ち流沙を渡りて赤水に遊ぶ。其道長遠にして艱難なるを以て、衆車をして我に從はずして捷徑に由らしめ、我は不周山より左に轉じ西海の上に相會せんとす。我乃ち從車千乘を伴ひて馳すれば、志を抑へて徐行せんとするも、我が精神得て制すべからず。乃ち九歌を奏し韶を舞ひ、暫く時を借りて娯樂し、天堂に上りて楚國を顚望すれば、僕馬悲傷して歸らんことを思ふ。

【二二六】亂。結末に於て一篇の大旨を總括する詞。
【二二七】故都。楚國なり。

(二二六)亂に曰く、已ぬるかな、國に人なく我を知るなし。吾將に彭咸の居る所に從はんとす。

【大意】ああ楚に賢人なく我を知る者なし。我亦何ぞ之を念はんや。既に與に美政をなすに足るなし。願くは彭咸の爲す所に倣はんことを。

九歌四首

屈平

【一】東皇太一。天神の最も貴き者。

吉日（二）辰良、穆んで將に（三）上皇を愉ましめんとし、長劍の（四）玉珥を撫し、（五）璆として鏘鳴する琳琅あり。（六）瑤席玉瑱、盍に將た瓊芳を把る。薫の（七）肴蒸蘭の藉あり。（八）桂酒と椒漿とを奠く。（九）枹を揚げて鼓を拊ち、節を疏緩にして安に歌ひ、（一〇）竽瑟を陳ねて浩に倡ふ。（一一）靈偃蹇として嫮服し、（一二）芳菲菲として堂に滿つ。（一三）五音紛として繁く會ひ、（一四）君欣欣として樂康す。

【大意】吉日を卜して東皇の神を祀らんとし、長劍を撫し珮玉を鳴らして、事に從ひ、玉の席を敷き玉の鎭を加へ、芳香の酒肴を設け、歌舞を奏して之を迎ふれば、羣神美服を纏ひて格り芳香堂に滿ち、樂聲の高調するを聞きて、東皇の神欣然として喜ぶ。（神を以て君に喩へ、神を祭るを以て君に奉事するに喩へ、以て君臣遇合の美をいふ。）

（一五）雲中君

【一】辰良。良辰に同じ、吉日なり。
【二】上皇。東皇太一なり。
【三】玉珥。玉のツバ。
【四】璆。玉の鳴る聲。鏘鳴は鳴ること。琳琅は美玉なり。以て佩となす。
【五】瑤席。玉の敷物。瑱は敷物のオモシなり。
【六】肴蒸。蒸は烝に同じ。俎に盛れる切肉。藉は肉に敷くなり。
【七】桂酒。桂を切りて酒中に置くなり。椒漿は椒を漿中に置くなり。
【八】枹。鼓を擊つバチ。
【九】竽瑟。共に樂器の名。
【一〇】靈。多くの神、東皇に隨ひて來る者をいふ。偃蹇は舞ふ貌。嫮服は美服を纏ふこと。
【一一】芳菲菲。芳香のただよふ貌。
【一二】五音。宮商角徵羽なり。紛は盛なる貌。
【一三】君。專ら東皇をいふ。
【一四】雲中君。雲神なり。

蘭湯に浴して芳に沐し、（一六）華采の衣英の若し。（一七）靈連蜷として既に留り、（一八）爛昭昭として未だ央きず。蹇將に（一九）壽宮に憺んぜんとし、日月と光を齊うす。（二〇）龍駕して帝服し、（二一）聊か翱游して（二二）周章す。靈（二三）皇皇として既に降り、（二四）猋として遠く雲中に擧る。（二五）冀州を覽んで餘あり、四海に橫るも焉んぞ窮まりあらん。（二六）夫君を思ひて太息し、勞心を極めて（二七）慷慨たり。

【大意】饗祭を脩めて以て雲神に事へんとし、芳蘭の湯に沐浴し、五彩の美服をまとひて之を迎ふ。雲神既に降りて祭場に留り、我と相得て意未だ盡きず。神乃ち憺然として安樂し久しく此に留まらんとするが如く、日月と光明を齊うし、龍車に乘り帝服をまとひ、暫く周旋優遊せり。何ぞ意はん忽然我を棄てて遠く去る。夫れ雲神は靈威赫赫たれば、冀州を望むも固より綽綽として餘裕あり、四海を橫行するも復た何の窮極する所あらんや。（暗に楚王尊嚴、行くとして意の如くならざるなきに喩ふ）今我を棄てて遠く去り。我をして心を勞せしむ。（此篇雲中君を借りて、己楚王と乖離せる事を

【一六】華采。五色なり。英は瑛に同じ、玉なり。
【一七】靈。神なり、雲中君を指す。連蜷は連りて宛曲することと。
【一八】爛昭昭。光りかがやく貌。
【一九】壽宮。神を供するの處。
【二〇】龍駕。龍をして車を引かしむるなり。帝服は服飾盛美にして天帝の如きなり。
【二一】周章。周流の如きなり。
【二二】皇皇。美なる貌。
【二三】猋。忽然なり。
【二四】冀州。州の名、古の帝王多くは此州に都す。
【二五】夫君。雲中君なり。
【二六】慷慨。憂ふる貌。

述ぶ）

(一七)湘君

君行かずして　(一八)夷猶し、蹇に誰をか中洲に留つ。美舟に乘る。(一九)沅湘をして波なからしめ、江水をして安流せしめよ。(二〇)夫君の歸來を望む。(二一)參差を吹いて誰をか思はん。飛龍に駕して北に征く。遭りて吾れ　(二二)洞庭に道し、(二三)薜荔は拍け蕙は綢ね、(二四)荃橈と蘭旌とを承り、(二五)澧陽の極浦を望めば、大江に橫りて　(二六)靈を揚ぐ。靈を揚ぐること未だ極らず、(二七)女嬋媛として余が爲に太息す。橫流する涕　(二八)潺湲たり。君を隱み思ひて　(二九)陴側す。桂櫂蘭枻、冰を斲り雪を積み、薜荔を水中に采り、(三〇)芙蓉を木末に搴る。心同じからずして　(三一)媒勞し、恩甚しからずして輕く絕つ。石瀨　(三二)淺淺たり、飛龍翩翩たり。交忠ならずして怨長く、期信ならずして余に告ぐる

【一七】湘君。堯の二女娥皇女英舜の妃たり、舜南巡して蒼梧の野に死す、二妃舜を追ひて南行し、湘水に溺死し、湘水の神となる、娥皇を湘君となし女英を湘夫人となす。
【一八】夷猶。猶豫なり。
【一九】要眇。美好の貌。
【二〇】沛。行く貌。
【二一】沅湘。二川の名。
【二二】夫君。湘君をいふ。
【二三】參差。洞簫なり、樂器の名。
【二四】洞庭。大湖の名、山海經に「洞庭の山、二女之に居る」とあり。
【二五】薜荔。香草なり。
【二六】荃橈。荃は香草、橈は船なり。こゝぐ楫。
【二七】澧陽。江碕の名。
【二八】靈。威靈なり。
【二九】女。湘君の侍女なり。嬋媛は牽懸の貌。
【三〇】潺湲。流るる貌。
【三一】陴側。悱惻なり。
【三二】桂櫂、蘭枻。香木の楫。

に間あらざるを以てす。朝に　(三三)江皐に騁騖し、夕に節を北渚に弭むれば、鳥屋上に次り、水堂下を周る。余が　(三四)玦を江中に捐て、余が珮を　(三五)澧浦に遺て、芳洲の　(三六)杜若を采り、將に以て　(三七)下女に遺らんとす。時は再び得べからず、聊か逍遙して　(三八)容與す。

【大意】我れ湘君を迎へんと欲するも躊躇して肯て來らず。洲中に留りて何人をか待てる。其形美好にして粧飾と能く稱へり。我れ桂舟に乘り往きて之を迎へんとす。願くは沅湘をして波なからしめ、湘君の來るを妨げざらんことを。因つて更に湘君を望めども來らず、洞簫を吹いて思を寄す。湘君中洲より飛龍に駕し將に北に去らんとす。吾亦廻轉して道を洞庭に取り、且つ屋を水中に構へ、四壁を飾るに香草を以てし、又舟楫旌旗を具へ、將に必ず之を邀へんと欲す。適〻澧陽の極浦を望めば、湘君既に北大江に橫りて其威靈を揚ぐるを見る。北に去りて未だ全く江を過ぎざれども、復た肯て來りて我を見ず。故に侍女我が爲に太息し、吾亦君を慕ひて淚を流せり。況んや又氷雪の艱に遇ひ、舟急に進むべからず。遂に湘君と相遇ふを得ず。恰も薜荔（木に緣りて生ずる香草）を

【三三】芙蓉。蓮花なり。木末は梢。
【三四】玦。玉佩なり。珮に同じ。
【三五】澧浦。澧水のほとり。
【三六】杜若。香草の名。
【三七】下女。侍女なり。
【三八】容與。遊戲なり。
【三九】江皐。江澤なり。騁騖は走ること。
【四〇】要眇にして脩むるに宜し。沛として吾れ桂櫂蘭枻、冰を斲り雪を積み、薜荔を水中に采り、芙蓉を木末に搴る。心同じからずして媒勞し、恩甚しからずして輕く絕つ。石瀨淺淺たり、飛龍翩翩たり。交忠ならずして怨長く、期信ならずして余に告ぐる

水中に求め、蓮花を樹梢に採るが如し。畢竟湘君の意我と同じからず。故に侍女媒をなして徒に勞し、恩意初めより厚からず。故に輕〻しく棄て去る。俯視すれば石瀨淺淺として我が舟進み難く。仰望すれば湘君翩翩として北に去る。顧ふに我の湘君と交る、未だ忠なりとなさず。是を以て終に相見るを得ず。我の湘君と期約する、未だ信なりとなさず。故に湘君我に告ぐるに暇なきを以てし、北に去れる所以なり。然も吾れ尚ほ之を追求せんとし、朝に馬を江澤に馳せ夕に北渚に至れば、天既に暮れて鳥の屋上に棲み、水の堂下を周るを見るのみ。既に湘君と相見るを得ざれば、自ら粧飾するも益なきなり。乃ち玦珮を江中に棄つ。ただ侍女我が爲に心を勞せり。以て之に報いざるべからず。故に杜若を採りて之に贈らんとす。ああ時は再び得べからず。後會また期し難し。終に決然として歸り去る能はず。聊か逍遙して自ら慰む。（君と相得ざるの意を寓す）

【五二】湘夫人。二七を見よ。
【五三】帝子。堯の女、女英即ち湘夫人をいふ。
【五四】眇眇。杳杳の如し。遙なる貌。
【五五】嫋嫋。秋風木を搖す貌。
【五六】白蘋。水草の名。

湘夫人

帝子北渚に降る。目眇眇として予を愁へしむ。嫋嫋たる秋風、洞庭波たちて木葉下つ。白蘋に登りて望を騁せ、佳期を與にせんとして夕に張る。烏蘋中に萃る。曾何爲れぞ木上にある。沅に芷あり澧に蘭あり。公子を思へども未だ敢て言はず。慌忽として遠く望み、流水の潺湲たるを觀る。麋何爲れぞ庭中にある、蛟何爲れぞ水裔にある。朝に余が馬を江皐に馳せ、夕に西澨を濟る。佳人の予を召すを聞き、將に騰駕して偕に逝かんとす。室を水中に築き、之を葺くに荷蓋を以てす。百草を合せて庭に實て、芳馨を建て門に廡す。九疑繽として並び迎へ、靈の來ること雲の如し。余が袂を江中に捐て、余が褋を澧浦に遺て、汀洲の杜若を搴り、將に以て遠者に遺らんとす。時は驟く得べからず。

【五七】佳期。會合すること。
【五八】芷。香草なり。
【五九】公子。湘夫人をいふ。
【六〇】慌忽。恍惚に同じ。
【六一】潺湲。水の流るる聲。
【六二】麋。大鹿なり。
【六三】蛟。龍なり。水裔は水涯なり。
【六四】西澨。西涯なり。
【六五】佳人。湘夫人をいふ。
【六六】荷蓋。蓮葉なり。
【六七】荃壁。荃は香草、之を以て室壁を飾るなり。紫壇は紫貝を累ねて室壇となす。
【六八】蘭檻。木蘭のタルキ。
【六九】辛夷。木の名。楣は門戸の上の梁なり。葯は香草。房は室なり。
【七〇】橑。桷なり、のきつけ。
【七一】鎭。敷物のオモシ。
【七二】石蘭。香草なり。
【七三】荷屋。蓮葉の屋根。
【七四】杜衡。香草なり。
【七五】九疑。山の名、舜ここに葬る。ここは九疑の山神をいふ。繽は盛なる貌。
【七六】靈。羣神なり。
【七七】褋。ひとへぎぬ。

聊か逍遙して容與す。

【大意】　湘夫人方に北渚に降れり。目を擧げて之を望めば、杳然として遠きに在り。相見んと欲すれども得べからず。我をして愁思せしむ。況んや秋風起りて水波興り木葉落ち、急に舟を進めて相見るべからざるをや。因つて白蘋の葉に登り【七八】遠者。遠く去りし湘夫人。て遠く望み、將に夕を待つて供張して之を迎へんとす。然れども吾の爲す所、譬へば鳥もと木巓に集るべきに、却つて蘋中に集り、網もと水中に設くべきに、之を木巓に設くるが如し。固より湘夫人と相見るべからざるを知る。沅澧に芷蘭あり以て夫人に贈るに足る。吾れ夫人を思へども、其の尊を瀆さんことを懼れて敢て言はず。恍惚として遙に望めば、唯流水の潺湲たるを觀る。之を邀へて相見んと欲するも、麋もと山林に在るべくして、却つて庭中に在り、蛟もと深淵に在るべくして、却つて水涯に在るが如く、既に其宜しきを失へるを以て、相見る能はざるを知れども、尙ほ心に已む能はず。朝に馬を江澤に馳せて、夕に西涯に至り、必ず夫人を邀へんとす。適〻夫人余を召すと聞き、奔馳して此と遊ばんとし、因つて室を水中に築き、之を葺くに蓮葉を以てし、衆芳を積聚し、修飾いよいよ盛にし以て夫人を待つの所となす。圖らざりき舜亦九疑の山神をして、繽然として雲の如くに來り、夫人を迎へしめんとは。我れ夫人の去らんとするを見、袂襟を棄て更に輕裝して之

に從はんとし、且つ芳草を採りて之に贈らんと欲す。願ふに吾既に夫人と遊ぶを得ず。然れども猶ほ遠く之を望見するを得たるは、亦一時の幸なり。固より屢得べきにあらず。故に夫人既に去ると雖も、此心牽戀し、遽に棄て去るに忍びざるなり。

卷の第十七

騷　下

九歌二首

(一)少司命

秋蘭(二)麋蕪、堂下に(三)羅生す。綠葉(四)素華、(五)芳菲菲として予に襲く。夫れ人自ら美子あり、(六)孫何を以てか愁苦する。秋蘭青青として、綠葉紫莖あり。堂に滿つる(七)美人、忽ち獨り余と(八)目成す。入るにも言はず出るにも辭せず。回風に乘りて雲旗を載つ。悲は(九)生別離より悲きはなく、樂は(一〇)新相知より樂きはなし。(一一)荷衣蕙帶、倏として來り忽として逝き、夕に(一二)帝郊に宿す。(一三)君誰をか雲の際に須つ。(一四)汝

【一】少司命。天神の名。人命を司る。
【二】麋蕪。香草の名。
【三】羅生。羅は列なり。
【四】素華。白花なり。
【五】芳菲菲。芳しき貌。
【六】蓀。香草なり、司命を謂ふ。
【七】美人。羣神をいふ。
【八】目成。相視て親好すること。
【九】生別離。司命の我を棄てて去るをいふ。
【一〇】新相知。司命さきに我と目成するをいふ。
【一一】荷衣。蓮葉の衣。
【一二】帝郊。天帝の郊。
【一三】君。司命を指す。
【一四】汝と云云。此の二句河伯篇中の語なり、删り去るべし。

と九河に游べば、衝飇起りて水波を揚ぐ。(一五)汝と咸池に沐し、汝が髮を(一六)陽の阿に晞かさん。(一七)美人を望めども未だ來らず、風に臨んで悅として浩歌す。(一八)孔蓋翠旌、九天に登りて(一九)彗星を撫ひ、長劍を竦てて(二〇)幼艾を擁す。(二一)荃獨り民の正たるに宜し。

【大意】新に神を會するの堂を造り、芳草を堂下に雜植すれば、綠葉白花芳香を放ちて人の衣に襲く。因つて司命神に告げて曰く、天下の人各〻自ら美子孫あり、司命何爲れぞ其壽命を主りて愁苦するやと。己神に事へて之を崇敬し、蕙葉紫綠芬芳益〻暢ぶ。是に於てか羣神同じく一堂に會す。司命獨り吾と相視て以て親好を成せり。(蓋し懷王嘗て屈原を羣臣中に拔き國事に任せしめしを謂ふ)然も其來るや一言を交へず、今我を棄てて去るや、復た一辭を告げず。回風に乘り雲旗を飜して遠く去りぬ。ああ悲は生別離を以て最となし、樂は新相知を以て最となす。生別離の此の如く早きを知らば、寧ろ初より相知らざるの勝れるに如かず。(懷王に斥けられし悲を謂ふ)司命荷衣をさと ひ蕙帶を

【一五】汝。司命を指す。咸池は天池なり。
【一六】陽の阿。陽は日、阿は隅たり、日あたりのよき處。
【一七】美人。司命をいふ。
【一八】悅。自失の貌。浩歌は大聲を擧げて憂を紓うするなり。
【一九】孔蓋。孔雀の羽を以て車蓋となすなり。翠旌は翡翠の羽を以て旗となすなり。
【二〇】彗星。はうき星、妖星なり、邪惡に喩ふ。
【二一】幼艾。年少美好の者をいふ。
【二二】荃。香草なり、司命をいふ。正は儀正なり。

垂れ、忽然として來り又忽然として去り、夕に天帝の郊に宿し久しく留りて天際に在り。その待つ所果して何人ぞや。夫れ或は意ありて我を顧戀するか。我れ既に司命に棄てられたるも、猶ほ牽戀の情に堪へず。因つて邀へて與に天池に沐し、髮を向陽の山曲に晞かさんと欲すれども、司命肯て降り來らず。徒に風に臨んで浩嘆するのみ。司命今や天に登りて邪惡の者を掃ひ、善美の者を擁護し、心を執ること公正にして民の儀正となすに足れり。（懷王も亦此の如くならんことを希ふなり）

山鬼

山の阿に人あるが若し。薜荔を被り女蘿を帶ぶ。既に睇を含み又笑ふに宜し。子予が善く窈窕たるを慕ふ。赤豹に乘り文貍を從へ、辛夷の車桂旗を結び、石蘭を被りて杜衡を帶び、芳馨を折りて思ふ所に遺る。余幽篁に處りて終に天を見ず、路險難にして獨り後れて來る。表として獨り山の上に立てば、雲容容として下に在り。杳杳冥冥として羌晝晦し。東風飄りて神靈雨ふらし、靈脩を留めて憺として

【一】山鬼。山神なり。
【二】薜荔。香草なり。女蘿は蔓草なり。
【三】睇。微眄の貌。
【四】子。山鬼をいふ。窈窕は好姿なり、善行に喩ふ。
【五】赤豹文貍。奇獸なり。
【六】辛夷。香木なり。
【七】石蘭杜衡。香草なり。
【八】幽篁。竹林なり。
【九】表。特立して耦なき貌。
【一〇】容容。飛揚する貌。
【一一】杳杳冥冥。暗き貌。
【一二】靈脩。神靈にして能く自ら脩飾する者、山鬼をいふ。憺は安んずること。
【一三】三秀。芝草なり。
【一四】公子を怨んで悵として歸るを忘る。
【一五】磊磊。石の多き貌。
【一六】君我を思ふも間を得ず。山中の人杜若を芳とし、石泉を飲んで松栢に蔭る。君我を思ふも然疑作る。雷塡塡として雨冥冥たり。猿啾啾として狖夜鳴き、風颯颯として木蕭蕭たり。公子を思ひて徒に憂に離ふ。

【大意】山鬼あり山隈に立つこと宛ら人の如し。薜荔女蘿を以て衣帶となし、美目眄然として口も と愛嬌あり。吾が善行あるを悦び、來りて我と歡を結ばんと欲す。乃ち赤豹に乘り服飾を改めて山隈より來り、芳馨を折りて思慕する所の人に贈らんとす。吾れ竹林中に在りて朝暮を知らず、且つ道路險難なるを以て、遂に期に後れて贈物を受くる能はず。獨り山上に立てば雲飛揚して脚下に在り、晝尚ほ暗く、東風吹きて神靈雨を降らし、竟に山鬼と相見るに難し。然も吾が心山鬼を留むるに專にして終に竹林中に歸るを忘れぬ。何となれば予年既に老い、山鬼にあらざれば共に遊ぶべき者なきを以てなり。石徑を涉り榛莽を披き、芝草を採りて山鬼に贈らんとすれば、山鬼我を思

【一七】杜若。香草なり。
【一八】然疑。信疑なり。
【一九】塡塡。雷の聲。
【二〇】冥冥。雨ふりて暗き貌。
【二一】猨。てながざる。狖は尾ながざる。啾啾は小聲なり。
【二二】蕭蕭。風木を拂ふ聲。

て歸るを忘る。歲既に晏れぬ孰か予を華にせん。

三秀を山間に采れば、石磊磊として葛蔓たり。公子を怨んで悵として歸るを忘る。君我を思ふも間を得ず。山中の人杜若を芳とし、石泉を飲んで松栢に蔭る。君我を思ふも然疑作る。雷塡塡として雨冥冥たり。猨啾啾として狖夜鳴き、風颯颯として木蕭蕭たり。公子を思ひて徒に憂に離ふ。

【大意】山鬼あり山隈に立つこと宛ら人の如し。薜荔女蘿を以て衣帶となし、美目眄然として口も と愛嬌あり。吾が善行あるを悦び、來りて我と歡を結ばんと欲す。乃ち赤豹に乘り服飾を改めて山隈より來り、芳馨を折りて思慕する所の人に贈らんとす。吾れ竹林中に在りて朝暮を知らず、且つ道路險難なるを以て、遂に期に後れて贈物を受くる能はず。獨り山上に立てば雲飛揚して脚下に在り、晝尚ほ暗く、東風吹きて神靈雨を降らし、竟に山鬼と相見るに難し。然も吾が心山鬼を留むるに專にして終に竹林中に歸るを忘れぬ。何となれば予年既に老い、山鬼にあらざれば共に遊ぶべき者なきを以てなり。石徑を涉り榛莽を披き、芝草を採りて山鬼に贈らんとすれば、山鬼我を思

はざるにあらざれども、我と相見るの暇なし。これ蓋し侍者我を阻つるが爲なり。因つて侍者を怨んで歸るを忘る。吾れ山中に在りて杜若を採り、石泉を飲み松栢に憩ひ、香潔を以て自ら脩飾せり。されば山鬼我を思はざるにあらざれども、侍者の阻あるが爲に我を信せざるなり。折しも雷轟き雨益〻急に天適〻夜なり。加ふるに猿狖哀鳴し林木蕭蕭たり。吾れ乃ち侍者の我を阻つるを思ひて憂に沈みぬ。

九章

(一)涉江

余幼にして此の(二)奇服を好む。年既に老ゆるも衰へず。(三)長鋏の陸離たるを帶び、(四)切雲の崔巍たるを冠し。(五)明月を被りて寶璐を佩ぶ。世溷濁にして余を知るなし。吾れ方に高く馳せて顧みず。(六)青虬に駕し白螭を驂にし、吾れ(七)重華と瑤圃に游ばん。(八)崑崙に登りて玉英を食ひ、天

【一】涉江。九章もと九篇あり涉江は其一なり。此篇江南に遷されて作る。
【二】奇服。奇偉の服なり、下文の冠劍被服是れなり、以て高潔の行に喩ふ。
【三】長鋏。刀のツカ。陸離は長き貌。
【四】切雲。冠の名。崔巍は高き貌。
【五】明月。珠の名。寶璐は美玉。
【六】青虬。青龍なり。白螭は神獸。驂はソヘウマ。
【七】重華。舜の名。
【八】崑崙。仙山なり。玉英は

地と壽を比し、日月と光を齊うせん。(九)南夷の吾を知るなきを哀み、旦に余江湘を濟る。(一〇)鄂渚に乘りて反顧し、秋冬の(一一)緒風を欽き、余が馬を(一二)山皐に步ませ、余が車を(一三)方林に低し、(一四)舲船に乘りて余(一五)沅に上り、(一六)吳榜を齊うして以て汰を擊つ。船(一七)容與して進まず、(一八)回水に淹りて疑滯す。

【大意】余幼より奇偉の行を好み年老ゆるも衰へず。然も世貪婪にして我の賢を知る者なし。故に獨り己の志行を高遠にし、高明の地に居りて益〻脩潔し、其養ふ所天地日月と共に不朽なるを得たり。然も楚人の我が賢を知らざるを哀み、旦に江湘を渡りて南に行かんとし、鄂渚に登りて楚都を回顧し、車を驅りて方林に至り、船に乘りて沅水を泝り、衆人力を併せて櫂を擧ぐれども船遲遲として進まず。因つて回流に留りて楚都を戀ふ。

朝に(一九)枉渚を發し、夕に(二〇)辰陽に宿す。苟に余其れ端直なり、僻遠と雖も何をか傷まん。(二一)

【九】南夷。楚國をいふ。
【一〇】鄂渚。地名、今の鄂州なり。
【一一】緒風。餘風なり、春寒尚ほ冬の餘威あるをいふ。屈平の放たれしは中春なり。
【一二】山皐。山澤なり。
【一三】方林。地名なり。
【一四】舲船。船の窓あるもの。
【一五】沅。川の名。
【一六】吳榜。榜は櫂なり、吳人作る所の制に倣ふ、故に吳榜といふ。
【一七】容與。徐緩の貌。
【一八】回水。回流なり。疑滯は惑ひ留るなり。
【一九】枉渚。地名なり。
【二〇】辰陽。地名なり。
【二一】漵浦。水濱なり。儃佪は進まざる貌。

漵浦に入りて余儃佪し、迷ひて吾が如く所を知らず。深林(二二)杳として以て冥冥たり。乃ち(二三)猨狖の居る所なり。山峻高にして以て日を蔽ひ、下幽晦にして以て雨多し。霰雪紛として其れ垠なく、雲(二四)霏霏として宇に承く。吾が生の樂なきを哀み、幽獨にして山中に處る。吾れ心を變じて俗に從ふ能はず、固に將に愁苦して終に窮らんとす。(二五)接輿は髡首し、(二六)桑扈は臝行す。忠必しも用ひられず、賢必しも以ひられず。(二七)伍子は殃に逢ひ(二八)比干は菹醢にせらる。前世を與ふに皆然り。吾又何ぞ今の人を怨みんや。余將に道を董さんとして(二九)豫せず、固に將に(三〇)重昏して身を終へんとす。

【大意】朝に枉渚を發して夕に辰陽に宿す。楚都を去ること益〻遠しと雖も、吾が心端直なれば固より傷む所なし。既に舟を下りて更に水濱に循ひ、迷ひて行く所を知らず。猿聲を聞きつつ深林に入り、更に高山の下に到る。夏は幽晦多雨にして冬は霰雪檐を打つ。我れ心を變へて俗に從ふ能はず。將に愁苦して此地に終らんとす。昔接輿は世を避け佯り狂して頭髮を剃り、桑扈は貧にして衣なく常に裸行し、伍子胥は劍を賜りて

【二二】杳冥冥。暗き貌。
【二三】猨狖。猿なり。
【二四】霏霏。雲の飛ぶ貌。
【二五】接輿。人名。髡首は頭髮を剃り落すこと。
【二六】桑扈。人名。臝行は貧にして衣なく裸體にて行くこと。
【二七】伍子。伍子胥なり、吳王夫差に仕へ劍を賜りて死す。
【二八】比干。人名、紂の叔父なり、紂を諫めて殺さる。菹醢は鹽漬にすること。
【二九】豫。猶豫なり。
【三〇】重昏。益〻暗昧にして光明を見ざること。

自殺し、比干は殺戮せらる。忠賢の必しも用ひられざること古今皆然り、吾れ何ぞ今の人を怨みんや。ただ身を正し行を直くして猶豫せず、暗黑の裏に吾が生を終へんとす。

卜居　屈平

屈平既に放たれて三年、復た見ゆるを得ず。智を竭し忠を盡し、讒に蔽鄣せられ、心煩ひ意亂れ、從ふ所を知らず。乃ち往きて(一)太卜鄭詹尹に見えて曰く、余疑ふ所あり。願くは先生に因りて之を決せんと。詹尹乃ち(二)策を端うし龜を拂ひて曰く、君將に何を以てか之に敎へんとすると。

【大意】屈原放逐せられて既に三年、其間復た君に見えて己の志を伸ぶる能はず。憂愁して適從する所を知らず。因つて卜者鄭詹尹を訪ひ、卜筮によりて己の疑惑を決せんとす。詹尹乃ち筮竹を机上に立て、龜甲の塵を拂ひて曰く、足下の卜筮に問はんとするは何事ぞと。屈原曰く、吾れ寧ろ(三)悃悃款款として朴にして以て忠ならんか、將た往を送り來を勞ひ、斯に窮なからんか、寧ろ(四)草茅を誅鉏し以て力耕せんか、將た(五)大人と遊び以て名を成さんか、寧ろ言を正

【一】太卜。卜筮を掌る者の長なり。
【二】策。めどき、卽ち筮竹なり。龜甲は燒きて卜ふもの。
【三】悃悃款款。誠實の貌。朴は質直なり。
【四】草茅。穢草なり。誅鉏は刈り去ること。
【五】大人。貴人なり。

うして諱まず、以て身を危うせんか、將た俗に從ひ富貴にして、以て生を娯まんか、寧ろ超然として高く擧り、以て眞を保たんか、將た(六)呪詛慄斯、(七)喔咿嚅唲し、以て婦人に事へんか、寧ろ廉潔正直にして、以て自ら清うせんか、將た(八)突梯滑稽、脂の如く韋の如くにして、以て(九)絜楹せんか、寧ろ(一〇)昂昂として千里の駒の若くならんか、將た(一一)汎汎として水中の鳧の若くならんか、波と上下し偸くも以て吾が軀を全うせんか、寧ろ(一二)騏驥と轭を抗げんか、將た駑馬の迹に隨はんか、寧ろ黃鵠と翼を比べんか、將た(一三)雞鶩と食を爭はんか。此れ孰れか吉孰れか凶、何をか去り何をか從はん。世溷濁にして清まず、蟬翼を重しとなし、(一四)千鈞を輕しとなし、(一五)黃鍾は毀ち棄てられ瓦釜は雷鳴し、讒人高く張り賢士名なし。于嗟(一六)嘿嘿たり。誰か吾の廉貞を知らんやと。

【大意】屈原曰く、吾れ誠實質直にして心を君國に盡さんか、去る者は逆り來る者は迎へ、世俗の儘に任せて已まんか、官仕を辭して躬耕を業とせんか、交を貴人に納れて名を揚げんか、趍趄囁嚅して言動を愼み、容れられん事を務めんか、世俗を超脫し吾が本領を固守せんか、從媚して婦女子

【六】呪詛慄斯。趍趄して妄動せざるをいふ。
【七】喔咿嚅唲。囁嚅して妄語する貌。
【八】突梯滑稽。俗に隨ひて逆はざる貌、滑稽は圓轉自在の貌、脂は膏、韋はナメシカハ。
【九】絜楹。觸犯せざること。
【一〇】昂昂。志行の高き貌。
【一一】汎汎。汎汎に同じ、浮漂する貌。
【一二】騏驥。駿馬なり。
【一三】雞鶩。鶩は鴨なり。
【一四】千鈞。鈞は二十四兩なり
【一五】黃鍾。大鐘なり。
【一六】嘿嘿。默默なり。

に事へんか、廉潔にして身を清くせんか、己の才力を發揮し千里の馬の如くならんか、水中の鳧の如く俗流と浮沈せんか、高士と共に翺翔し網羅の禍を避くべきか、小人と共に伍して霄祿を爭ふべきか、請ふ其吉凶を判斷せられよ。ああ今や世亂れて輕重大小を誤り、蟬翼を以て重しとなし、千鈞を以て輕しとなし、大鐘は破り棄てられて、瓦釜は鳴ること雷の如し。（忠臣隱れて佞人進むに喩ふ）世亦默默として之を論ずる者なし。誰か吾が廉直を知る者あらんやと。

【大意】詹尹乃ち策を釋て謝して曰く、夫れ尺も短き所あり、寸も長き所あり。物も足らざる所あり、智も明らかならざる所あり、數も逮ばざる所あり、神も通せざる所あり。君の心を用ひ君の意を行へ。龜策は誠に此事を知る能はずと。

【大意】詹尹陳謝して曰く、尺は寸より長きも、以て河嶽の大を度る能はざれば、尚ほ短しと謂はざるべからず。寸は尺より短きも、毫釐の微を度る能はざれば、尚ほ長しと謂はざるべからず。世事の一概に論斷すべからざる所以なり。されば龜策も此事を判斷する能はず。宜しく足下の志のまに行ふべきなりと。

【七】物。龜を指して言ふ。
【八】數。策を指して言ふ。

漁父

屈平

屈原既に放たれて江潭に遊び、澤畔に行吟す。顏色(一)憔悴し形容枯槁せり。漁父見て之に問ひて曰く、子は(二)三閭大夫にあらずや、何が故に斯に至ると。屈原曰く、世人皆濁り、我獨り淸めり。衆人皆醉ひ我獨り醒めたり。是を以て放たれたりと。漁父曰く、聖人は(三)萬物に凝滯せずして能く世と推し移る。世皆濁らば何ぞ其泥を淈らして其波を揚げざる。衆人皆醉はば何ぞ其糟を餔ひて其醨を歠らざる。何が故に深く思ひ高く擧り、自ら放たれしむるをなすと。屈原曰く、吾れ之を聞く、新に沐する者は必ず冠を彈き、新に浴する者は必ず衣を振ふと。安んぞ能く身の(四)察察たるを以て、物の(五)汶汶たるを受くる者あらんや。寧ろ(六)湘流に赴きて江魚の腹中に葬られん。安んぞ能く(七)皓皓の白きを以て、世俗の塵埃を蒙らんやと。漁父(八)莞爾として笑ひ、(九)枻を鼓して去る。乃ち歌ひて曰く、(一〇)滄浪の水淸まば、以て我が(一一)纓を濯ふべし。滄浪の水濁らば、以て我が足を濯ふべしと。遂に去りて復た與に言はず。

【大意】屈原既に放逐せられて江畔に行吟す。顏色衰へ形體瘦せて枯木の如し。漁父之を見て問

【一】憔悴。痩せ衰ふること。枯槁は枯るること。
【二】三閭大夫。三閭の職は楚の王族昭、屈、景三姓の譜屬を敍し其賢良を率ゐて國士を勵すことを掌る、屈原此職に任ぜらる。
【三】萬物。一本に萬の字なし。
【四】察察。潔白の貌、汶汶。汚れたる貌。
【五】湘流。湘は川の名。
【六】皓皓。潔白の貌。
【七】莞爾。微笑の貌。
【八】枻を鼓す。枻を搖すなり。
【九】滄浪。川の名。
【一〇】纓。冠の紐。

うて曰く、君何の故に此地に至ると。屈原曰く、今や人皆利慾に汚れざるはなきに、我獨り潔白なり、人皆善惡を識別せざるに、我獨り事理に明なり。是の故に放逐の禍に遭ひて、此地に來れるなりと。漁父曰く、聖人は能く世俗と俯仰屈伸し、初めより主持する所なし。世人皆汚れなば君も共に汚るべく、人皆事理に暗からば君も亦自ら暗くすべきなり。何ぞ獨り衆と志行を異にして放逐の禍を買ふべけんやと。屈原曰く、聞く新に沐浴せる者は必ず衣を振ひ冠を彈きて塵垢を蒙るを避くと。吾が深く思ひ高く擧れるは、猶ほ新に沐浴せる者の如し。何ぞ潔白の身を以て塵垢を蒙るに忍びんや。寧ろ湘水に投じて江魚の餌食となるとも、世俗の醜行を爲すに忍びんやと。漁父之を聞きて笑ひ楫を搖して去り、歌つて曰く、滄浪の水淸まば吾が冠纓を洗ひ、濁らば足を洗はんのみ（所謂物に凝滯せず、世と推し移る意なり）と。遂に去りて復た相見ることなかりき。

九辯五首

宋　玉

悲い哉秋の氣たるや。(一)蕭瑟として草木搖落して變衰す。(二)憭慄として遠行に在りて山に登り水に臨みて、將に歸らんとするを送るが若し。(三)泬寥と して天高くして氣淸く、(四)寂漻として潦を收めて水淸し。(五)憯悽として增〻

【一】蕭瑟。淋しき貌。
【二】憭慄。悽愴なり。
【三】泬寥。空豁澄淸の貌。
【四】寂漻。虛靜の貌。潦は流水。
【五】憯悽。悲痛の貌。

薄寒の人に中るを欷き。(六)愴怳懭悢として、故を去りて新に就く。(七)坎壈として貧士職を失ひて志平ならず。(八)廓落として羇旅して友生なし。惆悵して私に自ら憐む。燕(九)翩翩として其れ辭し歸り、蟬寂寞として聲なし。鴈(一〇)噰噰として南に游び、(一一)鵾雞啁哳として悲み鳴く。獨り(一二)申旦まで寐ねられず、蟋蟀の宵征くを哀む。時(一三)亹亹として中を過ぐ。蹇淹留して成すことなし。(其一)

【大意】秋は萬物凋衰の時にして、人をして悲傷せしむること、恰も山に登り水に臨み他鄕に在りて歸鄕する人を送るが如し。天高く氣澄み水流減退して聲なし。是時に當り逐臣たる者寒涼の身に迫るを嘆じ、盛を經て衰に入るの感に堪へず。心に不平を抱いて友の之を慰むるなし。況んや燕去り蟬死し、鴈飛び鵾雞鳴くをや。乃ち曉に達するまで眠る能はず。蟋蟀の夜鳴くを聞き、歲月漸く進みて歲既に半を過ぐるも、他鄕に留滯して成す所なきを悲む。

悲憂窮蹙して獨り廓きに處る。美なる(一四)一人あり心繹けず。鄕を去り家を離れ來りて遠客たり。超に逍遙して今焉に薄る。專ら(一五)君を思ひて化

【六】愴怳懭悢。失意の貌。
【七】坎壈。特立して耦なき貌。
【八】廓落。特立の貌。羇旅は行旅なり。友生は朋友。
【九】翩翩。飛ぶ貌。
【一〇】噰噰。鴈の聲。
【一一】鵾雞。鳥の名。啁哳は繁細の貌。
【一二】申旦。曉に達するまで。
【一三】亹亹。進む貌。

【一四】一人。屈原をいふ。
【一五】君。楚王をいふ。化は志

すべからず。君知らず奈何すべき。怨を蓄へて思を積み、心(一六)煩憺して食事を忘る。願くは一たび見えて余が意を道はん。君の心余と異なり。車駕して朅りて歸り、見ゆるを得ずして心悲む。(一七)結軨に倚りて太息すれば、涕(一八)潺湲として軾を霑す。慷慨して絕えて得ず、(一九)中瞀亂して迷惑し、私に自ら憐むこと何ぞ極らん。心(二〇)怦怦として諒直なり。(其二)

【大意】美丈夫あり心に憂を抱きて獨居し家鄕を離れて此地に客たり。心に君を思ひて自ら變改すべからざるも、君其心を知らざるを奈何せん。一たび進謁して心中を述べんと欲するも、君の心我と異なり。故に駕して故國に還りしも、終に謁見するを得ず。心益〻悲傷す。軨に倚りて長嘆すれば、涙流れて軾を沾し、慷慨殞絕して志を得ず。中情亂れて自ら憐むも、心常に忠貞を失はず。

(二一)皇天四時を平分す。竊に獨り此の(二二)凜秋を悲む。白露既に下りて百草に降り、奄ち此の(二三)梧楸を離披す。白日の昭昭たるを去り、長夜の

【二一】皇天。天なり。
【二二】凜秋。秋氣凜然として寒きなり。
【二三】梧楸。木の名、秋至れば其葉最も早く落つ。離披は分散なり。

を變ずること。
【一六】煩憺。亂れ動く貌。
【一七】結軨。軨は軾下に縱橫せる木なり。
【一八】潺湲。涙の流るる貌。
【一九】中瞀亂。心の亂るること。
【二〇】怦怦。忠正の貌。諒直は誠直なり。

(二四)悠悠たるに襲く。(二五)芳藹の方に壯なるを離れ、余(二六)委約して悲愁す。秋既に先づ戒むるに白露を以てし、冬又之に申ぬるに嚴霜を以てす。(二七)恢台の孟夏を收め、然く(二八)坎傝して沈藏す。葉(二九)菸邑して色なく、枝(三〇)煩挐して交橫す。(三一)顏淫溢して將に罷れんとす。柯彷彿として(三二)委黃し、(三三)萑櫹槮として哀むべし。(三四)形銷鑠して瘁傷す。其の紛糅して將に落ちんとするを惟ひ、其の時を失ひて當るなきを恨む。(三五)騑轡を覽りて節を下し、聊か逍遙して以て(三六)相羊す。歲忽忽として遒り盡き、余が壽の將からざるを恐る。余が生の時ならずして、此世の(三七)侘攘に逢へるを悼む。(三八)澹として容與して獨り倚れば、蟋蟀此の西堂に鳴き、心怵惕して(三九)震盪す。何ぞ憂ふる所の(四〇)多方なる。明月を仰いで太息し、列星に步して明に極る。(其三)

【大意】天は一年を四時に平分し、秋を以て最も悲むべきの時となす。白露既に降れば、梧楸の葉先づ凋落し、日は短くして夜徒に長く、芳草繁茂の時を去りて、萎縮窮迫の節に入る。豈悲愁に堪ふべけんや。霜露結んで盛夏長養の氣を收藏すれば、枝葉萎黃凋落す。既に時を失ひて好時に當るなきを恨む。己の不遇を悲み明月を仰ぎて長嘆し、列星の下に步して一夜を明かす。

(四一)曾敷し、紛として(四二)都房に旖旎たりしを。何ぞ曾華の實なく、風雨に從つて飛颺せる。以爲らく君獨り此の蕙を服すと、嗟以て衆芳に異るなし。(四三)奇思の通せざるを閔み、將に君を去りて高く翔らんとす。心閔憐して慘悽し、一たび見えて明すあらんことを願ふ。怨なくして生がら離れしを重へば、(四四)中結軫して傷を增す。豈(四五)鬱陶として君を思はざらんや、君の門以に九重なり。(四六)猛犬狺狺として迎へ吠え、(四七)關梁閉ぢて通せず。(四八)皇天淫溢して秋霖す。(四九)后土何れの時か乾くを得ん。(五〇)塊として獨り此の無澤を守り、浮雲を仰いで永歎す。(其四)

【大意】蕙華嘗て堂下に咲き滿ちたりしも、風雨に從つて飄零しぬ。吾れ初め君(楚王を謂ふ)此の芳華を佩服するならんと思ひしに、竟に衆芳と同じく衰敗せるは、悲に堪へず。(楚王初め屈原を

(二四)悠悠。長き貌。(二五)芳藹。芳草長茂すること。(二六)委約。委は萎なり、約は窮なり。(二七)恢台。恢は大なり。台は胎なり、夏氣の萬物を長養すること。(二八)坎傝。陷止なり。(二九)菸邑。傷壞なり。(三〇)煩挐。擾亂なり。(三一)顏。木葉の光彩、人の顏色の如し故にいふ。淫溢は幽濕なり。(三二)委黃。萎みて黃色になること。(三三)萑。木葉凋落の貌。櫹槮は木葉衰敗の貌。(三四)銷鑠。焦枯なり。瘁は血敗なり。(三五)騑轡。馬の手綱。覽は摯に同じ。節を下すとは徐行するなり。(三六)相羊。逍遙に同じ。(三七)侘攘。亂るる貌。(三八)澹容與。徐步すること。(三九)震盪。盪は搖動なり。(四〇)多方。多端なり。

(四一)曾敷。重り布くこと。(四二)都房。大なる堂。旖旎は盛なる貌。(四三)奇思。忠信なり。(四四)中結軫。心の結ぼるること。(四五)鬱陶。憤念の心に滿つる貌。(四六)猛犬。讒人に喩ふ。狺狺は吠ゆる聲。(四七)關梁。門のクヮンヌキ。(四八)皇天淫溢。前首に見ゆ。(四九)后土。地なり。(五〇)塊。獨居の貌。無澤は君の恩澤を被らざること。

信任せしも、後之を廢斥せるを謂ふ）吾が忠信の君に通ぜざるを悲み、國を棄てて去らんとするも、亦悲に堪へず。更に一たび君に見えて所思を明さんと欲す。吾れ君を怨まざるも、君却つて我を離絶す。之を思へば中情悲傷を增す。吾が心君を思はざるにあらざれども、君門深遠にして猛犬吠え、門關閉ぢたるを以て、亦至るを得ず。天既に淫雨すれば、地何ぞ乾くを得ん。（君澤衆に及べるに喩ふ）吾獨り塊然として君澤に潤ふを得ず。浮雲を仰いで長嘆するのみ。

何ぞ時俗の工巧なる、(五一)繩墨に背いて改め錯く。(五二)騏驥を却けて乘らず、(五三)駑駘に策ちて路を取る。當世豈騏驥なからんや。誠に之を能く善く御するなし。轡を執る者を見るに其人にあらず、故に駒跳りて遠く去る。(五四)梟鴟皆夫の梁藻を啖ふ。鳳愈〻飄翔して高く擧る。(五五)圜鑿にして方枘なれば、吾れ固に其の(五六)鉏鋙して入り難きを知る。衆鳥皆登り棲む所あり、鳳獨り(五七)遑遑として集る所なし。(五八)枚を銜んで言ふなからんことを願ふも、常て君の(五九)渥洽を被れり。太公九十にして乃ち顯榮す。誠に未だ其の(六〇)匹合に遇はず。騏驥を安にか歸ると謂ひ、鳳皇を安にか棲むと謂ふ。

【五一】繩墨。法度なり。
【五二】騏驥。駿馬なり、賢才に喩ふ。
【五三】駑駘。鈍馬なり、不肖者に喩ふ。
【五四】梟鴟。不肖者に喩ふ。梁藻は重祿に喩ふ。
【五五】圜鑿。圓き穴。方枘は四角なるホゾ。
【五六】鉏鋙。くひちがふこと。
【五七】遑遑。暇なき貌。
【五八】枚。形箸の如く横に之を銜み兩頭に繩あり頂後に結び以て言を止むる具。
【五九】渥洽。厚恩なり。
【六〇】匹合。遇合なり。

古を變へ俗を易へて世衰ふ。今の相る者肥えたるを擧ぐ。騏驥は伏し匿れて見えず、鳳皇は高く飛んで下らず。鳥獸すら猶ほ德に懷くを知る、何ぞ賢士を處らずと云はんや。驥は驟に進んで(六一)服せんことを求めず、鳳も亦(六二)餧を負りて妄に食はず。君棄て遠けて察せず。忠を願ふと雖も其れ焉んぞ得ん。寂寞として端を絶たんと欲するも、窮に敢て初の厚德を忘れず。獨り悲愁すれば其れ人を傷ましめ、(六三)馮鬱鬱として其れ何ぞ極まらん。（其五）

【大意】世人詐僞を好みて法度に遵はず、賢人を却けて用ひず、不肖者を擧げて之を用ふ、世豈に賢者なからんや、ただ賢を知るの明君なきのみ。是を以て賢者は世を遯れて山谷に匿る。吾れ既に世人と趨向を同うせざれば、固より其の容る所とならざるを知る。ただ口を緘して言はざらんと欲すれども、嘗て君の厚恩を受けたるを思へば、復た默視する能はず。昔太公望は年九十にして初めて顯榮せり。吾れ老いたりと雖も豈顯榮の時なきを保せんや。ただ未だ遇合の時に遇はざるのみ。世人は賢者を疎外して深く意を留めず。古への法を變じて俗衰へたれば、馬を相する者も徒に肥馬を良しとして之を擧げ、眞の駿馬は却つて之を逸す。鳥獸すら德なければ懷かず、獨り賢者の遠く去るを怪まんや。吾れ寂寞として跡を滅して去らんと欲するも、尙は當初の厚恩を忘るる能はず。憂心胸に滿ち

【六一】服。車に著くこと。
【六二】餧。餌なり。
【六三】馮鬱鬱。馮は滿盛の貌。

て極る所なし。

(一)招魂　宋玉

(二)朕幼より清にして以て廉絜なり、身義を服ひて未だ沫まず。此の盛徳を主とするも、俗に牽かれて蕪穢す。(三)上此の盛徳を考ふる所なく、長く殃に離りて愁苦す。(四)帝巫陽に告げて曰く、(五)人あり下に在り、我之を輔けんと欲す。魂魄離散す、汝(六)筮して之に予へよと。巫陽對へて曰く、(七)夢を掌る。(八)上帝其命従ひ難し。若し必ず筮して之を予へば、恐らくは後之を謝りて復た用ふる能はざらんと。

【大意】吾少小より清廉の徳を脩め仁義の行をなし、常に道徳を以て主眼とすれども、世俗に牽かれて時に曠廃することなき能はず。常に自ら奮勵しつつあり。然るに楚王我が盛徳を察知せず、遂に廃黜の厄に遇ひて自ら愁苦す。乃ち天帝之を知りて巫陽に命ずらく、下土に賢人屈原あり、我之を輔けて其志を成さしめんと欲すれども、其魂魄既に離散せり、汝宜しく筮して魂魄の所在を問ひ、之を其身に反らしめよと。巫陽之に對へて曰く、天帝よ我れ其命に従ひ難し。何となれば夢を占ふは吾が職なり。魂魄の所在に至りては、占筮の能く知る所にあらず。然も必ず之を筮せば、後人占筮を蔑視し、之を棄て去りては復た用ひざるに至らん。唯之を招くに如かざるなりと。巫陽焉に乃ち下り招きて曰く、魂來り歸れ、君の(九)恆幹を去り、何爲れぞ四方にする。君の樂處を舍て、彼の(一〇)不祥に離ふ。魂歸り來れ、東方には以て託すべからず、(一一)長人の千仞なるあり、唯魂を是れ索む。十日代〻出で、金を流し石を鑠す。彼皆之に習へり。魂往かば必ず釋けん。歸り來れ歸り來れ、以て託すべからず。魂歸り來れ、南方には以て止るべからず。(一二)雕題墨齒、人肉を得て以て祀り、其骨を以て醢となす。(一三)蝮蛇蓁蓁として、(一四)封狐千里なり。(一五)雄虺九首、往來倏忽として、人を呑み以て其心を益す。歸り來れ歸り來れ、以て久しく淫るべからず。魂歸り來れ、西方の害、(一六)流沙千里、旋りて(一七)雷泉に入り、(一八)靡散して止るべからず。幸にして脫るるを得るも、其外に(一九)曠宇あり。赤蟻象の若く、(二〇)玄鑑壺の若し。五穀生せず。(二一)叢菅を

【一】招魂。此篇古來宋玉の作となせども屈原の作となすものもあり、今後説に從ひ屈原自ら己の魂を招くものとなして儕す。
【二】朕。屈原自ら謂ふ。
【三】上。君なり。楚王をいふ。
【四】帝。天帝なり。巫陽は巫の名。
【五】人。賢人なり、屈原をいふ。
【六】筮。うらなふこと。
【七】夢を掌る。巫陽自ら其の職掌を述ぶるなり。夢を占ひて吉凶を判斷する事を掌るとなり。
【八】上帝。天帝なり。天帝を呼びかけて言ふなり。

【九】恆幹。常體なり。
【一〇】不祥。不善の物。
【一一】長人。たけたかき人。
【一二】雕題。額にいれずみする事。墨齒は齒を染むること。
【一三】蝮蛇。まむし。蓁蓁は衆るる貌。
【一四】封狐。大狐なり。
【一五】雄虺。蛇なり。
【一六】流沙。沙漠なり。
【一七】雷泉。雷澤なり。
【一八】靡散。碎け散ること。

是れ食ふ。其土人を爛し、水を求むれども得る所なし。(三)彷徉して倚る所なく、廣大にして極る所なし。歸り來れ歸り來れ、恐くは自ら賊を遺さん。魂歸り來れ、北方には以て止るべからず、(三)増冰峨峨として飛雪千里なり。歸り來れ歸り來れ、以て久うすべからず。魂歸り來れ、君天に上るなかれ、(三)虎豹九關、下人を啄害す。一夫九首、木を拔くこと九千なり。豺狼(三)從目、往來(三)侁侁たり。人を懸けて以て嬉れ、之を深淵に投ず。命を帝に致し、然る後瞑るを得。歸り來れ歸り來れ、往かば恐くは身を危うせん。魂歸り來れ、君此の(三)幽都に下るなかれ。(三)土伯九約、其角(三)觺觺たり。(三)敦脄血拇、人を逐ひて(三)駓駓たり。參目虎首、其身牛の若し。(三)此れ皆人を甘しとす。歸り來れ歸り來れ、恐くは自ら災を遺さん。

【一九】曠宇。無人の土なり。
【二〇】玄蠭。黑蜂。
【二一】叢菅。菅は草の名。
【二二】彷徉。彷徨なり。
【二三】増冰。層氷なり。峨峨は高き貌。
【二四】虎豹。天門に九關あり、虎豹之を守る。
【二五】從目。目の縱につけること。
【二六】侁侁。羣行の貌。
【二七】幽都。地下、后土の治むる所なり。
【二八】土伯。后土の侯伯。約は屈なり。
【二九】觺觺。角の聳ゆる貌。
【三〇】敦脄。厚き脊肉。血拇は血に染める拇指。人を攫みて之を食ふを以てなり。
【三一】駓駓。走る貌。
【三二】此れ皆。此一句は竄入か或は此下に脫文ありといふ。前後の例に據るに當に然るべし。

【大意】巫陽乃ち天より下り屈原の魂を招きて曰く、魂屈原が身に反れ、何爲れぞ汝の常居を

離れて四方に遊ぶ。何爲れぞ樂土（楚國を指す）を棄てて不善の鄉に走る。魂よ東方には居るべからず。何となれば身長千仞の巨人あり、魂を以て常食となす。又扶桑の木あり其下より十日竝び出で、酷熱にして金石も爲に鑠く。彼土の人は之に慣れて驚かざれども、魂若し其地に至らば必ず銷釋せん。南方にも亦居るべからず、額に黥し齒を染めたる土人あり、其族人肉を供へて祖先を祀り、其骨を以て醢醬となす。又毒蛇大狐あり。皆人を殺して之を食ふ。西方にも亦居るべからず。沙漠千里に亙り、一たび此に入れば沙土散亂して深淵に墮つるが如く。幸に陷沒の災を脫るるを得るも、其外に無人の境あり。ここに害蟲多く廣大にして涯なし。北方にも亦居るべからず。飛雪層氷千里に亙れり。魂又天に上るなかれ。天門九重ありて虎豹之を守り、人の天に升らんとする者あれば、忽ち之を噬み殺す。又丈夫あり一身にして九首、其力一目に九千本の大樹を拔く、又縱目の豺狼あり、羣行して人を害し、人を得れば先づ其頭を木に懸けて之を弄し、然る後深淵に投棄し、天帝に復命して初めて臥眠す。魂又地に入るべからず。其の侯伯に身九屈し其角高く聳え、脊肉厚く拇指常に血に染み、目三個ありて首は虎の如く、身は牛の如きあり。其害測るべからず。魂よ宜しく歸りて屈原の身に入るべきなり。

魂歸り來りて(三三)脩門に入れ。(三四)工祝君を招き

【三三】脩門。楚都郢城の門。
【三四】工祝。男巫の巧辯なる者

背行して先だつ。(三五)秦篝齊縷鄭緜絡ひ、招具該ね備りて永く嘯呼す。魂歸り來りて故居に反れ。天地四方賊姦多し。君が室を(三六)像設し靜間にして安し。(三七)高堂邃宇檻軒を層ね、層臺累榭高山に臨み、(三八)網戸朱綴刻方連り、冬は(三九)突廈あり夏室は寒し。川谷(四〇)徑復して流潺湲たり。光風蕙を轉じて(四一)崇蘭を氾はし、堂を經て奥に入れば(四二)朱塵筵あり。(四三)砥室翠翹曲瓊を絓け、(四四)翡翠珠被爛として光を齊うす。(四五)翡阿壁を拂ひ羅幬張り、(四六)纂組綺縞奇璜を結ぶ。室中の觀珍怪多く、(四七)蘭膏明燭華容備り、(四八)二八侍宿して射へば遞に代る。(四九)九侯の淑女多くして衆より迅く、(五〇)盛鬋制を同うせずして滿宮に實つ。容態(五一)好比順彌〻代り、弱顏(五二)固植謇其れ意あり。(五三)姱容脩態洞房に絙り、蛾眉(五四)曼睩

背は倍なり、倍行は晝夜兼行して魂を迎ふるをいふ。

【三五】秦篝。篝は絲を入るる籠。縷は絲。秦齊は其産地を示す。

【三六】像設。像は法なり、のつとること。靜間は閑靜なり。

【三七】高堂邃宇。魂の居室をいふ。檻は欄干。

【三八】網戸。戸扉皆網の目の模樣を刻み、塡むるに朱泥を以てす、故に朱綴といふ。刻方は網の目の形を刻して方形をなせるもの相連るなり。

【三九】突廈。深邃なる大屋。

【四〇】徑復。交流すること。

【四一】崇蘭。叢蘭なり。

【四二】朱塵筵。塵は承塵、ナゲシなり、塵及び筵を飾るに朱を以てす。

【四三】砥室。砥石を以て壁とせる室。翠翹は翡翠鳥の羽なり以て飾となす。曲瓊はマガタマ。

【四四】翡翠珠被。翡翠鳥の羽及び珠玉を以て飾りし衾。

【四五】翡阿。翡は弱なり、阿は細繒なり。羅幬はウスギヌのトバリ。

【四六】纂組。くみひも。綺縞は模樣ある絹。奇璜は美玉なり。

【四七】蘭膏。香蘭を以て煉りしアブラ。

【四八】二八。十六人の女樂。

【四九】九侯。九國諸侯。

【五〇】盛鬋。雲鬢なり。

【五一】好比。和交親比なり。

目光を騰ぐ。(五五)靡顏膩理遺視矊なり。(五六)離榭脩幕君の間に侍す。翡帷翠幬高堂を飾り、紅壁沙版(五七)玄玉の梁。仰いで(五八)刻桷を觀れば龍虵を畫き、堂に坐し檻に伏して曲池に臨む。(五九)芙蓉始めて發いて芰荷を雜ふ。紫莖(六〇)屏風文波に緣る。(六一)文異豹飾陂陁に侍す。(六二)軒輬既に低りて步騎羅る。(六三)蘭薄戸樹瓊木の籬あり。魂歸り來れ、何ぞ遠ざかるをなさん。

【大意】魂歸り來りて郢都の門に入れ、巫祝汝を迎へ道を倍して先導し、汝の服既に備れり。宜しく早く歸るべきなり。天地四方害賊多きこと上に述べたるが如し。今汝の居室を造營すること法の如くす。是を以て寬宏にして安靜なり。何ぞ早く歸らざる。汝の室は冬暖に夏凉しく、珍奇を盡して粧飾し、夜は明燭晃晃として、美女十六人をして侍宿せしめ、厭倦すれば更に他の女を以て之に代らしむ。又九國諸侯の美女あり、奔走便捷なること衆女にまさり、盛に鬢髮を飾理し各〻體制を異にす。此の如き美女後宮に充滿せ

【五二】固植。堅固なる志。

【五三】姱容脩態。美好なる容姿。洞房は閑室なり。

【五四】曼睩。曼は長細の貌。睩は謹視の貌。

【五五】靡顏。靡は緻なり。膩理はキメのこまかなること。遺視はナガシメに見ること。

【五六】離榭。離れ座敷。脩幕は長きトバリ。

【五七】玄玉。黑色の玉。

【五八】刻桷。雕刻を施したるタルキ。

【五九】芙蓉。蓮花なり。芰荷は菱。

【六〇】屏風。水草の名。

【六一】文異豹飾。侍從の人皆虎豹の文、異彩の飾をなす。陂陁は長陛なり。

【六二】軒輬。輕車なり。

【六三】蘭薄。蘭叢なり。戸樹は門戸の兩傍に佳樹を植うること。

り。其の顏貌柔和、心志堅固にして意態の愛好すべきものあり。又虎豹の文、異彩の飾をなせる侍衛の士あり。汝に侍して陛階をまもり、門戸の傍には芳蘭を植ゑたり。魂よ早く此の室に歸るべし。

室家遂に宗くして食(六四)多方なり。(六五)稻粢穱麥黃粱を拏へ、大苦鹹酸辛甘行り、肥牛の(六六)腱臑若として芳し。酸若び苦を和して(六七)吳羹を陳ね、濡鼈炮羔(六八)柘漿あり。(六九)鵠酸臇鳧鴻鶬を煎にし、(七〇)露雞臛蠵厲にして爽らず。(七一)粔籹蜜餌餦餭あり、(七二)瑤漿蜜刁羽觴に實ち、糟を挫り(七三)凍飲して酎清涼なり。(七四)華酌既に陳りて瓊漿あり。歸り來れ歸り來れ、故室に反れ、敬して妨ぐるなけん。(七五)肴羞未だ通せざるに女樂羅り、鐘を陳ね鼓を按ちて新歌を造す。(七六)涉江采菱揚荷を發す。美人既に醉ひて(七七)朱顏酡き、(七八)娭光眇視して目波を曾ぬ。文を被り纖を服

【六四】多方。多種なり。
【六五】稻粢。米及びキビ。穱麥は燕麥なり。黃粱も穀物の名。
【六六】腱。筋頭なり。臑若は熟爛の貌。
【六七】吳羹。吳人の製法によれるアツモノ。
【六八】柘漿。藷蔗の汁を以て作りし飲物。
【六九】鵠酸。鵠肉を煮て味を酸くせし物。臇鳧は鳧肉の羹。鴻鶬は鳥の名。
【七〇】露雞。雞のマルニ。臛蠵は大龜の羹。厲は味清烈なるも口に乖かざるなり。
【七一】粔籹。米の粉を水にてこね環狀にして油を以て煎りたる物。蜜餌は蜜を和したる餅。餦餭はアメ。
【七二】瑤漿。玉の如き飲物。勺は酒を挹む具。
【七三】凍飲。氷を和して飲む。酎は醇酒。
【七四】華酌。華盛の飲宴。
【七五】肴羞。食饌なり。通は徹なり。膳部を取り下ぐること。
【七六】涉江。以下皆歌曲の名。
【七七】朱顏。赤き顏。
【七八】娭光。戲るる目つき。眇

し麗にして(七九)奇ならず。長髮曼鬋豔にして(八〇)陸離たり。二八容を齊へ起ちて(八一)鄭舞す。衽は交竿の若く(八二)案を撫して下り、(八三)竽瑟狂會して鳴鼓を搷つ。宮庭震驚して(八四)激楚を發し、(八五)吳歈蔡謳大呂を奏す。士女雜り坐し亂れて分れず。(八六)組纓を放陳し班として其れ相紛れ、鄭衞の妖玩來りて雜陳し、激楚の結獨り秀で先だつ。(八七)箟簳象棊六簙あり。曹を分ち竝び進み遒りて相迫る。(八八)梟を成して牟ち(八九)五白を呼ぶ。(九〇)晉制犀比白日を費し、鐘を鏗き(九一)簴を搖し梓瑟を揳き、酒を娛みて廢せず日夜に沈み、蘭膏明燭(九二)華鐙錯り、(九三)至思を結撰して蘭芳假り、人極る所あり心を同うして賦す。酎飲既に歡を盡して(九四)先故を樂まん。魂歸り來りて故居に反れ。

視は微睇なり。
【七九】奇。奇邪なり。
【八〇】陸離。長き貌。
【八一】鄭舞。鄭國の舞なり。
【八二】案。几案なり。
【八三】竽瑟。樂器の名。
【八四】激楚。激越せる聲。
【八五】吳歈。以下皆各國の歌。
【八六】組纓。印綬及び冠の紐。班は交り亂るる貌。
【八七】箟簳。箟は琨なり、玉なり、簳は博箸、サイなり。象棊は象牙のコマ。六簙は箸卽ちサイを投げ、其のあらはれたる數によりて棊卽ちコマを行りて勝負を爭ふ遊戲なり、箸棊ともに六個あり、故に六簙といふ。
【八八】梟。博采の名、梟を以て勝とし、倍勝を牟といふ。
【八九】五白。杜詩の註に局戲の采白黑各六、白の多きを以て勝となすとあり、故に五白を呼ぶなり。
【九〇】晉制犀比。晉國の工匠の作れる犀角を比集して雕飾せる棊箸をいふ。白日を費すとは簙戲に耽りて日を送るなり。
【九一】簴。鐘を懸くる架。梓瑟は梓材を以て作れる瑟。
【九二】華鐙。華飾の燈。
【九三】至思。至深の情思。結撰は述ぶること。
【九四】先故。舊事なり。

【大意】　堂室既に高崇にして食饌亦多種なり。膳羞未だ取り去らざるに、女樂早くも羅列し、鐘を列ね鼓を擊ちて新曲を奏し、美女半醉半醒にして、嬉戲の目光波紋の轉ずるが如く、被服亦纖麗にして鬢髮艷美なり。美女十六八一齊に起ちて鄭舞を演じ、衣襟の回旋すること竹竿を交ふるが如く、歌鼓の聲之に從つて湧く。宴樂既に終れば更に博戲を設けて興を添へ、夜は明燭を置きて各思ふ所を賦す。詞華盛美なること蘭芳の如く、各歡樂を極め賦する所皆其趣を同うす。飲宴して歡を盡すこと此の如く、また舊時の歡を再びするに足る。魂よ早く歸り來りて此樂を受けよ。

(九五)亂に曰く、(九六)獻歲發春汩として吾れ南に征く。(九七)菉葹葉を齊うして白芷生ず。路(九八)廬江を貫いて長薄を左にし、沼に倚り瀛を畦にし遙に望むこと博し。(九九)青驪駟を結んで千乘を齊うし、(一〇〇)懸火延き起して玄顏烝し、步及び(一〇一)驟處誘き騁せ先だつ。驚するを抑へ若ひ通り車を引いて右に還り、王と(一〇二)夢に趨りて後先を課す。君王親く發して青兒を憚れしむ。(一〇三)朱明夜に承ぎて時淹うすべからず。皐蘭徑に被りて斯路漸さる。

【九五】亂。篇末に置きて一篇の大旨を總括する詞。
【九六】獻歲。年頭なり。發春は春初なり。汩は去る貌。
【九七】菉葹。永草の名。白芷は香草。
【九八】廬江。長薄。地名なり。
【九九】青驪。あを毛の馬。駟は四匹の馬なり。
【一〇〇】懸火。燈を林中に懸くること。玄顏は天の色。
【一〇一】驟處。馬に乘りて走る者止りて獸を圍む者。
【一〇二】夢。雲夢澤、楚の大澤の名。
【一〇三】朱明。日なり。

(一〇四)湛湛たる江水上に楓あり。目千里を極めて春心を傷ましむ。魂歸り來れ江南を哀むなし。

【大意】　亂に曰く、(以下屈原自ら實事を敍す)初春の時吾廢黜せられて南方に行く。時に菉葹葉を齊うし白芷路傍に生せり。廬江を過ぎ長薄を左に見、池邊に徙倚し池澤を徑りて行けば、一望ただ渺然として廣し。吾嘗て楚王に從つて狩し、兵車千乘驪馬を駕し、燈を林木に懸け、其光天を焦す。步する者驟る者止りて獸を圍む者あり。吾れ之を誘導して先驅し、馳する者を抑へて獵事を順通せしめ、車を引き右に轉じて王と雲夢澤に走り、ここに士卒の先後を校す。王終に矢を發して青兒を獲たり。其後幾星霜を經、今放逐せられて此路を經れば、芳蘭徑を蔽ひ春水漲りて路を沒し、江水深くして其上ただ楓樹あり。一望千里坐に人をして心を傷ましむ。魂よ歸り來れ江南眞に哀むべきなり。

【一〇四】湛湛。水深き貌。

(二)招隱士　劉安

桂樹山の幽に叢生し、(一)偃蹇連卷として枝相繚る。山氣(二)龍嵸として石嵯峨たり。谿谷(四)嶄巖として水曾り波たつ。(五)猿狖羣り嘯き虎豹嗥

【一】招隱士。屈原を招く意を寓せるなり。
【二】偃蹇連卷。屈曲する貌。
【三】龍嵸。山氣のかさなる貌。
【四】嶄巖。險峻の貌。
【五】猿狖。猿の類。

ゆ。桂枝を攀援して聊か(六)淹留す。(七)王孫游びて歸らず。春草生じて萋萋たり。歳暮自ら聊んぜず。(八)蟪蛄鳴いて啾啾たり。(九)坱たり軋たり山曲(一〇)岪たり。心淹留して(一一)洞として荒忽たり。(一二)罔たり沕たり。(一三)憭たり慄たり。虎豹(一四)岏す。叢薄深林人上り慄る。(一五)嶔崟碕礒として硱磈磳硊たり。(一六)樹輪相糺ひて林木(一七)茇骫たり。(一八)青莎雜り樹ち薠草(一九)靃靡たり。白鹿(二〇)麕麚あり或は騰り或は倚る。狀貌(二一)崟崟として峨峨たり。(二二)凄凄として漇漇たり。獼猴熊羆類を慕ひて以て悲む。桂枝を攀援して聊か淹留す。虎豹鬪ひて熊羆咆え、禽獸駭いて其曹を亡ふ。王孫歸り來れ、山中は以て久しく留るべからず。

【大意】山中幽深險阻にして虎豹猿猴常に咆哮す。君子（屈原を指す）ここに居り他に倚るべきなく、ただ桂樹の芳潔なるを慕ひ、其枝に攀援して留滯す。王孫（屈原を指す）の出でて山中に遊びしは、春草萋萋の時なりしが、今既に歳暮に至るも尚ほ歸らず。ただ山中に在りて寒蟬の

【六】淹留。滯留なり。
【七】王孫。屈原は楚王と同姓たり、故に王孫と稱す。
【八】蟪蛄。秋蟬なり。
【九】坱軋。山巖巨大にして相切磨する貌。
【一〇】岪。山巖相拂戻すること。
【一一】洞。憂ふる貌。荒忽は恍惚なり。
【一二】罔。志を失ふ貌。沕は心の潛藏する貌。
【一三】憭慄。畏懼する貌。
【一四】岏。穴に棲むこと。
【一五】嶔崟。以下皆山石の貌。
【一六】樹輪。樹枝盤屈して車輪の如きなり。
【一七】茇骫。屈曲すること。
【一八】青莎。草の名。
【一九】靃靡。柔弱の貌。
【二〇】麕麚。鹿の類。
【二一】崟崟峨峨。頭角高き貌。
【二二】凄凄漇漇。毛の潤ふが如きなり。

悲鳴を聞き、其心に猶ほ歸るを肯んぜず。毎に虎豹の害を懼る。今や虎豹鬪ひ熊羆吼え、鳥獸すら驚き走りて羣を失ふ。山中には久しく居るべからず。王孫宜しく早く歸るべし。

七上

(一)七發八首　(二)枚叔

楚の太子疾あり。吳客往きて之を問ひて曰く、伏して聞く太子玉體安からずと。亦少しく間えたりやと。太子曰く憊れたり。謹んで客に謝すと。客因りて稱して曰く、今の時天下安寧、(三)四宇和平にして、太子方に年に富めり。意ふに久しく安樂に耽り日夜極りなく、邪氣襲逆して中(四)結轖の若く、(五)紛屯澹淡として(六)噓唏煩酲し、(七)惕惕怵怵として臥して瞑るを得ず。(八)虛中重聽して人聲を聞くを惡み、精神(九)越渫して百病咸く生じ、(一〇)聰明眩曜して悅怨平ならず。久しく執りて廢せずんば(一一)大命乃ち傾かん。太子豈是れあし。

【一】七發。七事を說きて太子を啓發するなり、猶ほ楚辭七諫の流の如し。
【二】枚叔。枚乘、字は叔、漢の淮陰の人なり、初め吳王濞の郎中令となる、吳王反す、乘諫むれども從はず、乃ち梁の孝王に事ふ。孝王薨ぜし後入りて武帝に仕ふ。
【三】四宇。四方といふが如し。
【四】結轖。氣結の病をいふ。
【五】紛屯澹淡。混亂の貌。
【六】噓唏。哀歎なり。煩酲は酒に病むが如きなり。
【七】惕惕怵怵。驚く貌。
【八】虛中。精氣の竭くること。重聽は耳の遠きこと。
【九】越渫。散發なり。
【一〇】聰明。耳目なり。眩曜は

りやと。太子曰く謹んで客に謝す。君の力に賴り時時之れあり。然れども未だ是に至らざるなりと。

【大意】　此篇の大意は聲色遊觀の娯むべきは要言妙道の聽くべきに如かずといふに在り。楚の太子の病むや、吳客往きて其病を問ひ、且つ曰く今天下太平にして太子年方に盛なり。意ふに日夜歡樂に耽りし爲邪氣の襲ふ所となり、心氣結んで解けず、夜安眠する能はず、精神衰耗して喜怒常ならざるに至りしならん。久しく癒えずんば、之が爲に命を殞さん。太子の病既にここに至れるかと。太子曰く我が君の力に賴り、天下太平なるを以て、久しく安樂に耽り、時に此疾あれども、未だ足下の言の如く甚しきに至らずと。客曰く今夫れ貴人の子は必ず宮居して閨處す。內に保母あり外に傅父あり。交らんと欲するに所なし。飲食は則ち溫淳（一三）甘膬、（一四）腥醲肥厚なり。衣裳は則ち（一五）雜遝曼煖、（一六）燀爍熱暑なり。金石の堅きありと雖も猶ほ將に（一七）銷鑠して挺解せんとす。況んや其の筋骨の間に在るを

目のくるめくこと。

【一】大命。壽命なり。

【二】閨處。深閨の中に居ること。

【三】甘膬。甘美なり。

【四】腥醲、腥は精肉、醲は厚味なり。

【五】雜遝。複雜なり。曼は輕細なり。

【六】燀爍。煖ない。

【七】銷鑠。消散なり。挺は動なり。

や。故に曰く、耳目の欲を縱にし（一八）支體の安きを恣にする者は、血脈の和を傷ると。且つ夫れ出づるに輿し入るに輦す。命けて（一九）躄痿の機といふ。眉、命けて伐性の斧といふ。甘脆肥醲、命けて腐腸の藥といふ。（二〇）洞房淸宮、命けて寒熱の媒といふ。（二一）皓齒蛾眉、命けて伐性の斧といふ。甘脆肥醲、命けて腐腸の藥といふ。（二二）淫溼し、手足（二三）惰窳するは、筋骨挺解し血脈（二四）淫濯し、（二五）越女前に侍り（二六）齊嫗後に奉へ、往來游讌して、（二七）曲房隱閒の中に縱恣すればなり。此れ毒藥を甘餐し、猛獸の爪牙に戲るるなり。從つて來る所の者至つて深遠なり。淹滯永久にして廢せずんば、（二八）扁鵲をして內を治め（二九）巫咸をして外を治めしむと雖も、尙ほ何ぞ及ばんや。今太子の病の如きは、獨り宜しく世の君子、博見彊識、間を承けて事を語り、度を變じて意を易へ、常に側を離るるなく、以て（三〇）羽翼をなすべし。淹沈の樂、（三一）浩唐の心、（三二）遁佚の志、其れ奚に由りてか至らんやと。太子曰く諾、病已えば請ふ此言を事とせんと。

【八】支體。肢體なり。

【九】躄痿。足行くこと能はざる病。

【一〇】洞房。深閨なり。

【一一】皓齒。白き齒。蛾眉は美しき眉。美人の稱。

【一二】膚曼。細美なり。

【一三】四支。四肢なり、手足をいふ。委隨は屈伸する能はざるなり。

【一四】淫濯。過度に大なること。

【一五】惰窳。力なきこと。

【一六】越女。越國の美女。

【一七】齊姬。齊國の美女。

【一八】曲房隱閒。深閨なり。

【一九】扁鵲。古の名醫なり。

【二〇】巫咸。祈禱者の名。

【二一】羽翼。補佐なり。

【二二】浩唐。浩蕩なり。

【二三】遁佚。過度なり。

【大意】客曰く、貴人は常に深閨の中に居り、左右に傅母あり、廣く交遊して自ら放にせんと欲するも自由ならず。飲食は濃厚にして、衣服は複雜なり。故に金石の堅きも、尚ほ之を消弊し盡すべし。況んや人の筋骨をや。且つ出入に輿車に乘る。此れ麽痿の機なり。深閨は寒熱病の養成所なり。美女は性命を伐るの斧なり。濃厚の食は腸を腐らすの藥なり。今太子の肌膚虛弱にして四肢力なく、血脈昂奮するは、美女往來遊宴して嗜慾を深閨の中に恣にすればなり。是れ實に毒藥を甘しとし、猛獸の爪牙に戲るる者といふべし。久しく之を續くれば、如何なる名醫祈禱者と雖も、此病を除くべからざるに至らん。宜しく博識の君子を左右に置きて、補佐せしむべし。然らば、恥溺の樂、放蕩の心、過淫の志を起さざるに至らんと。太子曰く吾が病癒えなば、必ず足下の言に從はんと。（以上第一章）

客曰く、今太子の病は藥石〔二四〕針刺灸療して已ゆるなかるべし。要言妙道を以て說いて去るべきなり。之を聞くを欲せざるかと。太子曰く僕願くは之を聞かんと。客曰く、〔二五〕龍門の桐高さ百尺にして枝なし。中鬱結して〔二六〕輪菌たり。根〔二七〕扶疏として以て分離せり。上に千仞の峯あり下百丈の谿に臨み、湍流〔二八〕遡波又之を瀹淡し、其根半死し半生く。冬は則ち烈風漂霰飛雪の激する所なり。夏は則ち雷

【二四】針刺。針治なり。灸療は灸を燒きて治療すること。
【二五】龍門。山の名。
【二六】輪菌。文理委曲の貌。
【二七】扶疏。四方に布くこと。
【二八】遡波。逆流の波。瀹淡は搖蕩なり。

霆霹靂の感ずる所なり。朝には則ち〔二九〕鸝黃鴝鳴き、暮には則ち〔三〇〕鷸雌迷鳥宿る。獨鶴晨に其上に號び〔三一〕鵾雞哀鳴して其下に翔る。是に於て秋に背き冬に涉り、〔三二〕琴摯をして斫斬して以て琴を爲らしめ、〔三三〕野繭の絲以て絃となし、〔三四〕孤子の鉤以て隱となし、〔三五〕九寡の珥以て約となし、〔三六〕師堂をして操暢し。〔三七〕伯子牙をして之が爲に歌はしむ。歌に曰く、麥秀でて〔三八〕薾たり雉朝に飛ぶ。虛壑に向ひ〔三九〕槁槐に背き、〔四〇〕絕區に依り廻溪に臨む。飛鳥之を聞き翼を翕めて去る能はず。野獸之を聞き耳を垂れて行く能はず。〔四一〕蛟蠔螻蟻も之を聞き喙を柱へて前む能はず。此れ亦天下の至悲なり。太子能く彊め起きて之を聽かんかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。

【大意】客曰く太子の病は藥石針灸の能く癒やす所にあらず。ただ要言妙道を說きて、之を癒やすべきのみ。太子之を聞くを欲するかと。太子曰く願くは之を聞かんと。客徐に曰く龍門山に桐樹あり、木理盤屈して根四方に張り、湍水之を搖蕩し、其根半枯れ半生く。更に烈風飛雪、雷霆霹

【二九】鸝黃鴝鳴。鳥の名。
【三〇】鷸雌。孤鳥なり。
【三一】鵾雞。鳥の名。
【三二】琴摯。師摯なり、琴の名手。
【三三】斫斬は斬ること。
【三四】野繭。野蠶の繭。
【三五】孤子の鉤。鉤は帶鉤なり、古樂府に孤子生行あり。隱は琴上の飾。悲聲多からしめんが爲に孤子の帶鉤を取りて飾となすなり。
【三六】九寡の珥。列女傳に九子の寡母あり。珥はミミタマ。約は的なり、琴徽なり。
【三七】師堂。古の琴を善くする者。
【三八】伯子牙。一本に子の字なし。古の琴の名手。
【三九】薾。麥芒の貌。
【四〇】槁槐。枯れたる槐。
【四一】絕區。危絕の地。
蛟螻蠔蟻。小蟲の名。

靂の觸犯する所となり、悲鳥其上下に鳴く。秋冬の候に至り、師曠をして之を斬りて琴を作らしめ、孤子の鉤、九寡の珥を以て飾となし、師堂伯牙をして之を彈じて歌はしむれば、其聲極めて悲哀にして、鳥獸も之を聞きて沈吟す。太子病を强めて起き此の妙音を聞くを欲せざるかと。太子曰く吾れ病みて未だ能はざるなりと。（以上第二章）

客曰く 〔五三〕觸牛の腴、菜するに 〔五四〕筍蒲を以てし、肥狗の 〔五五〕和、冒ふに 〔五六〕山膚を以てし、〔五七〕楚苗の食、〔五八〕安胡の飯、之を摶するに解けず、一啜して散ず。是に於て 〔五九〕伊尹をして煎熬し、〔六〇〕熊蹯の臑。〔六一〕勺藥の醬、〔六二〕薄者の炙、鮮鯉の鱠、〔六三〕秋黄の蘇、白露の 〔六四〕茹、蘭英の酒、酌んで以て口を滌ぎ、〔六五〕山梁の餐、豢豹の胎、小しく飯し大に齧み、湯の雪に沃ぐが如し。此れ亦天下の至美なり。太子能く彊め起きて之を嘗めんかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。

〔五二〕觸牛。舸を以て養ひし牛。
〔五三〕腴。腹下の肉。
〔五四〕筍蒲。菜の名。詩經に「維れ筍及び蒲」とあり。
〔五五〕和。和羹なり、料理の名。
〔五六〕山膚。註に未詳とあり、察するに菜の名なり。
〔五七〕楚苗。楚の苗山の粳稻。
〔五八〕安胡。胹胡。草實の名。
〔五九〕伊尹。料理人として湯に仕へし人。煎熬は料理すること。
〔六〇〕熊蹯。熊の掌。美味を以て名あり。臑は煮ること。
〔六一〕勺藥。鹹酸美味を調和せし物。
〔六二〕薄者。獸の脊肉。
〔六三〕秋黄。秋になりて色づくこと。蘇は菜の名。
〔六四〕茹。菜の名。
〔六五〕山梁。雉なり。論語に「山梁の雌雉、時なる哉時なる哉」とあり。

【大意】客曰く肥牛の肉に和するに筍蒲の菜を以てし、狗肉に和するに山膚を以てし、楚地の粳稻を以て食となし、胹胡を以て飯となし、之を摶べども解けず、一嘗すれば忽ち散ず。其の黏りて滑なること知るべし。更に伊尹、易牙をして調理せしめ、熊掌を煮て勺藥の醬を和し、脊肉を炙りぐが如し。此れ亦天下の美食なり。太子起きて之を食はんと欲するかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。（以上第三章）

客曰く、〔六六〕鍾儋の牡、〔六七〕齒至の車、前は飛鳥に似、後は〔六八〕馳虛に類し、〔六九〕穱麥服處し、中に躁がしく外に煩しく、堅轡を羈して 〔七〇〕易路に附く。是に於て 〔七一〕伯樂其前を相、〔七二〕王良造父之が御となり、〔七三〕秦缺、樓季之が右となる。此の兩人は馬佚すれば能く之を止め、車覆へれば能く之を起す。是に於て 〔七四〕千鎰の重きを射、千里の逐を爭はしむ。此れ亦天下の至駿なり。太子能く彊め起きて之に乘らんかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。

〔六六〕鍾儋。地名、馬の産地なり。牡は馬なり。
〔六七〕齒至。齒至馬を以て車に駕するなり。
〔六八〕馳虛。善く走る獸の名。
〔六九〕穱麥。燕麥なり。服處は馬を飼ふこと。
〔七〇〕易路。平坦なる道。
〔七一〕伯樂。善く馬を相する人。
〔七二〕王良、造父。善く馬を御する人。
〔七三〕秦缺、樓季。善く走る人、右は車右なり。
〔七四〕千鎰。一鎰は二十四兩。射は賭なり。

【大意】　客曰く駿馬を以て輕車に駕し、其疾きこと鳥獸の如し。燕麥を以て此馬を飼ふを以て、馬肥えて力強し。況んや伯樂之を相し王良造父之を御し、秦缺樓季之が車右となるをや。乃ち千鎰の金を賭けて千里の道を馳逐す。此れ亦天下の至駿なり。太子之に乘らんことを願ふかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。（以上第四章）

客曰く、既に（七五）景夷の臺に登り、南のかた（七六）荊山を望み、北のかた（七七）汝海を望み、江を左にし湖を右にす。其樂有ることなし。是に於て博辯の士をして山川を原ね本け、草木を極め命け、物を比し事を屬し、辭を離ち類を連ねしめ、浮游覽觀し乃ち下りて（七八）虞懷の宮に置酒す。連廊四に注り臺城層ね構へ、（七九）紛紜たる玄綠、輦道邪に交り（八〇）黃池紆曲し、（八一）涸章白鷺、孔鳥鸛鵲、鵁雛鵁鶄、（八二）翠鬣紫纓、（八三）螭龍德牧、（八四）邕邕として羣鳴し、陽魚騰躍し、翼を奮ひ鱗を振ひ、（八五）淑滲たる蓴蔘、蔓草（八六）芳苓あり。（八七）女桑河柳、素葉紫莖あり。（八八）苗松豫章條上りて天に造り、梧桐（八九）幷閭極め望むに林を成せり。衆芳芬鬱として五

【七五】景夷。臺の名。
【七六】荊山。山の名
【七七】汝海。汝は川の名。
【七八】虞懷。宮の名。
【七九】紛紜。盛なる貌。玄綠は黑色綠色なり。
【八〇】黃池。黃は湟に作るべし城池なり。
【八一】涸章。以下皆鳥の名。
【八二】翠鬣。綠の首毛。紫纓は紫の頸毛。
【八三】螭龍德牧。鳥の形なり。
【八四】邕邕。和鳴の貌。
【八五】淑滲。草の水中に在る貌。蓴蔘は水草の名。
【八六】芳苓。苓は蓮の古字。
【八七】女桑河柳。木の名。素葉は白き葉。
【八八】苗松。苗山の松。豫章は木の名。

風より亂れ、從容（九〇）猗靡として（九一）消息陽陰す。列坐縱酒して樂を蕩し心を娛ましめ、（九二）景春酒を佐け（九三）杜連音を理し、滋味雜陳して肴（九四）糅錯して該り、練色目を娛ましめ流聲耳を悅ばす。是に於て乃ち（九五）激楚の結風を發し、鄭衞の（九六）皓樂を揚げ、（九七）先施、徵舒、陽文、段干、吳娃、閭姬、傅予の徒をして、裾を雜へ髾を垂れ、目窕み心與へ、流波を揄き（九八）杜若を雜へ、清塵を蒙り（九九）蘭澤を被り、（一〇〇）嬿服して御せしむ。此れ亦天下の（一〇一）靡麗皓侈廣博の樂なり。太子能く彊め起きて游ばんかと。太子曰く、僕病んで未だ能はざるなりと。

【大意】　客曰く景夷の臺に登りて山川を望めば、其樂天下復た比すべきものなし。乃ち博學辯辭の士をして山川を陳說し、草木を命名し、文辭を作らしめ、乃ち下りて虞懷宮に宴す。此宮たる連廊四方に通じ、臺城高く構へ、黑綠の色相交り、池には羣鳥和鳴し游魚鱗を振ひ、其側には草木林を成し、芳氣風に漂ふ。列坐して酒を縱にすれば佳肴席に滿ち美樂耳を悅ばし、美女其間を

【九〇】猗靡。風に隨ふ貌。
【九一】消息陽陰。陰と陽と共に生ず。
【九二】景春。人名なり。
【九三】杜連。人名なり。
【九四】糅錯。相交ること。
【九五】激楚。激越なり。結風は急風。
【九六】皓樂。善倡なり。
【九七】先施。以下皆人の名。
【九八】杜若。香草の名。
【九九】蘭澤。蘭香を以て煉りし膏。
【一〇〇】嬿服。美服なり。御は侍なり。
【一〇一】靡麗。美麗なり。

周旋し、目挑み心許し、目光流波の如く、衣香杜若の如し。此れ亦天下の至樂なり。太子之を樂まんことを欲するかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。（以上第五章）

客曰く將た太子の爲に〔一〇三〕騏驥の馬を馴し〔一〇四〕飛軒の輿に駕し、牡駿の乘に乘り、〔一〇五〕夏服の勁箭を右に〔一〇六〕烏號の雕弓を左にし、〔一〇七〕雲林に游渉し蘭澤に周馳し、〔一〇八〕節を江潯に羽め、青蘋に掩はれ清風に游び、陽氣を陶べ春心を蕩し、狡獸を逐ひ輕禽を集め、是に於て犬馬の才を極め、野獸の足を困め、〔一〇九〕相御の智巧を窮め、虎豹を恐し〔一一〇〕鷙鳥を慴らし、逐馬鑣を鳴らし、魚に跨り麋を角とり、麛兎を履游し麚鹿を蹈踐し、汗流れ沫墜ち、〔一一〇〕宛伏陵窘し、創なくして死する者、固に〔一一一〕後乘に充つるに足る。此れ〔一一二〕校獵の至壯なり。太子能く彊め起きて游ばんかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。〔一一三〕陽氣眉宇の間に見え、〔一一四〕侵淫して上り、幾んど〔一一五〕大宅に滿てり。

【大意】客曰く、又太子の爲に駿馬を以て輕車に駕し、弓箭を執りて山澤に馳驅し、鳥獸

〔一〇二〕騏驥。駿馬なり。
〔一〇三〕飛軒。輕輿なり。
〔一〇四〕夏服。箭の名。
〔一〇五〕烏號。弓の名。
〔一〇六〕雲林・雲夢の林。
〔一〇七〕節を弭む・徐行すること。江潯は江畔なり。
〔一〇八〕相御。馬を相する者、馬を御する者。
〔一〇九〕鷙鳥。猛鳥なり。
〔一一〇〕宛伏。屈伏なり。陵窘は侵迫なり。
〔一一一〕後乘。後車なり。
〔一一二〕校獵。狩獵なり。
〔一一三〕陽氣。喜色なり。
〔一一四〕侵淫。漸進なり。
〔一一五〕大宅。面をいふ。

んか。麛兎麚鹿皆汗流れ沫落ち創を被らずして死する者車に滿たん。此れ狩獵の樂なり。太子之を樂まんことを欲するかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。

客太子の悅色あるを見るや、遂に推して之を進めて曰く、〔一一六〕冥火天に薄り兵車雷のごとく運り、旌旗〔一一七〕偃蹇、〔一一八〕羽旄肅紛として、馳騁角逐して味を慕ひ先を爭ひ、〔一一九〕徼墨廣博にして之を觀望するに斮あり。純粹の全犧は之を公門に獻ぜんと。太子曰く善し、願くは復た之を聞かんと。客曰く未だ既さず。是に於て〔一二〇〕榛林深澤、煙雲〔一二一〕闇莫として兕虎竝び作り、毅武〔一二二〕孔猛袒裼自づから薄り白刃〔一二三〕磑磑として矛戟交錯し、獲を收め功を掌りて金帛を賞賜し、嬪に掩はれ〔一二四〕若を肆ねて牧人の席となし、旨酒嘉肴、羞烝嗜炙以て賓客に御む。涌觸竝び起り心を動かし耳を驚かし、誠あり必ず悔いず、決絕して以て諾す。貞信の色金石に形れ、高歌陳唱萬歲歎ふなし。此れ眞に太子の喜ぶ所なり。能く彊め起きて游ばんかと。太子曰く僕甚だ從はんことを願ふ。直恐らくは諸大夫の累とならんのみと。然れども起きんとする色あり。

〔一一六〕冥火。遠火なり。
〔一一七〕偃蹇。高き貌。
〔一一八〕羽旄。指揮旗なり。
〔一一九〕徼墨。燒田なり。
〔一二〇〕榛林。叢林なり。
〔一二一〕闇莫。不明の貌。
〔一二二〕孔猛。甚しき猛者。袒裼はハダヌキになること。
〔一二三〕磑磑。一本に皚皚に作る白き貌。
〔一二四〕若。杜若なり、香草の名。
羞烝嗜炙。種種の料理。

【大意】客太子の喜色あるを見て、更に語を進めて曰く、既にして遠火天に迫り兵車雷の如く運り、旌旗を飜し羽旄を振ひ、馳驅して先を爭ひ、燒田廣大にして限界あり。獸を獲て色純に體全きものあれば、之を君侯に獻ぜんと。太子乃ち喜びて尙ほ之が詳を聞かんことを願ふ。客更に語を進めて曰く、是に於て叢林雲煙の間に兕虎躍り出づるや、勇者袒裼して之に迫り、白刃を揮ひて之を斃す。乃ち獲を計りて功を賞し、靑蘋杜若の草を陳ねて牧人の席となし、美酒佳肴を供して賓客に進む。歌唱盛に起りて心を動かし耳を驚かし、忠誠之を爲して悔ゆるなく、一諾して再三するを俟たず。貞信の色金石(樂器)に形れ、萬歲を經るも尙厭はざるなり。其樂かくの如し。太子共に游獵せんことを欲するかと。太子曰く僕固より從遊せんことを願ふ。ただ我が病他人の累とならんことを慮るのみと。然れども病を彊めて起たんと欲するものの如し。(以上第六章)

客曰く將た八月の(一二六)望を以て、諸侯遠方の交游兄弟と竝に往きて濤を(一二七)廣陵の曲江に觀る。至れば則ち未だ濤の形を見ず、徒水力の到る處を觀るのみ。則ち(一二八)卹然として以て駭くに足れり。其の(一二九)駕軼する所の者、擢拔する所の者、(一三〇)揚汨する所の者、(一三一)溫汾する所の者、(一三二)滌汔する所の者

【一二六】望。十五日をいふ。
【一二七】廣陵。漢書に「廣陵國は吳に屬す」とあり、疑ふらくは浙江を指す、浙江の潮は天下の壯觀なり。
【一二八】卹然。驚恐の貌。
【一二九】駕軼。凌突なり。
【一三〇】揚汨。汨は亂なり。
【一三一】溫汾。回轉なり。
【一三二】滌汔。洗蕩なり。

を觀れば、心に略り辭に給するありと雖も、固に未だ其の由りて然る所を(一三三)縷形する能はず。(一三四)怳たり忽たり聊たり慄たり。混れて汨汨たり。(一三五)忽たり慌たり俶たり儻たり。浩として瀇瀁たり。慌として曠曠たり。意を南山に秉り望を東海に通じ、蒼天に(一三六)虹洞として慮を崖涘に極め、(一三七)流攬して窮なく神を(一三八)日母に歸す。(一三九)汩として流に乘じて下降し、或は其の止る所を知らず。或は(一四〇)紛紜として其流折れ、忽ち(一四一)繆往して來らず。(一四二)朱汜に臨んで遠く逝き、中虛しく煩ひて益〻怠り、離散するなくして(一四三)曙に發し、內心を存して自ら持す。是に於て胸中を(一四四)澡槩し(一四五)五藏を灑練し、手足を(一四六)澹漱し、髮齒を(一四七)頮濯し、恬怠を揄弃し、(一四八)淟濁を輸寫し、狐疑を分決し、耳目を(一四九)發皇す。是の時に當りては、(一五〇)淹病滯疾ありと雖も、猶ほ將に傴を伸べ躄を起し、瞽を發き聾を披いて之を觀望せんとす。況んや直に(一五一)眇小煩懣、醲に酲し酒に病むの徒をや。故に曰く蒙を發き惑を解くは、以て言

【一三三】縷形。詳細に形容すること。
【一三四】怳忽聊慓。驚狂戰懼の貌。
【一三五】忽慌・俶儻、瀇瀁・曠曠。幽深卓異廣大含虛にして平に行く貌。
【一三六】虹洞。相連る貌。
【一三七】流攬。周流すること。
【一三八】日母。日の出づる所。
【一三九】汩。疾き貌。
【一四〇】紛紜。混亂すること。
【一四一】繆往。錯行なり。
【一四二】朱汜。地名なり。
【一四三】曙に發す。曉に至るなり。
【一四四】澡槩。洗滌なり。
【一四五】五藏。五臟なり。
【一四六】澹漱。洗滌なり。
【一四七】頮濯。洗滌なり。
【一四八】淟濁。垢穢なり。輸寫は除くこと。
【一四九】發皇。發明なり。
【一五〇】淹病滯疾。久病なり。
【一五一】眇小煩懣。少しの煩悶。

ふに足らざるなりと。太子曰く善し。然らば則ち濤は何の氣ぞやと。

【大意】客曰く、中秋明月の夜、交游兄弟相伴ひて浙江の潮を觀んか、始め未だ濤の形を見ず、ただ水力の到るを見るも、尚ほ驚恐するに足る。後その拂亂突起回轉するに至りては、心計に長じ文辭に巧なる者と雖も、一一其形を名狀すべからず。其の勢幽深卓異廣大含虛にして、濤の意を秉ること將に南山を凌いで東海と相望まんとし、天と連りて崖涘を極めんとするが如し。周流して窮らず。日の出づる所に至り、或は降り下りて止る所を知らず。或は曲折錯繆して返らず。觀る者をして中心虛煩して疲怠を增し、離散する能はずして天明に至らしむ。是に於て憂悶を一掃し耳目を一洗するを得、久病の人と雖も、傴れるを伸べ躄へるを起し、盲せるを開き聾せるを披いて之を望觀せんと欲す。況んや酒に中れるが如き者をや。其の精神を爽快ならしむること言ふべからずと。太子曰く甚だ善し。抑〻濤とは何の氣ぞやと。

客曰く記せざる也。然れども師に聞けり。曰く神に似て非なる者三、疾雷のごとく百里に聞え、江水逆流して海水潮を上げ、山のごとく雲を(一五二)出内して日夜止まず。(一五三)衍溢漂疾して波涌いて濤起る。其の始め起るや(一五四)洪淋淋焉として白鷺の下り翔るが若く、其の少しく進むや(一五五)浩浩溰溰として素車白馬

【一五二】出内。出納に同じ。
【一五三】衍溢。あふるること。漂疾は急に流るること。
【一五四】洪淋淋焉。波の聲。
【一五五】浩浩。深廣の貌。溰溰は高白の貌。

帷蓋の張れるが如く、其の波涌いて雲のごとく亂るるや、(一五六)擾擾焉として三軍の騰裝するが如く、其の旁作りて奔起するや、飄飄焉として輕車の(一五七)兵を勒し蛟龍を(一五八)六駕し(一五九)太白を附從するが如く、純ら(一六〇)浩蜺を馳せ前後駱驛たり。(一六一)顒顒卬卬、(一六二)椐椐彊彊、(一六三)莘莘將將として、壁壘重堅、沓雜して軍行に似たり。(一六四)訇隱匈礚、(一六五)軋盤涌裔して原ぬるに當るべからず。其の兩傍を觀れば則ち(一六六)滂渤怫鬱、(一六七)闇漠感突として上擊(一六八)下律し、勇壯の卒に似たるあり。突怒して畏るるなく、壁を蹈み津を衝き、曲を窮め隈に隨ひ、岸を踰え(一六九)追を出で、遇ふ者は死し當る者は壞る。初め(一七〇)或圍の津涯を發し、(一七一)荄のごとく軫り谷のごとく分れ、(一七二)青篾を廻翔し、枚を(一七三)檀桓に銜み、(一七四)節を伍子の山に弭め、(一七五)厲を骨母の場に通じ、(一七六)赤岸を凌ぎ扶桑を篲ひ、橫に奔りて雷の行くに似たり。誠に厥武を奮ひ、振ふが如く怒るが如く、(一七七)沌沌渾渾として狀奔馬の如く、(一七八)混混庉庉として聲雷鼓の如く、怒

【一五六】擾擾焉。亂るる貌。
【一五七】兵を勒し。兵を習ふなり。
【一五八】六駕。六龍を駕するなり。
【一五九】太白。河伯なり。
【一六〇】浩蜺。虹なり。
【一六一】顒顒卬卬。波の高き貌。
【一六二】椐椐彊彊。相隨ふ貌。
【一六三】莘莘將將。相激する貌。
【一六四】訇隱匈礚。大聲なり。
【一六五】軋盤涌裔。沸騰なり。
【一六六】滂渤怫鬱。怒激する貌。
【一六七】闇漠感突。衝起する貌。感は惑の誤。
【一六八】下律。律は硉に作るべし轉下すること。
【一六九】追。堆なり。
【一七〇】或圍。津の名。
【一七一】荄。隴なり。
【一七二】青篾。地名。
【一七三】檀桓。地名。
【一七四】節を弭む。徐行すること。伍子の山とは伍子胥を葬りし山卽ち胥山。
【一七五】厲を通ず。高處に上るこ

を發して（一七）座沓し、清く升りて（一八〇）蹶跋し、（一八一）侯波奮振して藉藉の口に合戰す。鳥も飛ぶに及ばず、魚も廻るに及ばず、獸も走るに及ばず。（一八二）紛紛翼翼として波のごとく涌き雲のごとく亂れ、南山を蕩取し、北岸を背擊し、丘陵を覆虧し、西畔を平夷し、（一八三）險險戲戲として陂池を崩壞し、勝を決して乃ち罷む。（一八四）瀺汩潺湲として披揚流灑し、橫暴の極、魚鼈勢を失ひ巔倒偃側し、（一八五）沈沈湲湲として（一八六）蒲伏連延し、神物の怪疑勝げて言ふべらず。（一八七）踣焉として（一八八）洞闇悽愴せしむ。此れ天下の怪異詭觀なり。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。

【大意】客曰く、吾よく之を知らず。然れども嘗て師に聞けるに、曰く、濤勢神に似て非なる者三あり。聲疾雷の如く千里に聞ゆるは一なり。江水逆流し海水潮を上ぐるは二なり。山の如く雲を出納し、日夜止まざるは三なり。其の始めて起るや、其形白鷺の翔るが如く、其の少しく進むや、素車白馬の帷を張りて走るが如く、其の涌き且つ亂るるや、三軍の奔騰するが如く、其の橫出するや、

【一七】座沓。碌と。骨母は一に骨母に作る。吳に骨母山あり。
【一八〇】蹶跋。超踰なり。
【一八一】侯波。大波なり。藉藉は地名。
【一八二】赤岸。地名。
【一八三】紛紛翼翼。交錯する貌。
【一八四】險險戲戲。危き貌。
【一八五】瀺汩。鼓動する貌。瀺湲は流るる貌。
【一八六】蒲伏。匍匐なり。
【一八七】踣焉。たふるる貌。
【一八八】洞闇。深くして明ならざる貌。
【一七七】沌沌。混混庞庞。波浪の聲なり。
【一七八】混混庞庞。
【一七九】座沓。磎止して合ふこと。

輕車に六龍を駕し、太白を從へて馳するが如く、其の形勢を原ぬるに、盛にして當るべからず。其の兩邊を觀れば、激怒衝起して勇壯の卒の如く、遇ふ者は皆死し、當る者は皆壞る。初めは或圍の津涯より起り、靑篾、檀桓を過ぎ、胥山と骨母山とを過ぎ、赤岸、扶桑を經て、奔勢雷の行くが如く、憤を發して馳騰すること奔馬の如く、其の急激なること、鳥も飛ぶに及ばず、獸も走るに及ばず、南北西の三面に折れ、衝激する所の者勝を決せざるはなし。其の怪奇なること、一一名狀すべからず。太子之を觀んことを欲するかと。太子曰く僕病んで未だ能はざるなりと。（以上第七章）

客曰く、將た太子の爲に方術の士の（一八九）資略ある者、莊周、魏牟、楊朱、墨翟、便蜎、詹何の倫の若きを奏めん。之をして天下の精微を論じ、萬物の是非を理め、孔老をして覽觀し、孟子をして之を籌らしめば、萬に一を失はじ。此れ亦天下の要言妙道なり。太子豈之を聞かんことを欲するかと。是に於て太子几に據りて起きて曰く、（一九〇）渙乎として一に聖人辯士の言を聽くが若く、（一九一）涊然として汗出で、（一九二）霍然として病已えぬと。

【大意】客曰く、又太子の爲に才智の士を進め、之をして天下萬物の精理を論ぜしめ、孔老孟子をして之を度らしめん。此れ天下の要言妙道にして萬に一失なし。太子之を聞かんことを願ふかと。

【一八九】資略。才智なり。
【一九〇】渙乎。明なる貌。
【一九一】涊然。汗出づる貌。
【一九二】霍然。忽然といふが如し。

太子乃ち起きて曰く、聖人辯士の言を聽けるが如く、我が病忽ち癒えぬと。（以上第八章）

(二)七啓八首

曹子建

昔枚乘は七發を作り、傅毅は七激を作り、張衡は七辯を作り、崔駰は七依を作る。辭各美麗なり。余之を慕ふあり。遂に七啓を作り、幷せて王粲に命じて作らしむ。

玄微子〔一〕大荒の庭に隱居し、〔二〕飛遯して俗を離れ、神を澄まし靈を定め、祿を輕んじ貴に憊り、物と營むなく、虛に恥り靜を好み、此の永生を羨み、獨り思を天雲の際に馳せ、物象の能く傾くるなし。是に於て〔四〕鏡機子聞いて將に往いて說んとし、〔五〕超野の駟に駕し追風の輿に乘り、〔六〕迴漠を經幽墟を出で、〔七〕泱漭の野に入り、遂に玄微子の居る所に屆る。其居や激水を左にし、〔八〕高岑を右にし、洞溪に背き芳林に對す。皮弁を冠り文裘を被り、山岫の〔九〕潛穴を出で、峻崖に倚りて嬉遊し、志〔一〇〕飄飄焉たり〔一一〕嶢嶢焉たり。六合を狹しとして九州を隘とするが若きに似たり。將に飛ばんとして未だ逝かざるが若く、翼を擧て中ごろ留るが若し。是に於て鏡機子葛藟を攀ぢて登り、巖に距りて立ち、風に順ひて稱

〔一〕七啓。啓は發なり。
〔二〕大荒。日月の入る所の地。
〔三〕飛遯。遯世なり。
〔四〕鏡機子。鏡は照、機は微、假設の人名。
〔五〕超野、追風。疾きを言ふ。
〔六〕迴漠、幽墟。皆遠方の地。
〔七〕泱漭。廣大なり。
〔八〕高岑。高峯なり。
〔九〕潛穴。深穴なり。
〔一〇〕飄飄焉。遠き貌。
〔一一〕嶢嶢焉。高き貌。

して曰く、予聞く君子は俗を遯れて名を遺てず、智士は世を背いて勳を滅せずと。今〔一二〕吾子道藝の華を弃て、仁義の英を遺て、精神を〔一三〕虛廓に耗し、人事の〔一四〕紀經を廢す。譬へば形を無象に畫き、響を無聲に造すが若し。未だ之を思はざるか。何ぞ規る所の通せざると。玄微子俯して之に應へて曰く、嘻この言あるか。夫れ太極の初、渾沌未だ分れず。萬物紛錯して道と俱に隆なり。蓋し形あれば必ず朽ち、跡あれば必ず窮る。〔一五〕芒芒たる元氣誰か其終を知らん。名は我身を穢し、位は我躬を累はす。竊に古人の志す所を慕ひ、老莊の遺風を仰ぎ、〔一六〕靈龜を假りて以て喩を託し、寧ろ尾を塗中に掉さんと。鏡機子曰く、夫れ辯言の豔なる、能く〔一七〕窮澤をして流を生じ、枯木をして榮を發かしむ。庶はくは靈を感じて神を激せしめん。況んや近く人情に在るをや。僕將に吾子の爲に游觀の至娛を說き、聲色の〔一八〕妖靡を演じ、變化の至妙を論じ、道德の弘麗を敷べんとす。之を聞かんことを願ふかと。玄微子曰く吾子身を整へ世に倦み、隱を探り沈を拯はんとし、〔一九〕遐路を遠し

〔一二〕吾子。玄微子を指して言ふ。
〔一三〕虛廓。空虛なり。
〔一四〕紀經。常理なり。
〔一五〕芒芒。廣大の貌。元氣は太極。
〔一六〕靈龜。莊子に「楚王大夫をして、往きて莊子を聘せしむ、莊子曰く吾聞く楚に神龜あり、死して已に三千歲、王之を廟堂の上に藏すと、此龜や寧ろ死して骨を留めて貴ばるるをなさんか、寧ろ生きて尾を塗中に曳かんかと、大夫曰く寧ろ生きて尾を塗中に曳かんかと、莊子曰く往け吾將に尾を塗中に曳かんとすと」とあり。塗は泥なり。
〔一七〕窮澤。涸澤なり。
〔一八〕妖靡。美妙なり。
〔一九〕遐路。遠路なり。

とせず、幸に光臨せらる。將に敬んで耳を滌ぎ以て玉音を聽かんとすと。

【大意】　玄微子世に背き俗を離れ、祿爵を貴ばず、物慾を棄て、靜虛の道を樂み、長生の術を脩む。鏡機子之を說破せんとし、玄微子の居に至る。玄微子皮弁を冠り文裘を著て、巖穴の間に逍遙す。其志高遠にして、六合を狹しとするが如く、中空に飄飄たるが如し。鏡機子順風に依りて屢言して曰く、君子は俗を遯れて名を遺てず、智士は世に背いて勳を滅せずと聞けり。今足下道德仁義の英華を棄て、虛無の道に精を耗し、人間の常理を廢す。是れ譬へば形なきに像を畫き、聲なきに響を成さんとするが如しと。玄微子俯して答へて曰く、ああ其れ然るか。夫れ太極の初め、渾沌として元氣未だ分れず、萬物未だ形を成さず。この時道と俱に隆なり。一たび分れて形を成し跡を生ずるに至れば、則ち朽ち則ち盡く。ただ其れ分れず、故に元氣は無始にして無終なるを得。世の名位は我身を穢すに足るのみ。吾が願ふ所にあらず。吾は老莊の遺風を慕ひ、泥中の龜と共に生を全うせんのみと。鏡機子曰く、吾れ足下に豔言を呈し、足下の神靈を感發し、游觀の娛、聲色の美、道德の大を說かんとす。足下之を聞かんことを願ふかと。玄微子曰く、足下我が沈隱を救はんとし、遠路を厭はずして來る。吾謹んで其言を聽かんと。（以上第一章）

【一〇】芳菰精粺。菰粺は草の名、其實細米の如し、以て飯となす。

の素膚、〔一二〕肥豢の膿肌、蟬翼の割、纖を剖き微を析ち、累ること穀を疊むが如く、離るること雪を散ずるが若く、輕くして風に隨ひて飛び、刃轉切せず。〔一四〕山鷄斥鷃、〔一五〕珠翠の珍、〔一六〕芳苓の巢龜を寒にし、西海の飛鱗を膾にし、江東の潛黿を曜にし、漢南の鳴鶉を臛にし、糅ふるに芳酸を以てし、甘和既に醇し。〔一七〕玄冥鹹を適へ〔一八〕辱收辛を調へ、紫蘭丹椒、施和必ず節あり。滋味既に殊に、遺芳〔一九〕射越す。乃ち春清の〔二〇〕縹酒あり、〔二一〕康狄の甘む所、化に應じて則ち變じ、氣に感じて成る。〔二二〕徵を彈ずれば則ち苦發し、〔二三〕宮を叩けば則ち甘生す。是に於て盛るに翠樽を以てし、酌むに彫觴を以てし、〔二四〕浮蟻鼎沸し、酷烈馨香あり。以て神を和ぐべく、以て腸を娛ましむべし。此れ肴饌の妙なり。子能く我に從つて之を食はんかと。玄微子曰く、予は〔二五〕藜藿を甘しとす。未だ此食に暇あらざるなりと。

【一二】霜蓄露葵。蓄葵は菜の名、共に霜露の時に宜し。

【一三】玄熊は黒熊。素膚は白き肉。

【一四】肥豢。大家か豢といふ。膿肌は肥肉なり。

【一五】山鷄。斥鷃。鳥の名。

【一六】珠翠。貝の柱肉。

【一七】芳苓。苓は蓮と同じ、史記に「神龜あり江南嘉林の中に在り、常に芳蓮の上に巢ふ」とあり。寒は脛肉なり。

【一八】玄冥。北方の神、北は水にして鹹なり。

【一九】辱收。西方の神、西は金にして辛なり。

【二〇】射越。遠く及ぶこと。

【二一】縹酒。綠酒なり。

【二二】康狄。杜康及び儀狄、古の酒を釀せし人。

【二三】徵。五聲の一、月令に「孟夏の月其音は徵、其味は苦」とあり。

【二四】宮。五聲の一、月令に「中央の土、其音は宮、其味は甘」とあり。

【二五】浮蟻。酒滓の浮び上るもの。鼎沸は鼎の沸くが如きなり。

【二六】藜藿。賤菜なり。

【大意】　鏡機子曰く、菰粺の飯に美菜あり、更に熊豕の肥肉を添へ、之を割切すること細薄なり。又鳥肉珠肉の珍あり。此他各地の珍禽奇獸の肉あり。辛醎其味を調へ、香氣遠く及ぶ。乃ち春酒を酌み樂を奏すれば、以て精神を娯ましむるに足る。此れ酒食の最も美なるものなり。足下よく我と共に之を食はんことを欲するかと。玄微子曰く、予は藜藿を以て甘しとす。未だ此の美食を求めざるなりと。（以上第二章）

鏡機子曰く、〔三六〕歩光の劍、〔三七〕華藻の繁縷、飾るに　〔三八〕文犀を以てし、彫るに翠綠を以てし、綴るに〔三九〕矚龍の珠を以てし、陸に犀象を斷つも、未だ〔四〇〕荆山の玉を以てするに足らず。波に隨ひて鴻を截るも、水刃を漸さず。〔四一〕九旒の冕耀を散じ文を垂れ、〔四二〕華組の纓風に從つて紛紜たり。佩は則ち〔四三〕結綠懸黎、寶の妙微なり。〔四四〕符采照爛し景を流し煇を揚ぐ。〔四五〕黼黻の服、紗穀の裳、金華の屨、趾を動かし光を遺し、繁飾參差として微鮮霜の若し。〔四六〕緄佩綢繆して或は彫り或は錯り、

【三六】歩光。越王の劍の名。
【三七】華藻。劍上の文飾。繁縷は彩色なり。
【三八】文犀。犀角の文章あるもの。
【三九】矚龍。莊子に「千金の珠は九重の淵、驪龍の頷下に在り」とあり。
【四〇】荆山。楚山なり。
【四一】儁。鋭利なり。
【四二】九旒。冕の旒の九本あるもの。公侯の冠するもの。
【四三】華組。美しき綬。纓は冠の紐。
【四四】結綠、懸黎。戰國策に「梁に懸黎あり宋に結綠あり、天下の名器たり」とあり。
【四五】符采。玉の横文なり。
【四六】黼黻。文章ある衣服。
【四七】緄佩。緄は綬帶なり。綢繆は交連なり。
【四八】幽若。若は香草なり。
【四九】雍容。美好の貌。

薫ずるに〔四八〕幽若を以てし、流芳肆り布き、〔四九〕雍容閑步し周旋して燿を馳す。〔五〇〕南威之が爲に顏を解き、〔五一〕西施之が爲に巧笑す。此れ容飾の妙なり。子能く我に從つて之を服せんかと。玄微子曰く、予〔五二〕毛褐を好む。未だ此服に暇あらざるなりと。

【大意】　歩光の名劍あり、之を飾るに珠玉文犀を以てす。その利、陸には犀象を斷ち、水には鴻鴈を截る。今この劍を帶し九旒の冕を戴き、華組の紐を垂れ、結綠、懸黎の寶器を珮とし、身に文彩爛然たる衣裳を纏ひ、足に金華の履を穿てば、微妙鮮明なること、霜の潔白なるが如し。南威、西施の美姫も之が爲に微笑を含む。此れ服飾の至美なり。足下我と之を服せんことを願ふかと。玄微子曰く、予は毛布を服するを好む。華美の裝は、予の求むる所にあらざるなりと。（以上第三章）

鏡機子曰く、馳騁は用て思を〔五三〕蕩するに足り、〔五四〕雲龍の飛驅に駕し、〔五五〕玉幹の繁纓を飾り、〔五六〕宛虹の長綏を垂れ、〔五七〕招搖の華旌を抗げ、游獵は以て情を娯ましむべし。僕將た吾子の爲に

【五〇】南威。晉の文公の時の美人。
【五一】西施。吳王夫差の美人。
【五二】毛褐。毛布なり。
【五三】蕩。散なり。
【五四】雲龍。駿馬なり。
【五五】玉幹。玉を以て飾りし車。
【五六】繁纓。繁纓は馬の飾。

(六八)忘歸の矢を捷み、(六九)繁弱の弓を乘り、忽として(七〇)景を躡んで輕く騖せ、奔驥を逸ぎて(七一)遺風を超えん。是に於て磎塡まり谷塞がり、(七二)榛藪平夷なり。山に緣りて罝を置き、野に彌りて眾を張り、下に(七三)滿跡なく上に逸飛なく、鳥集り獸屯り、然る後に會圍す。(七四)獫徒雲のごとく布き、武騎霧のごとく散じ、(七五)丹旗野を曜し、(七六)戈殳皓旰たり。文狐を曳き狡兎を掩り、(七七)鸛鵝を捎ち(七八)振鷺を拂ち、(七九)軌に當りて藉かれ、足に値ひて踐まれ、(八〇)飛軒電のごとく逝き、獸輪に隨つて轉り。翼張るに暇あらず、足騰るに及ばず。動けば(八一)飛鋒に觸れ、擧れば(八二)輕轡に挂る。林を捜り險を索め、(八三)薄を探り阻を窮め、山に騰り壑に赴き、風のごとく厲しく猋のごとく擧る。(八四)機は虛しく發せず、中れば必ず羽を飮む。是に於て人稠く網密く、地逼り勢窮り、(八五)哮闞の獸、牙を張り鬣を奮ひ、志觸突に在り、猛氣慴れず。乃ち(八六)北宮東郭の嚻をして、生きながら豹尾を抽き、(八七)猲肩を分裂せしむ。形手に抗せず骨拳を隱かず。熊を批ちて掌を碎き、虎を拉りて斑を摧き、野に毛類なく林に羽羣なく、積獸陵の如く、(八八)飛翮雲を成す。是に於て鍾を驩らし鼓を鳴らし、旌を收め旆を弛げ、網を頓て綱を縱め、獠を罷めて廻り邁く。(八九)駿騄齊しく驤り、鑾を揚げ沫を飛ばし、俯して(九〇)金較に倚り、仰いで(九一)翠蓋に撫ひ、(九二)雍容暇豫して、志を方外に娛ましむ。此れ羽獵の妙なり。子能く我に從つて之を觀んかと。玄微子曰く、余(九三)恬靜を樂む。未だ此觀に暇あらざるなりと。

【大意】鏡機子曰く、馳逐遊獵は亦以て鬱を散じ情を樂ましむるに足る。僕足下の爲に駿馬を輕車に駕し、長旗を其上に建て、弓矢を挾みて奔馳せんか。先づ網を廣野に張り、鳥獸の屯集するを見て、乃ち之を包圍す。獵卒雲の如く聚り、赤旗日に輝き、白刃天に閃く。鳥獸車馬に觸れて忽ち斃れ、鳥飛ぶに遑なく、獸走るに暇なく、飛べば箭に當り、躍れば網に罹る。更に險阻を搜り叢野を索め、發すれば必ず中り、中れば必ず矢を飮んで羽に至る。猛獸怒りて牙を張れば、勇士躍りて之を捉へ、捕獲する所積んで山を成す。乃ち鐘鼓を擊ちて、旗を收め網を解き、獵を罷めて歸る。

【五六】宛虹。曲れる虹。長綏は旗なり。
【五七】招搖。星の名。華旃は美旗。
【五八】忘歸。矢の名。
【九】繁弱。弓の名。
【六〇】景。日景なり。
【六一】遺風。馬の名。
【六二】榛藪。叢澤なり。
【六三】滿跡。滿一に漏に作る。
【六四】獫徒。獵卒なり。
【六五】丹旗。赤旗なり。
【六六】戈殳。武器の名。皓旰は白き貌。
【六七】鸛鵝。鳥の名。
【六八】振鷺。鳥の名。
【六九】軌。車轍なり。
【七〇】飛軒。輕車なり。
【七一】飛鋒。箭なり。
【七二】輕轡。網なり。
【七三】薄。草の叢生する處。
【七四】機。弩牙なり。
【七五】哮闞。怒ること。
【七六】北宮。古の勇者北宮黝。東郭は呂氏春秋に「齊に勇を好む者あり一人は東郭に居り一人は西郭に居る」とあり。
【七七】猲肩。猲は猛獸の名。
【七八】飛翮。鳥なり。
【七九】駿騄。良馬なり。
【八〇】金較。金を以て飾りし車の橫木。
【八一】翠蓋。翡翠の羽を以て飾りし車蓋。
【八二】雍容暇豫。安樂なり。
【八三】恬靜。閑靜なり。

此時に當り、車に乘りて之を觀れば、其樂言ふべからず。足下我に從つて之を觀んことを願ふかと。玄微子曰く、予は閑靜を以て樂となす。未だ之を觀るを欲せざるなりと。（以上第四章）

鏡機子曰く、閑宮（四）顯敞に、雲屋（五）皓旰なり。（六）景山の高基を崇くし、清風を迎へて（七）觀を立て、（八）彤軒紫柱、（九）文榱華梁、（一〇）綺井菡を含み（一一）金墀玉箱あり。溫房には則ち冬（一二）絺綌を服し、清室には則ち中夏に霜を含み、華閣雲に緣り、（一三）飛陛虛を陵ぎ、頫して流星を眺め、仰いで（一四）八隅を觀る。升龍攀づれども逮ばず、天際に眇にして高く居り、繁巧神怪、名を變じ形を異にし、（一五）班輸も其斧斤を措く所なく、（一六）離婁も之が爲に睛を失ふ。麗草交植し（一七）殊品詭類、綠葉（一八）朱榮、天を熙し日に曜き、（一九）素水沼に盈ち、叢木林を成し、飛翮高きを陵ぎ、鱗甲深きに隱る。是に於て逍遙暇豫し、忽として歸るを忘るるが若し。乃ち（二〇）任子をして釣を垂れ、（二一）魏氏をして機を發せしむ。芳餌水に沈み、（二二）輕繳飛ぶを弋、翳雲の翔鳥を落し、九淵の靈龜を援く。然る後

【四】顯敞。高顯なり。
【五】皓旰。明なる貌。
【六】景山。大山なり。
【七】觀。樓閣なり。
【八】彤軒。赤欄なり。
【九】文榱。文飾を加へし椽。
【一〇】綺井。屋間に於て井の形をなし、中に蓮花ありて下垂するなり。
【一一】金墀。金を地に塗るなり。玉箱は玉房。
【一二】絺綌。かたびら。
【一三】飛陛。高階なり。
【一四】八隅。八方なり。
【一五】班輸。公輸班なり、古の技巧者。斧斤はチノ。
【一六】離婁。古の明目者。
【一七】殊品詭類。珍奇の物。
【一八】朱榮。紅花なり。
【一九】素水。白水なり。
【二〇】任子。古の釣を善くする者。

菱華を采り水蘋を擢き、（二三）珠蜂を弄し（二四）鮫人を戲れしむ。（二五）漢廣の詠ずる所を諷し、游女を水濱に覿、神景を（二六）中沚に燿かし、輕穀の（二七）纖羅を被り、芳烈を遺して靖に步し、（二八）皓手を抗げて淸歌す。歌に曰く、雲際を望めば（二九）好仇あり。天路長くして往くに由なし。（三〇）蘭蕙を佩びて誰が爲にか脩らん。（三一）宴婉絕えて我が心愁ふと。此れ宮館の妙なり。子能く我に從つて之に居らんかと。玄微子曰く、予は巖穴を恥む。未だ此居に暇あらざるなりと。

【大意】鏡機子曰く、廣大なる樓閣を築き、文彩星を見、仰いで八方を望み、高く天際に聳えて飛龍も及ぶ能はず。周圍に麗草を交へ植ゑ、花葉天日に輝き、白水沼に湛へ、樹木林を成し、鳥魚其中に游樂す。乃ち釣を垂れ弋を發し、飛鳥を落し、魚鼈を捉へ、或は菱花を採り、蘋を擢き、人魚を戲れしめ、水濱に女神を觀れば、光を中渚に耀かして、羅穀を被り、素手を擧げて歌ふ。歌に曰く、遠く靈仙を望み、與に匹偶をなさんとするも、天路長くして致すに由なし。誰が爲にか自ら脩飾するをなさん。靈仙見るべからず。我をし

【一〇】魏氏。古の射を善くする者。
【一一】輕繳。いぐるみ。
【一二】珠蜂。はまぐり。
【一四】鮫人。人魚なり。
【一五】漢廣。詩經の篇の名。「漢に游女あり、求むべからず云云」とあり。游女は漢水の女神なり。
【一六】中沚。中渚なり。
【一七】纖羅。うすぎぬ。
【一八】皓手。白き手。
【一九】好仇。よき友。
【二〇】蘭蕙。香草の名。
【二一】宴婉。歡を結ぶべき人。

て心を憂へしむと。此れ宮館の樂なり。足下我と此に居らんことを願ふかと。玄微子曰く、予は巖穴に棲まんことを好む。宮館の美は、予の欲する所にあらずと。（以上第五章）

鏡機子曰く、既に中原に游觀し、閑宮に逍遙し、情放に志蕩け、淫樂未だ終らず、亦將に才人妙技あり、世を遺れ俗を越え、(一一二)北里の流聲を揚げ、(一一三)陽阿の妙曲を紹がんとす。爾して乃ち(一一四)文軒に御り、(一一五)洞庭に臨めば、琴瑟交〻揮ひ、(一一六)篪を左にし笙を右にし、鍾鼓倶に振ひ、簫管齊しく鳴る。然る後(一一七)姣人乃ち文縠の華袿を被り、輕綺の(一一八)飄颻たるを振ひ、(一一九)金搖の熠燿たるを戴き、(一二〇)翠羽の雙翹を揚げ、流芳を揮ひ飛文を燿かし、(一二一)盤鼓を歷煥として繽紛たり。長裾風に隨ひ悲歌雲に入り、(一二二)蹻捷飛ぶが若く、虛を蹈んで遠く蹠み、淩躍超驤、(一二三)蜿蟬として揮霍す。翔爾として鴻のごとく翥り、(一二四)濈然として鳧のごとく沒し、輕體を縱にして以て迅く赴き、景形を追ふも逮ばず。飛聲塵を激し、(一二五)依違して響を厲し、才の捷きこと神の若く、形象を

【一一二】北里。紂の音樂。
【一一三】陽阿。古曲の名。
【一一四】文軒。文飾を加へたる殿檻。
【一一五】洞庭。廣庭なり。
【一一六】篪。笛の類。
【一一七】姣人。美人なり。華袿は婦人の上服。
【一一八】飄颻。飛揚する貌。
【一一九】金搖。金釵なり。熠燿は光ること。
【一二〇】翠羽。翡翠の羽。翹は羽の名。
【一二一】盤鼓。曲の名。煥は明なる貌。繽紛は盛なる貌。
【一二二】蹻捷。輕敏なり。
【一二三】蜿蟬。盤屈なり。揮霍は舞ふこと。
【一二四】濈然。沈む貌。
【一二五】依違。徘徊といふが如し。

なし難し。是に於て歡をなすこと未だ渫きず、白日西に頽る。樂を散じ飾を變じ、中閨に(一二六)微步す。(一二七)玄眉弛んで鉛華落ち、亂髮を收めて(一二八)蘭澤を拂ひ、(一二九)媠服を形して幽若を揚ぐ。紅顏笑ふに宜しく、(一三〇)睇眄光を流す。時に吾子と手を攜へて行を同うし、(一三一)飛除を踐み閑房に卽けば、(一三二)華燭爛として幄幙張り、朱脣を動かし(一三三)清商を發し、羅袂を揚げ華裳を振ひ、(一三四)九秋の夕、歡をなして未だ央きず。此れ聲色の妙なり。子能く我に從つて之に游ばんかと。玄微子曰く、予は清虛を願ふ。未だ此游に暇あらざるなりと。

【大意】鏡機子曰く、既に中原を周遊し、歸りて閑室に入れば、情思和暢す。時に妙妓あり。亦北里、陽阿の美曲を奏す。乃ち欄に憑り廣庭に臨めば、琴瑟鐘鼓一齊に湧き、美人錦繡の衣を纏ひ、輕裾を飄し、金釵雙翹を戴き、舞ふこと飛ぶが如く、虛を蹈むが如く、鴻の擧るが如く、鳧の沒するが如く、輕捷なること神の如く、名狀すべからず。歡樂未だ盡きざるに、白日將に暮れんとす。乃ち音樂を罷め、服飾を改め、閨中に逍遙す。粉黛微しく落ち、復た鬢髮を整理し蘭膏を拂塗し、衣るに好服を以てし、其芳香を揚ぐ。眼波光彩を發し、紅

【一二六】微步。緩步なり。
【一二七】玄眉。黑き眉。鉛華はオシロイ。
【一二八】蘭澤。蘭膏なり。
【一二九】媠服。美服なり。若は杜若なり、香草の名。
【一三〇】睇眄。斜視なり。
【一三一】飛除。高階なり。閑房は閑室。
【一三二】華燭。華燭なり。幄幙はトバリ。
【一三三】清商。澄みたる歌聲。
【一三四】九秋。秋九十日をいふ。

顏笑ふに宜し。時に足下と手を携へて共に行き、階を升りて閑室に就けば、燭光明にして帳帷靜に垂るる處、紅脣を開いて清歌を揚げ、又衣裳を振ひて舞ふ。秋夜の長きも、歡興の盡くるを知らず。此れ聲色の至樂なり。足下我に從つて共に遊ぶことを願ふかと。玄微子曰く、予は淸虛を樂む。此樂を求めざるなりと。（以上第六章）

鏡機子曰く、予聞く君子は節を奮ひて以て義を顯すを樂み、烈士は軀を危くし以て仁を成すを甘んずと。是を以て雄俊の徒、黨を交へ〔一三三〕倫を結び、氣を重んじ命を輕んじ、〔一三四〕分に感じて身を遺る。故に〔一三五〕田光は劒に北燕に伏し、〔一三六〕公叔は命を西秦に畢ふ。果毅輕斷して〔一三七〕谷風に虎步し、威〔一四〇〕萬乘を慴れしめ、〔一四一〕華夏雄と稱す。と。辭未だ終るに及ばざるに、玄微子曰く、善しと。鏡機子曰く、此れ乃ち游俠の徒のみ。未だ妙と稱するに足らざるなり。夫の〔一四二〕田文、無忌の儔の若きは、乃ち上古の俊公子なり。皆仁を飛ばし義を揚げ、道藝に騰躍し、心を無方に游ばしめ、志を雲際に抗げ、諸侯を〔一四三〕凌轢し、當世に驅馳す。袂を揮へば則ち九野風を生じ、慷慨すれば則ち氣虹蜺を成す。吾子若し此時に當り能く我に從つて之に友たらんかと。玄微子曰く、予亮に願ふ。然れども大道に方ぶるに、累あるを如何せんと。

【一三五】倫。黨與なり。
【一三六】分。分義なり。
【一三七】田光。燕の太子丹の爲に荊軻を激厲せんとして自到す。
【一三八】公叔。或る說に荊軻の字なりといふ。荊軻は燕の太子丹の爲に秦王を刺さんとして果さず、遂に秦に死す。
【一三九】谷風。春秋元命苞に「猛虎嘯いて谷風起る」とあり。
【一四〇】虎步。虎の如く步むこと。
【一四〇】萬乘。天子をいふ。
【一四一】華夏。中國なり。
【一四二】田文。齊の公子孟嘗君なり。無忌は魏の公子信陵君なり。
【一四三】凌轢。凌辱なり。

【大意】鏡機子曰く、君子は節義を樂み、烈士は身を殺して仁を成す。故に互に黨を結び羣を連ね、分義を重んじ身命を輕んず。田光、公叔の如きは、卽ち是れなり。是等の人は皆果斷にして能く天子を慴れしむ。故に人皆之を稱して英雄となすと。鏡機子更に語を續けて曰く、然れども此等は遊俠の徒にして、未だ妙と稱するに足らず。かの田文、無忌の如きは、皆仁義を重んじ道藝に通じ、其志甚だ高尙なり。故に一擧一動天下を風動せざるはなし。足下能く我に從つて之が友たらんことを願ふかと。玄微子曰く、予誠に之が友たらんことを願ふ。然れども此れ勢利を以て相傾くるものにして、大道に於て累あるを如何せんと。（以上第七章）

鏡機子曰く、世に〔一四四〕聖宰あり、帝を翼け世に霸たり。量を〔一四五〕乾坤に同うし、曜を日月に等うし、〔一四六〕玄化神に參り、靈と契を合せ、惠澤〔一四七〕黎苗に播き、威靈無外に震ひ、隆平を殷周に超え、〔一四八〕羲皇に踵いで泰を齊うし、顯朝惟れ淸み、

【一四四】聖宰。賢宰相なり、曹操を指す。
【一四五】乾坤。天地なり。
【一四六】玄化。治化なり。
【一四七】黎苗。小昊の時、九黎德を亂り、舜の時、三苗命を用ひず。
【一四八】羲皇。伏犧なり。泰は泰

王道遐に均しく、民の望むこと草の如く、我が澤春の如く、河濱に(一四九)耳を洗ふの士なく、(一五〇)喬岳に巢居の民なし。是を以て(一五一)俊乂來り仕へ、國の光を觀す。擧ぐること才を遺さず、進むること各〻方を異にし、典禮を(一五二)辟雍に讚し、文德を(一五三)明堂に講じ、流俗の(一五四)華說を正し、孔氏の舊章を綜め、樂を散じ風を移し、國富み民康く、神應じ休臻り、屢〻嘉祥を獲。故に甘露紛として晨に降り、(一五五)景星宵すがら光を舒べ、游龍を神淵に觀、鳴鳳を高岡に聆く。此れ霸道の至隆にして(一五六)雍熙の盛際なり。然れども主上猶ほ沈恩の未だ廣からざるを以ひ、聲敎の未だ厲からざるを懼れ、(一五七)英奇を仄陋に采り、皇明を巖穴に宣ぶ。此れ(一五八)甯子商歌の秋にして、(一五九)呂望が綸を投じて逝く所以なり。吾子(一六〇)太和の民となり、(一六一)陶唐の世に仕ふるを欲せざるかと。是に於て玄微子の袂を攘げて興きて曰く、(一六二)韓なる哉言や、近者吾子の述ぶる所、華淫以て我を厲さんと欲し、祇に予が心を攪すのみ。天下の(一六三)穆清にして明平なり。

【一四九】耳を洗ふ。堯、許由の志を大とし禪るに天子の位を以てせんとす、許由之を汙とし河に臨んで耳を洗ふ。

【一五〇】喬岳。高山なり。巢父は堯の時の隱者なり、常に樹上に棲む、故に時人號して巢父といふ。

【一五一】俊乂。俊傑なり。

【一五二】辟雍。大學なり。

【一五三】明堂。天子政を布くの處。

【一五四】華說。浮華の言。

【一五五】景星。めでたき星。

【一五六】雍熙。和平なり。

【一五七】英奇。賢才なり。仄陋は微賤なり。

【一五八】甯子。甯戚。車下に商歌す、齊桓公其の賢なるを知りて登庸す。

【一五九】呂望。太公望なり、嘗て渭水に釣す、文王に遭ひて登庸せらる。綸はツリイト。

【一六〇】太和。太平なり。

君の國に莅むを聞き、盈虛の正義を覽、(一六四)頑素の迷惑を知るに至り、今予(一六五)廓爾として身の輕きこと飛ぶが若し。願くは(一六六)初服に反り、子に從つて歸らんと。

【大意】鏡機子曰く、今の世に賢宰相あり。天子を輔けて霸業を成し、功德天地日月に等しく、惠澤遠く及び、世の治平なること堯舜三代に同じ。世に隱遁の人なく、俊傑來り仕へ、典禮を脩め文德を講じ、國富み民康く、祥瑞屢出づ。此れ霸道の至治にして、和平の極なり。然れども天子猶ほ聲敎の及ばざるを懼れ、賢才を微賤より擧げ、巖穴の士を招く、是れ宜しく出でて仕ふべきの秋なり。足下も亦太平の民となり、聖代に仕ふるを欲せざるかと。玄微子大に感動して曰く、近ごろ足下の述ぶる所の言は、華淫に流れて徒に予が心を亂すに過ぎざりき。今明君國に臨むを聞き、吾が頑愚なりしを悟り、始めて出で仕へんと欲するに至れり。願くは初服に反り、足下に從つて世間に歸らんと。（以上第八章）

【一六一】陶唐。堯なり。

【一六二】穆清。和清なり。

【一六三】頑素。玄微子自ら謙して言ふ。

【一六四】廓爾。開悟の貌。

【一六五】初服。未だ隱遁せざる時の服。

卷の第十八

七下

七命八首

張景陽

(一)沖漠公子華を含み曜を隱し、(二)嘉遯して龍盤し、世を翫んで(三)高蹈し、心を(四)浩然に游ばしめ、志を(五)衆妙に玩び、景を(六)大荒の遐阻に絶ち、響を幽山の窮奧に呑む。是に於て(七)徇華大夫聞いて焉に造らんとし、乃ち(八)雲輅を勅め(九)飛黃を驂にし、奔沙を越え流霜を輾み、(一〇)扶搖の風を陵ぎ、堅冰の津を躡み、旌(一一)霄堮を拂ひ、軌(一二)蒼垠を出づ。天淸泠にして霞なく、野曠朗にして塵なし。重岫に臨んで轡を攬り、石室を顧みて輪を廻らし、遂に沖漠の居る所に適く、其居や、(一三)崢嶸幽藹にして(一四)蕭瑟虛玄なり、

【一】沖漠公子。沖漠は虛恬なり、假に設けて人名とす。
【二】嘉遯。隱遁なり。
【三】高蹈。官を去りて身を潔くすること。
【四】浩然。大道の氣。孟子に「我よく吾が浩然の氣を養ふ」とあり。
【五】衆妙。大道の門。老子に「玄の又玄、衆妙の門」とあり。
【六】大荒。山海經に「日月の入る處、是を大荒の野といふ」とあり。
【七】徇華大夫。徇は求、華は浮華、假に設けて人名とす。
【八】雲輅。輅は車なり。
【九】飛黃。神馬なり。
【一〇】扶搖。飈風なり。
【一一】霄堮。雲崖なり。
【一二】蒼垠。蒼天の畔なり。

(一五)溟海渾濩として其後に涌き、(一六)嶰谷嶰嶆として其前に張り、(一七)尋竹莖を竦てて其壑を蔭し、(一八)百籟羣鳴して其山を聾し、(一九)衝飈發して日を廻らし、飛礫起りて天に麗く。是に於て(二〇)絕巘に登り長風に遡ひ、(二一)辯惑の辭を陳べ、公子に巖中に命じて曰く、蓋し聞く聖人は道を卷いて時に背かず、智士は身を遺てて跡を匿さず、生きては必ず華名を(二二)玉牒に耀かし、歿しては則ち(二三)洪伐を金冊に勒すと。今公子は世を違けて(二四)陸沈し、地を避けて獨り竄れ、有生の歡滅び、(二五)資父の義廢れ、愁百年に洽く、苦千歲に溢る。何ぞ(二六)促鱗の汀濘に游ぎ、(二七)短羽の翳蒼に棲むに異らんや。今將に子を榮するに(二八)天人の大寶を以てし、子を悅ばすに(二九)縱性の至娛を以てし、地を窮めて游び、天に中して居り、四海の歡を傾け、九州の腴を殫し、(三〇)屈轂の瓠を鑽り、(三一)疏屬の拘を解かんとす。子之を欲するかと。

【一三】崢嶸幽藹。深冥なり。
【一四】蕭瑟虛玄。寂靜なり。
【一五】溟海。海の名。渾濩は水の湧く聲。
【一六】嶰谷。谷の名。嶰嶆は險なる貌。
【一七】尋竹。大竹なり。
【一八】百籟。林木の孔穴、風に激して聲を成すもの、及び鳥獸の聲。
【一九】衝飈。急風なり。
【二〇】絕巘。高山なり。
【二一】辯惑。論語に「德を崇くし惑を辯ず」とあり。
【二二】玉牒。國史なり。
【二三】洪伐。大功なり。金冊も國史。勒は記なり。
【二四】陸沈。世を避けて自ら隱るること。
【二五】資父。君臣の義をいふ。孝經に「父に事ふるに資り以て君に事ふるも敬同じ」とあり。
【二六】促鱗。小魚なり。汀濘は淺水。
【二七】短羽。小鳥なり。翳蒼は蒿草。
【二八】天人の大寶。富貴榮華なり。
【二九】縱性の至娛。聲色滋味な

公子曰く、大夫遺れず、來りて荒外に萃る。不敏に在りと雖も、敬んで(三二)嘉話を聽かんと。

【大意】沖漠公子美德を含み光曜を隱し、人世を避くること龍の山川に屈するが如く、心を大道に潛め、幽山極深の處に居る。徇華大夫之を訪はんとし、車馬に乘り沙霜を越え、風を陵ぎ氷を履みて行く。其居や、幽深靜寂にして、後に溟海あり前に嶰谷あり。急風忽ち日光を廻らし、礫石飛んで天に至る。大夫乃ち山巓に登り、長風に向ひ、疑惑を辯ずるの辭を公子に述べて曰く、聖人は、其道を卷き藏めて以て時君に背かず、其身を棄てて名跡を匿さず。生死必ず功名を史籍に傳ふ。今公子は世を避けて自ら隱れ、歡娛の道を絶ち、君臣の大義を廢し、愁苦を以て生を終らんとす。局量甚だ狹しといはざるべからず。今われ富貴聲色の樂を與へ、高大の處に游ばしめ、進んで仕へ窮苦を脫せしめんと欲す。公子之を願ふかと。公子曰く、足下我の不材を棄てず、此の荒外の地に來る。吾不敏と雖も、その美言を聽かんと。(以上第一章)

り。

【三〇】屈轂の瓠。韓非子に「齊に居士田仲といふ者あり、宋人屈轂往きて之に見えて曰く轂巨瓠あり堅きこと石の如く厚くして竅なしと、田仲曰く堅きこと石の如くなれば剖くべからず、厚くして竅なければ以て水漿を受くべからずと轂曰く然らば其れ棄物ならんかと、曰く然りと、轂曰く今先生人の食を恃まずと雖亦人の國に益なし、猶ほ棄つべきの瓠の如しと、田仲失ふ所あるが如く慙ぢて對へず」とあり。

【三一】疏屬の拘。山海經に「貳負猰貐を殺す、黃帝乃ち之を疏屬の山に梏す」とあり。

【三二】嘉話。善說なり。

大夫曰く、寒山の桐(三三)太冥より出づ。(三四)黃鐘を含んで以て榦を吐き、(三五)蒼岑に據りて孤生す。既に乃ち(三六)瓊巘嶒崚として金岸(三七)崥崹たり。左は(三八)風谷に當り右は(三九)雲谿に臨み、上に(四〇)陵虛の巢なく、下に(四一)跖實の蹊なく、(四二)搖刖峻挺、(四三)茗邈苕嶢たり。三春の溢露を晞かし、九秋の鳴飈に遡ひ、雲雪其根に寫ぎ、霏霜其條を封ず。木既に繁くして後綠に、草未だ素へずして先づ凋む。是に於て雲梯を構へ崢嶸に陟り、(四四)蕤賓の陽柯を翦り(四五)大呂の陰莖を剖き、(四六)營匠其樸を斲り(四七)伶倫其聲を均へ、器擧りて樂奏し(四八)促調高く張り、音(四九)號鐘よりも朗に、韻(五〇)繞梁より淸めり。逸響を(五一)八風に追ひ奇律を(五二)歸昌に采り、(五三)中黃の少宮を啓き、(五四)蓐收の變商を發す。若し乃ち(五五)龍火西に

【三三】太冥。北方なり。

【三四】黃鐘。十二律の一。

【三五】蒼岑。青山なり。

【三六】瓊巘。玉山なり。嶒崚險高の貌。

【三七】崥崹。漸く平なる貌。

【三八】風谷。風の生ずる所の谷。

【三九】雲谿。雲の出づる所の溪。

【四〇】陵虛。淮南子に「鳥は虛を排して飛ぶ」とあり。

【四一】跖實。跖は蹋、實は地なり、淮南子に「獸は實を蹠んで走る」とあり。

【四二】搖刖。危き貌。峻挺は高き貌。

【四三】茗邈苕嶢。高遠の貌。

【四四】蕤賓。禮記に「仲夏の月律蕤賓に中る」とあり。陽柯は山南に生ずる枝。

【四五】大呂。禮記に「季冬の月律大呂に中る」とあり。陰莖は山木に生ずる幹。

【四六】營匠。工人なり。

【四七】伶倫。古の音樂家。

【四八】促調。急調なり。

【四九】號鐘。琴の名。

【五〇】繞梁。琴の名。

【五一】八風。八方の風。

【五二】歸昌。鳳鳴なり。

【五三】中黃。土の色なり。劉向の雅琴賦に「少宮を彈じて天に際し、中徵を授けて以て泉に及ぶ」とあり。

【五四】蓐收。秋の神。變商は五聲の名。

【五五】龍火。火星なり、秋には西南に見ゆ。

穨れ（五六）暄氣初めて收まり、飛霜節を迎へ高風秋を送るとき、羇旅懷土の徒、（五七）流宕百罹の疇、（五八）促柱を撫すれば則ち（五九）酸鼻し、（六〇）危絃を揮へば則ち流涕す。若し乃ち（六一）清哇を追ひ（六二）嚴節に赴き、（六三）綠水を奏し（六四）白雪を吐けば、（六五）激楚廻り（六六）流風結ぼれ、（六七）蓂莢の朝に落つるを悲み、（六八）望舒の夕に缺くるを悼み、（六九）煢釐之が爲に擗摽し（七〇）孀老之が爲に嗚咽し、（七一）王子纓を拂つて耳を傾け、六馬天に噓いて秣を仰ぐ。此れ蓋し音曲の至妙なり。子豈能く我に從つて之を聽かんかと。公子曰く、余病んで未だ能はざるなりと。

【大意】大夫曰く、北方寒山に桐樹あり。玉山金岸の間に生じ、風雲の生ずる所の溪谷に立ち、上に飛鳥の巢なく、下に走獸の蹊なく、獨り亭亭として聳え、風露霜雪を陵ぎ、衆木既に繁りて然る後に綠に、秋草未だ衰へざるに先づ落つ。乃ち梯を作りて高山に登り、之を伐りて琴となし、伶倫をして其聲を均へしむ。聲韻極めて清高にして、八風に應じ鳳鳴に似たり。故に

【五六】暄氣。暖氣なり。
【五七】流宕百罹。遠遊して種種の憂に遇ふこと。
【五八】促柱。急絃といふが如し。
【五九】酸鼻。悲むこと。
【六〇】危絃。高絃なり。
【六一】清哇。清唱なり。
【六二】嚴節。急節なり。
【六三】綠水。琴曲の名。
【六四】白雪。琴曲の名。
【六五】激楚。激越の聲。
【六六】流風。急風なり。
【六七】蓂莢。瑞草なり、堯天子となるや蓂莢庭に生じ日に一葉を生じ十六日に至りて後、日に一葉を落す。
【六八】望舒。月なり。
【六九】煢釐。寡婦なり。擗摽は胸を打つて悲むこと。
【七〇】孀老。老寡婦なり。
【七一】王子。仙人の名、周の靈王の太子晉なり。よく笙を吹く。纓は冠の紐。

悲秋の時、遠遊鄕を懷ふの士、一たび之を奏すれば、悲傷して涕を流し、綠水、白雪の曲を奏すれば、聲激越して廻風起り、歲月の往き易きを歎じ、寡婦胸を打つて嗚咽し、仙人も耳を傾けて聽き、馬も首を仰いで之を聽く。此れ音曲の妙なり。足下之を聽かんことを願ふかと。公子曰く、余病んで未だ之を聽く能はざるなりと。（以上第二章）

大夫曰く、（七二）蘭宮祕宇、（七三）彫堂綺櫳、（七四）雲屏爛汗として（七五）瓊壁青葱たり。（七六）應門八襲にして（七七）旋臺九重なり。表するに（七八）百常の闕を以てし、圜らすに（七九）萬雉の墉を以てす。爾して乃ち（八〇）嶢榭風を迎へて中天に秀出し、（八一）翠觀岑のごとく青く彫閣霞のごとく連り、長翼雲に臨み（八二）飛陛山を陵ぎ、（八三）玉繩を望んで極を結び（八四）倒景を承けて軒を開き、（八五）赬素炳煥として（八六）枌栱嵯峨たり。（八七）陰虬檐を負ひ（八八）陽馬阿を承け、

【七二】蘭宮。香宮なり。祕宇は深宮。
【七三】彫堂。彫飾を加へし堂。綺櫳は文綺をはりし大窓。
【七四】雲屏。雲を畫ける牆。爛汗は文色の貌。
【七五】瓊壁。玉を以て飾れる壁青葱は玉の色。
【七六】應門。正南の門。八襲は八重なり。
【七七】旋臺。曲臺なり。
【七八】百常。一丈六尺を常といふ。
【七九】萬雉。高さ一丈長さ三丈を雉といふ。
【八〇】嶢榭。高臺なり。
【八一】翠觀。碧樓なり。
【八二】飛陛。高階なり。
【八三】玉繩。星の名。
【八四】倒景。極めて高き處。
【八五】赬素。紅白なり。炳煥は光る貌。
【八六】枌栱。枌は複棟。栱はマスガタ。嵯峨は高く重る貌。
【八七】陰虬。龍なり。龍は陰なり。
【八八】陽馬。馬は陽なり。阿は曲なり。

錯ふるに(八九)瑤英を以てし、鏤むるに金華を以てし、(九〇)方疏秀を含み、(九一)圓井葩を吐き、重殿疊起して交綺(九二)楹を對し、幽堂晝密しく明室夜朗なり。(九三)焦螟飛んで風を生じ、(九四)尺蠖動いて響を成す。若し乃ち目常玩を厭ひ體帷幄に倦むとき、公子を攜へて雙び游び、時に林麓に娯觀し、翠阜に登り丹谷に臨めば、華草錦のごとく繁り飛采星のごとく燭き、陽葉春青く陰條秋綠に、華實代〻新にして意を承け歡を恣にす。仰いで(九五)神龍を折り俯して朝蘭を采り、惠風に(九六)蘅薄に遡ひ、(九七)椒塗を瑤壇に眷る。爾して乃ち(九八)三翼を浮べて中沚に戲るれば、(九九)潛鰓駭き驚翰起り、沈絲結び(一〇〇)飛矰理り、(一〇一)歸翮を赤霄の表に挂け、華鱗を紫淵の裏に出す。然る後棹を縱にし風に隨ひ、楫を弭めて波に乘り、(一〇二)孤竹を吹き雲和を拊ち、淵客(一〇三)淮南の曲を唱へ(一〇四)榜人采菱の歌を奏す。歌に曰く、(一〇五)鳧舟に乘りて水嬉をなし、芳洲に臨んで(一〇六)雲芝を拔き、樂んで以て戚を忘れ、游んで以て時を卒へ、夜を窮めて日となし、歲を畢へて期となすと。此れ蓋し(一〇七)宴居の浩麗なり。子豈能く我に從つて之に處らんかと。公子曰く、余病んで未だ能はざるなりと。

【大意】　大夫曰く、香宮深殿彫飾の美を極め、玉壁雲墻之を繞り、八重の門を設け九曲の臺を築き、金碧燦爛として目を奪ふ。室深くして焦螟の微蟲も、飛んで風を成し、尺蠖の小物も、動けば響を成す。此に安居して倦むや、足下と相携へて林麓に遊び、山に登り谷に臨めば、花草色を雜へて錦の如く星の如し。乃ち意に任せて觀賞を恣にし、和風に浴して香木の道を步し、更に舟を池中に浮ぶれば、魚沈み鳥飛ぶ。乃ち釣弋を以つて流を下り、梅を止めて波に任せ、笛を吹き瑟を鼓し、舟人聲を齊うして歌ふ。歌に曰く、舟遊をなして香草を採り、樂んで戚を忘れ、夜を日に繼ぎて限となすと。此れ宮室安居の樂なり。足下我と共に之を樂まんことを願ふかと。公子曰く予病んで未だ能はざるなりと。（以上第二章）

【九八】瑤英。玉なり。
【九九】方疏。窓なり。秀は花。
【一〇〇】圓井。屋内下に向つて井形を作り畫くに蓮花を以てす。
【一〇一】楹。絹ばりの窓。
【一〇二】焦螟。微蟲の名。
【一〇三】尺蠖。しやくとり蟲。
【一〇四】神龍。香草なり。
【一〇五】蘅薄。香草の叢。
【一〇六】椒塗。香木の道。瑤境は玉階。
【一〇七】三翼。舟なり。中沚は中渚。
【一〇八】潛鰓。沈魚なり。驚翰は驚鳥。
【一〇九】飛矰。いぐるみ。
【一一〇】歸翮。歸鳥なり。赤霄は紅雲。
【一一一】孤竹。笛なり。雲和は瑟。
【一一二】淮南。歌曲の名。
【一一三】榜人。舟人なり。采菱は歌曲の名。
【一一四】鳧舟。舟の名。鳧の形をなせり。
【一一五】雲芝。香草なり。

大夫曰く、若し乃ち(一一六)白商の素節、月既に(一一七)衣を授くれば、天凝り地閉ぢ、風厲しく霜飛び、(一一八)柔條夕に勁く、密葉晨に稀なり。將に氣に因りて以て殺を效し、(一一九)金郊に臨んで(一二〇)師を

【一一六】宴居。安居なり。
【一一七】白商の素節。秋をいふ。周禮に「西方は白」とあり、秋は五行に於て西なり。禮記に「孟秋の月、其音は商」とあり
【一一八】柔條。やはらかなる樹枝。
【一一九】金郊。西郊なり。
【一二〇】師を誚す。武を講じ戰を
【一一七】衣を授く。詩經に「九月衣を授く」とあり。

講ぜんとす。爾して乃ち(一一三)輕武を列ね(一一四)戎剛を整へ、(一一五)雲髦を建て雄芒を啓き、(一一六)紅陽の飛鷰に駕し、(一一七)唐公の驌驦を驂にし、(一一八)羽隊を外林に屯め(一一九)輕翼を中荒に縱つ。爾して乃ち(一二〇)飛羈を布き脩罠を張り、黃岑を陵ぎ青巒に挂け、長壑を畫りて以て限となし、流谿を帶びて以て關となす。既にして乃ち內に(一二一)疏蹊なく、外に漏跡なし。鉦を叩いて(一二二)校を數へ、麾を擧げて獲を旌し、(一二三)金機を彀り鳴鏑を馳せ、(一二四)剛豪を翦り勁翮を落し、車騎競ひ騖せ武を駢べ轍を齊うし、(一二五)翕忽揮藿として雲廻風列し、聲動き響飛び、形移り景發し、戈を擧ぐれば林竦し、鋒を揮へば電滅し、仰いで(一二六)雲巢を傾け、俯して地穴を殫す。乃ち(一二七)圓文の豜、(一二八)斑題の豵あり。鬣を鼓かせば風生じ、目を怒らせば電瞛り、口霜刃を齩み、足飛鋒を撥ひ、林を甈かし石

教ふること。

【一一三】輕武。兵車の名。

【一一四】戎剛。兵車の名。

【一一五】雲髦。旌旗の類なり。雄芒は劍戟の利刃。

【一一六】紅陽。人名。飛鷰は良馬の名。

【一一七】唐公。人名。驌驦は良馬の名。

【一一八】羽隊。士羽を負ひて隊を成すなり。

【一一九】輕翼。隊の左右翼なり。中荒は荒野の中。

【一二〇】飛羈。高き網なり。脩罠は長き網。

【一二一】疏蹊。通路なり。

【一二二】校。獲る所の多寡を量ること。

【一二三】金機。弩牙なり。鳴鏑はカブラ矢。

【一二四】剛豪。獸なり。勁翮は鳥。

【一二五】翕忽揮藿。飛走倏忽の貌。

【一二六】雲巢。高巢なり。

【一二七】圓文。圓き文章。豜は豕の一歲なるもの。

【一二八】斑題。額のまだらなること。豵は豕の三子を生めるもの。

を蹶かし、幽叢を(一二九)扣跋す。是に於て(一三〇)飛黃銳を奮ひ、(一三一)賁石伎を逞うし、(一三二)封豨を蹙み、馮豕を僨し、(一三三)甝虪を拉ぎ、獬廌を挫き、(一三四)句爪摧け、鋸牙捭れ、(一三五)瀾漫狼藉して、榛を傾け壑を倒にし、(一三六)殞胔山に挂り、(一三七)僵踣澤を掩ひ、藪は毛林をなし、隰は(一三八)丹薄をなす。是に於て圍を撤し罔を頓て、旆を卷き(一三九)鳶を收め、(一四〇)虞人獸を數へ、林衡鮮を計へ、(一四一)最を論じ勤を犒ひ、馬を息へ弦を韜む。肴駟鑣を連ね、酒駕軒を方べ、(一四二)千鍾電釂、(一四三)萬燧星繁、陵阜流膏に霑ひ、谿谷芳煙に厭き、歡極り樂殫き、(一四四)節を廻らして旋る。此れ亦(一四五)田游の壯觀なり。子豈能く我に從つて之をなさんかと。公子曰く、余病んで未だ能はざるなりと。

【大意】大夫曰く、秋風一たび至り、天地凝閉し、弱枝既に勁く、葉落ちて漸く稀なるに及べば、殺氣に因りて狩獵をなし、西郊に出でて武を演ず。先づ兵車を列ね、旗戟を建て、駿馬に駕して林

【一二九】扣跋。擊排なり。

【一三〇】飛黃。飛廉及び中黃、古の捷勇の人。

【一三一】賁石。孟賁及び石蕃、古の勇者。

【一三二】封豨。大豬なり。馮豕は大豕。

【一三三】甝虪。白虎及び黑虎。獬廌は猛獸の名。

【一三四】句爪。曲れる爪。

【一三五】瀾漫狼藉。獸の死する者多きをいふ。榛は林叢。

【一三六】殞胔。死屍なり。四足の死する者を胔といふ。

【一三七】僵踣。斃死する者。

【一三八】丹薄。血に染まりし叢。

【一三九】鳶。鳥の皮を剝ぎて之を竿上に置くなり。

【一四〇】虞人、林衡。竝に山澤を掌る官。鳥獸の新に殺せるものを鮮といふ。

【一四一】最。功の第一なるをいふ。

【一四二】千鍾。鍾は酒器。

【一四三】萬燧。かがり火。

【一四四】節。信節なり、使臣の執る所のもの。

【一四五】田游。遊獵なり。

野に臨み、網を山澤に張り、上下內外、また遁走の道なし。鉦を鳴らし鏖を擧げて、賞罰の制を示し、弩を張り鳴鏑を飛ばして鳥獸を射、車騎縱橫に馳せ、疾きこと風雲の如く、鳥巢を傾け獸穴を盡す。猛獸躍り出でて、目を怒らし鬣を奮ひて、勇士銳を奮ひて之を斃す。死屍累累として山澤に滿つ。是に於て圍を解き網を除き、官人獲を數へて功勞を賞す。駟馬を連ねて酒肴を運び、燧を擧げて夜飮し、畢つて乃ち還る。此れ狩獵の壯觀なり。公子之をなさんことを欲するかと。公子曰く、余病んで未だ能はざるなりと。（以上第四章）

大夫曰く、楚の〔一四二〕陽劍は歐冶の營る所なり。〔一四七〕耶谿の鋌、〔一四八〕赤山の精。〔一四九〕銷羊頭に踰え、〔一五〇〕鏌鋣成に越ゆ。乃ち鍊し乃ち〔一五一〕鑠し、〔一五二〕萬辟千灌し、〔一五三〕豐隆椎を奮ひ、〔一五四〕飛廉炭を扇ぎ、神器化成して、陽は文陰は〔一五五〕縵、〔一五六〕流綺、〔一五七〕星連し、浮彩豔發し、光散電の如く、質耀雪の如く、〔一五八〕霜鍔水凝、冰刃露潔、形〔一五九〕豪曹に冠たり、名〔一六〇〕巨闕よりも珍く、鄭を指せば則ち三軍〔一六一〕白首、晉を麾げば則ち千里流血す。豈ただ水には蛟鴻を截り、陸には奔駟を灑ち、〔一六二〕浮翮を斷ちて以て工となし、〔一六三〕重甲を絕ちて利と稱すと云爾ふのみならんや。若し其靈寶は、則ち〔一六四〕舒辟方なく、奇鋒模を異にし、形〔一六五〕薛燭を震かし、光風胡を駭かし、價〔一六六〕三鄕を兼ね、聲二都より貴し。或は名を馳せて〔一六七〕秦を傾け、或は夜飛んで吳を去る。是を以て功〔一六八〕萬載に冠し、威無窮に曜き、之を揮ふ者は前なく、之を擁する者は身雄なり。以て〔一六九〕九國を從服し、橫に〔一七〇〕八戎を制すべし。〔一七一〕爪牙景附し、〔一七二〕函夏風を承く。此れ蓋し〔一七三〕希世の神兵なり。子豈能く我に從つて之を服せんかと。公子曰く、余病んで未だ能はざ

【一四六】陽劍。劍の名。歐冶は鍛工の名。【一四七】耶谿。溪名。鋌は鐵名。【一四八】赤山。山の名。精は銅鐵の美なるもの。【一四九】銷。生鐵なり。羊頭は地名。淮南子に「苗山の鋌、羊頭の銷」とあり。【一五〇】鏌。鋣なり。鍛成は人名。【一五一】鑠。銷鎔するなり。【一五二】萬辟。辟は壘むこと。澤は鑄ること。【一五三】豐隆。雷の神。【一五四】飛廉。風の神。【一五五】縵。無文の絹。【一五六】流綺。文章をいふ。【一五七】星連。星の如く連る也。【一五八】霜鍔。鍔は刀刃なり。

【一五九】豪曹。劍の名。【一六〇】巨闕。劍の名。【一六一】白首。白頭なり。越絕書に「楚王鐵劍三枚を作る、晉鄭聞いて之を求むれども得ず師を興して楚城を圍む、楚王太阿の劍を引き城に登りて之を麾く、三軍破敗し血を千里に流し、晉鄭の軍頭皆く白し」とあり。【一六二】浮翮。飛鳥なり。【一六三】重甲。堅甲なり。【一六四】舒辟。舒は伸、辟は壘なり。方は常なり。【一六五】薛燭。風胡。劍を鑑定する者の名。【一六六】三鄕。越絕書に「句踐薛燭に純鈞を示して曰く、客之を買はんとする者あり、市の鄕二、駿馬千匹、千戶の都二あらば可ならんか云云」とあり。【一六七】秦を傾く。吳に湛盧の劍あり、夜飛んで去る、楚王之を得、秦求むれども與へず。事越絕書に見ゆ。此れ先づ吳を去りて後秦を傾くるなり、今秦を先にするは韻を取るが爲なり。【一六八】萬載。萬年なり。【一六九】九國。九州なり。【一七〇】八戎。八方の戎狄。【一七一】爪牙。英雄なり。【一七二】函夏。中國なり。【一七三】希世。世に稀なること。神兵は靈劍。

るなりと。

【大意】　大夫曰く、楚の陽劍は歐冶の作る所なり。銅鐵の精なるを取り、千鍛萬鍊して始めて成る。陽には文章ありて陰は無地なり。その文章星の連るが如く、光彩水の流るるが如く、古名劍と雖も復た比すべからず。豈ただ水には龍鴻を截り、陸には奔馬を擊つのみならんや。且つ舒卷常ならず、形狀凡ならず。故に其功萬歲に傳はり、威無窮に及び、之を揮へば敵敢て前まず、之を執れば雄長となり、夏夷を制馭するに足り、天下の英雄皆來り就き、四方風を望んで懼れざるはなし。是れ稀世の靈劍なり。足下之を佩服せんことを願ふかと。公子曰く、予病んで未だ能はざるなりと。（以上第五章）

大夫曰く、〔一三〕天驥の駿は逸態超越なり。氣を靈淵に稟け、精を〔一三〕皎月に受け、〔一七〕眸瞷黑照して、〔一七〕玄采紲發し、沫は紅を揮ふが如く、汗は〔一七〕血を振ふが如く、〔一七〕秦青も其衆尺を識る能はず、〔一八〕方埏も其の滅ゆるが若きを覩る能はず。爾して乃ち〔一八〕雲軒を巾り、朝霧を踐み、〔一八〕春衢に赴き、秋御を整へ、虯踊螭騰、麟超龍驤し、山を望んで載ち奔り、林を視て載ち赴き、氣盛に怒發し、星飛電駭し、志九州を陵ぎ、勢四海を越え、影形に及ばず、塵起るに暇あらず、〔一八〕浮箭未だ移らざるに、再び千里を踐む。爾して乃ち〔一八〕天垠を蹈え、地隔を越え、〔一八〕汗漫の游ばざる所を過ぎ、〔一八〕章亥の未だ跡せざる所を躡む。〔一八〕陽烏も之が爲に羽を頓し、〔一八〕夸父も之が爲に策を投ず。斯れ蓋し天下の〔一八〕儁乘なり。子豈我に從つて之を御せんかと。公子曰く余病んで未だ能はざるなりと。

【大意】　大夫曰く、天馬は形態奇逸なること衆馬にまさり、靈淵の氣を受け、明月の精を受けて生れ、瞳子黑く輝き、毛色黑光を放ち、紅の沫を嚙み、血色の汗を流し、秦青方埏の如き善く馬を相する者と雖も、その尺寸遲速衆相を知る能はず。之に車を駕し春路秋郊を馳すれば、疾きこと龍麟の飛ぶが如く、影其形に隨ふに及ばず。塵起るに暇あらず。刻未だ移らざるに、既に千里を過ぐ。陽烏も之が爲に羽を下し、夸父も驚いて杖を投ず。此れ誠に天下の駿良なり。足下此馬を御せんことを願ふかと。公子曰く、余病んで未だ能はざるなりと。（以上第六章）

【一七四】天驥。天馬なり。
【一七五】皎月。明月なり。
【一七六】眸瞷。目のヒトミ。
【一七七】玄采。黑色なり。紺は深青にして赤を含める色なり。
【一七八】血を振ふ。大宛の馬は血を汗すといふ。
【一七九】秦青。二人の名、よく馬を相す。衆尺は衆相及び尺度。
【一八〇】方埏。人の名。よく馬を相す。
【一八一】雲軒。雲氣を畫ける車。
【一八二】春衢。春路なり。

大夫曰く、〔一九〇〕大梁の黍、〔一九一〕瓊山の禾、〔一九二〕唐稷其根を播き、亦行歩に速なる人。

【一八三】浮箭。漏刻の箭なり。
【一八四】天垠。天涯なり。
【一八五】汗漫。能く天に游ぶ者。
【一八六】章亥。大章と豎亥となり

【一九〇】大梁。郡名、其地黍を出す。
【一九一】瓊山。山海經に「崑崙の上に木禾あり、長さ五尋大き

(一九二)農帝其華を嘗む。爾して乃ち(一九三)六禽の殊珍、(一九四)四膳の異肴あり。海の(一九五)錯を窮め、陸の(一九六)毛を極め、(一九七)伊公鼎に饗ぎ、(一九八)庖子刀を揮ひ、味(一九九)九沸を重ね、和(二〇〇)勺藥を兼ね、(二〇一)晨鳧露鶴、霜鷄黄雀あり。(二〇二)圜桉星のごとく亂れ、(二〇三)方丈華のごとく錯り、(二〇四)封熊の蹯、(二〇五)翰音の跖、(二〇六)鸇脾猩脣、(二〇七)髦殘象白、靈淵の龜、(二〇八)萊黄の鮪、(二〇九)丹穴の鷄、(二一〇)玄豹の胎あり。燀るに秋橙を以てし、酳ゆるに春梅を以てし、接るに(二一一)商王の箸を以てし、承くるに(二一二)帝辛の杯を以てし、(二一三)范公の鱗九溪より出で、(二一四)赬尾丹鯉、(二一五)紫翼青鬐あり。爾して乃ち(二一六)支離に命じて霜鍔を飛ばさしめ、紅肌綺の如く散じ(二一七)素膚雪の如く落つ。(二一八)婁子の豪も其細を剚ふる能はず、秋蟬の翼も其薄に擬するに足らず。繁肴既に闋りて亦(二一九)寒羞あり。(二二〇)商山の果、(二二一)漢皐の(二二二)龍眼の房を析き、(二二三)椰子の殼を剖き、芳旨萬選し、意を承けて代〻奏む。乃ち荆南の(二二四)烏程、(二二五)豫北の竹葉あり。(二二六)浮蟻星のごとく沸き、飛華滂のごとく接る。(二二七)玄石其味を嘗め、(二二八)儀氏其法を進め、(二二九)醽を傾くると一朝にして、以て(二三〇)流湎千日なるべし、(二三一)簞醪川に投ずれば、三軍をして捷を告げしむべし。斯れ人神の(二三二)歆羨する所、觀聽の(二三三)煒曄なり。子豈能く彊め起きて之を(二三四)御せんかと。公となり百穀を播く。

【一九二】農帝。神農百草の實を嘗めて、人に教へて穀を食はしむ。
【一九三】唐稷。唐堯の時后稷農官さ五圍」とあり。
【一九四】六禽。鴈鶉鷃雉鳩鴿なり。
【一九五】四膳。四時の食なり。
【一九六】錯。雜なり。書經に「海物惟れ錯る」とあり。
【一九七】毛。草なり。
【一九八】伊公。伊尹なり、初め料理人として殷の湯王に仕ふ。
【一九九】庖子。庖丁なり、古の料理人の名。
【二〇〇】九沸。呂氏春秋に「伊尹湯に說いて曰く、凡そ味の本は水最も始たり、五味三和九沸九變、火の紀たり」とあり。
【二〇一】勺藥。五味の和なり。
【二〇二】晨鳧。以下皆鳥の名。
【二〇三】圜桉。圓き食卓。
【二〇四】方丈。一丈四方に食器を竝ぶること。
【二〇五】封熊。大熊なり。
【二〇六】翰音。雞なり。
【二〇七】鸇脾。燕の股。猩脣は猩猩の脣。
【二〇八】髦殘。髦は髦牛、殘は蓋し煮肉の異名。象白は象の脂。
【二〇九】萊黄。地名なり。鮪は魚の名。
【二一〇】丹穴。山の名。
【二一一】玄豹。黒豹。
【二一二】商王。殷の紂王。紂象牙の箸を作る。
【二一三】帝辛。紂なり。紂玉杯を作る。
【二一四】范公。范蠡なり。蠡が養魚の浦に九溪なり。
【二一五】赬尾。赤き尾。丹鯉は赤きアギト。
【二一六】紫翼。紫のヒレ。

【二一七】支離。古の屠人なり。霜鍔は上文に見ゆ。
【二一八】素膚。白き膚。
【二一九】婁子。古の明目者離婁。よく秋毫の末を見る。豪は毫なり。
【二二〇】寒羞。果實の類。
【二二一】商山。山の名。
【二二二】漢皐。漢水の畔。榛は果の名。
【二二三】龍眼。椰子。果の名。
【二二四】烏程。地名、美酒を出す。
【二二五】豫北。豫章郡の北。竹葉は酒の名。
【二二六】浮蟻。酒上に浮ぶ滓。
【二二七】玄石。古の能く酒味を知る者。
【二二八】儀氏。儀狄なり。古の善く酒を造る者。
【二二九】醽。酒樽。
【二三〇】流湎。酔ふこと。
【二三一】簞醪。一樽の酒。黄石公記に「昔良將の兵を用ふるや人一簞の醪を饋るものあれば河に投じ衆をして流を迎へて之を飲ましむ、而して三軍爲に死を致さんことを願ふ」とあり。
【二三二】歆羨。うらやむこと。
【二三三】煒曄。盛なる貌。
【二三四】御。食ふこと。
【二三五】口爽。老子に「五味は人の口をして爽はしむ」とあり爽は傷なり。
【二三六】腊毒。國語に「厚味は寔に腊毒」とあり。腊は久なり。
【二三七】亡國の器。玉杯象箸の類。

首を傾くると一朝にして、以て(二三〇)流湎千日なるべし、(二三一)簞醪川に投ずれば、三軍をして捷を告げしむべし。斯れ人神の(二三二)歆羨する所、觀聽の(二三三)煒曄なり。子豈能く彊め起きて之を(二三四)御せんかと。公子曰く、(二三五)口爽の饌に耽り、(二三六)腊毒の味を甘しとし、腐腸の藥を服し、(二三七)亡國の器を御するは、子

大夫の榮とする所なりと雖も、故に亦吾人の畏るる所なり。余病んで未だ能はざるなりと。

【大意】　大夫曰く、大梁の黍、瓊山の禾を以て飯となし、海陸の美味を供へ、種種の調理を加へ、象牙の箸を以て之を取り、玉杯を以て之を承け、繁多の膳食既に終れば、亦寒涼の滋味あり。香美の果幾度か選擇し、意の欲するがままに代る代る之を進む。又美酒の玄石其味を嘗め、儀狄の法に從つて釀せるあり。一たび之を飲めば、士氣忽ち奮ひて捷を奏す。醉ふこと千日に亙り、一樽を川に投ずれば、士氣忽ち奮ひて捷を奏す。斯の滋味と美酒とは、人神の共に飲食せんことを願ふ所にして、觀る者の共に盛美とする所なり。足下彊め起きて之を飲食せんことを願ふかと。公子曰く、口を爽ふの美味を食ひ、久毒の厚味を甘しとし、腸を腐らすの滋味を食ひ、亡國の器物を用ふるは、世人の榮とする所なれども、予輩の畏れて愼む所なり。余病みて之を飲食する能はざるなりと。（以上第七章）

大夫曰く、蓋し（三三八）有晉の皇風を融するや、（三三九）金華徵を啓き、（三四〇）大人作るあり。明を繼ぎて代〻照し、天に配して（三四一）光宅す。其の德を基とするや、（三四二）姬公の岐に處るより隆に、其の仁を垂るるや、（三四三）有殷の湯王、亳は湯の都。

【三三八】有晉。晉朝をいふ。有は意義なし。融は通なり。
【三三九】金華。晉は金德の王なり故に金華といふ。徵は應なり。
【三四〇】大人。天子をいふ。
【三四一】光宅。光は大、宅は居ること。
【三四二】姬公。周の文王。岐は山の名。
【三四三】有殷。殷の湯王。亳は湯の都。

殷の亳に在るより富み、（三四四）南箕の風も、其化を暢ぶる能はず、（三四五）離畢の雲も、以て其澤を豐にするなし。（三四六）皇道煥炳として、（三四七）帝載緝熙たり。氣を導くに樂を以てし、德を宣ぶるに（三四八）語を以てし、敎へ（三四九）雲官の世よりも淸み、治（三五〇）鳥紀の時よりも穆ぎ、（三五一）王猷四に塞り、（三五二）函夏謐寧なり。丹冥烽を投じ、（三五三）靑徼警を釋き、馬を糞車の轅に却け、德を（三五四）昆吳の鼎に銘し、（三五五）羣萌素に反り、（三五六）時文載ち郁たり。耕父艇を推り、（三五七）魚豎陸を讓り、樵夫（三五八）危冠の飾を恥ぢ、（三五九）輿臺短後の服を笑ふ。六合時れ邕ぎ、（三六〇）巍巍蕩蕩たり。（三六一）玄齯巷に歌ひ、（三六二）黃髮擊壤し、（三六三）羲皇の繩を解き、

【三四四】南箕。星の名、風をつかさどる。風は物を養ふ所以なり。
【三四五】離畢。畢は星の名、雨をつかさどる。離は著なり。月行いて畢に著けば卽ち雨ふる雨は以て物を潤すべし。
【三四六】皇道。大道なり。煥炳は昭明なり。
【三四七】帝載。帝の事業。緝熙は安廣なり。
【三四八】語。一本詩に作る。
【三四九】雲官。黃帝の時、雲を以て官を紀す。
【三五〇】鳥紀。少皞の時、鳥を以て官を紀す。
【三五一】王猷。王道なり。
【三五二】函夏。中國なり。謐寧は安靜なり。
【三五三】丹冥。南方の遠處。
【三五四】靑徼。東方なり。
【三五五】昆吳。曇子に「昔夏金を山に採り以て鼎を昆吳に鑄しむ」とあり。
【三五六】羣萌。衆民なり。素は素樸。
【三五七】時文。當時の禮樂。郁は美なり。
【三五八】漁豎。漁夫なり。
【三五九】危冠。高冠なり。
【三六〇】輿臺。賤人なり。短後は軍士の服。
【三六一】巍巍。功高き貌。蕩蕩は德廣き貌。
【三六二】玄齯。黑髮の童子。堯微服して康衢に遊び童謠を聞く曰く「我が烝民を立つるは爾の極にあらざるはなし、識らず知らず帝の則に順ふ」と。
【三六三】黃髮。老人なり。堯の時擊壤の歌あり、曰く「日出でて作し日入りて息ふ、帝力我に於て何かあらんや」と。
【三六四】羲皇。伏犧なり。伏犧氏八卦を畫し以て結繩の政に代

(二六五)陶唐の象を錯く。若し乃ち(二六六)華裔の夷、(二六七)流荒の貊、語(二六八)韜軒に傳はらず、(二六九)地正朔を被らざるも、(二七〇)駿奔稽顙し、(二七一)質を委し譯を重ねざるはなし。時に(二七二)昆蚊惠に感じ、思ひて擾れざるはなく、苑には九尾の禽を戲れしめ、囿には三足の烏を棲ましむ。鳴鳳の林に在るは、黄帝の園よりも夥く、(二七三)有龍の淵に游ぶは、(二七四)孔甲の沼よりも盈てり。萬物(二七五)烟熅として、天地(二七六)交泰し、義懷内なく、化感外なし。林には(二七七)褐を被るものなく、山には(二七八)韋帶せるものなし。皆象(二七九)百工に刻せられ、兆(二八〇)靈蔡に發し、(二八一)搢紳濟濟として、(二八二)軒冕藹藹たり。功造化と流を爭ひ、德(二八三)二儀と大を

【二六五】陶唐。堯なり。堯象刑を作る。象は法なり。
【二六六】華裔。華は中國、裔は遠なり。
【二六七】流荒。窮遠の地。貊は夷狄なり。
【二六八】韜軒。輕車なり。風俗通に「秦周常に八月を以て韜軒の使、異代の方言を採り之を祕府に藏す」とあり。
【二六九】正朔。曆なり。
【二七〇】駿奔。疾走なり。稽顙は頓首といふが如し。
【二七一】質を委す。身を屈することと。
【二七二】昆蚊。昆蟲なり。毛詩序に「文王の德鳥獸昆蟲に及ぶ」とあり。
【二七三】有龍。龍なり。有の字は意義なし。
【二七四】孔甲。夏の天子。
【二七五】烟熅。和氣なり。易經に「天地絪縕として萬物化醇す」とあり。
【二七六】交泰。交通なり。
【二七七】褐を被る。隱遁者なり。
【二七八】韋帶。野人の帶なり。
【二七九】百工。書經に「高宗夢に傅説を得、百工をして野に營求せしむ、乃ち象を寫にし旁く天下に求む」とあり。
【二八〇】靈蔡。靈龜なり。兆はウラカタ。卜筮にあらはるること。史記に「呂尚年老い、漁釣を以て周の西伯を干す、西伯將に畋せんとす、之をトするに曰く、獲る所は霸王の輔ならんと」。
【二八一】搢紳。笏を挿み大帶を垂るる大官。濟濟は衆盛の貌。
【二八二】軒冕。軒は車、冕は朝冠なり。大官をいふ。藹藹は美盛の貌。
【二八三】二儀。天地なり。

比ぶと。言未だ終らざるに、公子(二八四)蹶然として興きて曰く、鄙夫固陋にして、此の(二八五)狂狷を守る。蓋し理之を毀るありて、(二八六)寶を爭ふの訟解け、言之を怒るありて、(二八七)齊王の疾痊えぬ。向に子我を誘ふに聾耳の樂を以てし、我を棲ましむるに(二八八)蔀家の屋を以てす。(二八九)田游馳蕩利刃駿足は、既に老氏の戒むる攸なり。吾人の欲する所にあらず。故に得て子に應ずることなし。皇風載ち肅く、時聖道淳く、實を擧げては秋となし、藻を摛べては春となし、下に封ずべきの民あり、上に(二九〇)大哉の君あるを聞くに至る。余不敏と雖も、請ふ後塵に尋がんと。

【大意】大夫曰く、我が晉の天下に君たるや、金德に應じて聖人の德あり。天に配して大に中土に居り、德を尚ぶこと文王に過ぎ、仁を垂るること殷湯にまさり、風の物を養ひ雨の物を潤すが如く、鬱氣を引くに音樂を以てし、帝德を宣ぶるに歌詩を以てし、治化黄帝少皞の世にまさり、王道充塞して天下和靜なり。故に邊疆警戒を解き、走馬を却けて耕車に駕せしめ、鼎を鑄て其德

【二八四】蹶然。疾く起くる貌。
【二八五】狂狷。愚蒙なり。
【二八六】寶を爭ふ。淮南子莊子后解に曰く、「人財を爭ひて相鬪ふ者あり、庶市子玉を其間に毀りて鬪ふ者止む」とあり。
【二八七】齊王の疾。呂氏春秋に「齊の閔王病む、宋に往いて文摯を迎へしむ、文摯王の疾を視て太子に謂つて曰く、王の病は怒を得ば愈ゆべし、愈ゆれば則ち摯を殺さん如何と、太子曰く、我れ王に請ひ必ず子を殺さざらんと。摯履を解かずして牀に登り衣を履んで王の疾を問ふ、王怒り叱して起つ、病卽ち愈ゆ云云」とあり。
【二八八】蔀家。幽闇なり。
【二八九】田游。狩獵なり。
【二九〇】大哉。論語に「大なる哉堯の君たるや云云」とあり。

を銘し、民俗純樸にして禮樂則ち美なり。是を以て推讓して爭はず、仕官を願ひて戎事を好まず。德化四夷に及び、重譯して來朝せざるはなく、恩澤禽獸に及び、惠に感じて擾れざるはなし。山林の隱者も皆出でて仕へ、野に遺賢なく、功德天地と其大を爭ふと謂ふも可なりと。言未だ畢らざるに、公子忽ち起きて曰く、余もと固陋にして此の愚蒙を守れるも、今晉德の盛美なるを聞き、怒解け疾痊え、恰も二人の寶を爭ふを見て、仙人自ら千金の壁を毀りて其爭を止め、文摯怒りて王の疾則ち痊えしが如し。嚮に足下は音樂、樓居、遊獵、利刃等の樂を以て我を誘へるも、此れ昔老子の戒めし所にして、予輩の好む所にあらず。余故に應せざりしなり。今晉德の善美にして、賢能を擧用すること、秋時の萬物實を成すが如く、禮樂文章を發すること、春時の榮を敷くが如く、下民皆善に遷りて封爵すべく、天子堯の大德あるを聞くに至り、自ら不敏を顧みず、大夫の後塵に從つて仕へんと欲するに至れりと。（以上第八章）

詔

漢の武帝

詔して曰く、蓋し非常の功あるは、必ず非常の人を待つ。故に馬或は【一】奔踶むなり。

【一】奔踶。馬奔り立ちて人を蹶むなり。

踶して千里を致し、士或は【二】負俗の累ひありて功名を立つ。夫れ【三】泛駕の馬、【四】跼弛の士、亦之を御するに在るのみ。其れ州縣をして吏民の茂才異等あり、以て將相となし、及び【五】絕國に使せしむべき者を察せしめよと。

【大意】此れ郡國に詔して賢良を求むるなり。詔に曰く、非常の功は非常の人を待ちて始めて成る。故に馬の非難ある、跼弛の癖ある者も、よく之を御すれば千里を致すべく、時俗の非難ある士も、能く之を用ふれば功名を立つるに足る。要は之を御するに在り。宜しく州縣に命じて、美材等輩に勝り、將相に任ずるに足り、遠國に使するに足る者を求め、之を薦めしむべきなりと。

【二】負俗の累。世俗の非難。
【三】泛駕。駕を覆すこと。
【四】跼弛。跼は逐、弛は廢なり。
【五】絕國。遠國ならん。

賢良の詔

漢の武帝

朕聞く、昔在唐虞は象を畫いて民犯さず、日月の燭す所【一】率俾せざるはなく、周の【二】成康は刑錯いて用ひず、德鳥獸に及び、敎四海に通じ、海外【三】肅愼、北發、渠搜、氐羌來り服し、星辰孛れず、日月蝕せず、山陵崩れず、川谷塞がらず、麟鳳郊藪に在り、【四】河洛圖書を出すと。烏虖何を施し

【一】率俾。順ひ服すること。
【二】成康。成王康王。
【三】肅愼。以下皆國名。
【四】河洛。川の名。易經に「河

て此に臻るや。今朕宗廟に奉ふるを獲て、夙に興きて以て求め、夜に寐ねて以て思ひ、淵水を渉り未だ濟る所を知らざるが若し。猗歟偉なる歟。何を行ひて以て先帝の㊄洪業休德を彰し、上は堯舜に參り、下は㊅三王に配すべき。朕の不敏なる、德を遠くする能はず。此れ㊆子大夫の覩聞する所なり。賢良は古今王事の體に明なり。㊇策を受け問を察し、咸な書を以て對へ、之を篇に著せ。朕親ら覽ん。

【大意】是れ賢良の臣に詔して策問するなり。朕聞く昔堯舜の時、ただ五刑の象を畫いて之を服せしめ、以て刑罰に當るのみ、而して民乃ち敢て犯す者なく、日月の照す所皆順服せざるはなし。周の成康の世、刑置いて用ひざること四十年、德禽獸に及ぶ。故に聲敎遠く外夷に及び、天變地異その跡を絕ち、麟鳳佳瑞連に至りぬと。朕天子の位に卽き、夙夜之を思ふも未だ爲すべきの道を知らず。何を行はば以て先帝の盛德大業を彰し、以て堯舜三王に比するを得べき。諸子は古今の事に精通せり。宜しく朕が策問に對ふべし。

洛圖書を出し、聖人之に則る」とあり。

【五】洪業。大業なり。休德は美德。

【六】三王。禹湯武王。

【七】子大夫。賢良の人を指して言ふ。

【八】策。天子の質問書。

冊

㈡魏公九錫を冊する文

潘元茂

㊂使持節丞相、領冀州の牧武平侯に制詔す。㊃朕不德を以て少くして㊄閔凶に遭ひ、㊅西土に越在し、㊆唐衞に遷る。此の時に當り㊇綴旒の若く然り。宗廟祀に乏しく、社稷位なく、㊈羣凶覬覦し、城邑を逼帶す。一人尺土も、朕獲ることなし。卽ち我が高祖の命將に地に墜ちんとす。朕用て夙に興き㊉假寐し、厥心に震悼して曰く、惟れ祖惟れ父、㊋股肱先正、其れ孰か朕が躬を恤ふると。乃ち天衷を誘き、㊌丞相を誕育す。我が皇家を㊍保乂し、弘に艱難を濟ふ。朕實に之に賴る。今將に君に典禮を授けんとす。其れ敬んで朕が命を聽け。

【一】魏公。曹操なり。冊は符命なり、封爵等を授くる時の勅語なり。九錫は車馬、衣服、虎賁、樂器、納陛、朱戶、弓矢、鈇鉞、秬鬯を賜ふこと。

【二】潘元茂。潘勗、字は元茂。後漢の獻帝の時の人。

【三】使持節。以下皆曹操の官職なり。

【四】朕。後漢の獻帝。

【五】閔凶。父母の喪をいふ。

【六】西土。長安なり。越在は遠方に居ること。

【七】唐衞。唐は安邑、堯の居りし所、衞は河内をいふ。

【八】綴旒。旒は絲を以て玉を貫き冕の前後に垂るるもの。

【九】羣凶。多くの奸雄。覬覦は上位を窺覗すること。

【一〇】假寐。衣冠を脫せずして寐ぬること。

【一一】股肱、輔弼の臣をいふ。先正は先賢。

【一二】丞相。曹操をいふ。誕育は生むこと。

【一三】保乂。安んじ治むること。

【大意】　朕今汝曹公に詔す。朕不德にして少くして父を喪ひ、都を離れて遠く他鄕に流離し。皇室の微弱なること、唯旒の懸るが如きのみ。且つ奸雄竝び起りて國土を兼幷し、朕は一民尺地も之を有する能はず。獨り心を傷めて祖宗臣僚の靈に祈り、其救を求む。遂に天心を感せしめ、曹公こに生る。公よく皇室の艱難を濟ひ、朕實に其功德に依賴す。因つて公に授くるに典禮を以てせんとす。謹んで朕が命を聽け。

昔者(一四)董卓初めて國難を興す。(一五)羣后位を釋てて以て王室を謀る。(一六)君則ち攝進し、首として(一七)戎行を啓く。此れ君の本朝に忠なるなり。後(一八)黃巾天常に反易し、我が(一九)三州を侵し、平民に延くに及び、君又之を討ちて其跡を翦除し、以て遷、楊奉專ら威命を用ふ。又君が勳に賴り、其難を刻ち黜け、遂に許都を建て、其京畿を造し、官を設け、(二一)兆祀して、舊物を失はず。天地鬼神是に於て乂るを獲たり。此れ又君の功なり。(二二)袁術僭逆にして淮南に肆なり、君が靈を僭れ憚る。(二四)丕顯なる(二五)謀を用ひ、(二六)蘄陽の役に(二七)橋蕤首を授く。

【四】董卓。靈帝を廢して弘農王となし獻帝を立つ。
【一二】韓遂、楊奉。竝に董卓の將なり。
【一三】兆祀。壇を築きて祭ること。
【一四】丕顯。明顯なり。
【一五】蘄陽。地名。
【一六】橋蕤。袁術の將なり。
【一〇】東夏。洛陽をいふ。
【一一】羣后。諸侯なり。
【一二】君。曹操をいふ。攝は進なり。
【一三】袁術。字は公路、帝を淮南に稱す。
【七】戎行。軍行なり。
【八】黃巾。賊軍の名。天常は常道。
【九】三州。青州兗州東平郡也。

(二七)稜威南厲し、術以て殞潰す。此れ又君の功なり。戈を廻らして東を指せば、(二八)呂布纓に就く。(二九)乘軒將に返らんとして、(三〇)張繡稽伏す。此れ又君の功なり。

【大意】　昔董卓の國難を興すや、諸侯皆其私政を棄てて皇室を佐け、安定の策を謀る。公乃ち先づ軍行を啓き、以て亂を除く。此れ公の忠なり。其後黃巾の賊起り、天理を亂し、我が三州を侵略し、禍人民に及ぶや、公又之を絕滅し、以て洛陽を安んず。時に韓遂、楊奉專ら威を關中に擅にす。公又其難を截定し、遂に都を許に遷し、官を設け職を分ち、壇を築いて祭祀を營み、漢家の禮樂その舊を失はず。袁術の淮南に僭號するや、公又之を討つ。術、公の威靈を畏れ、軍を棄てて走る。公因つて其將橋蕤を蘄陽に斬り、威力淮南を殺し、歸途また張揚、眭固、張繡を破り、或は殺し或は降す。此れ皆公の功なり。

(三三)袁紹常に逆ひ、社稷を危うせんことを謀り、其衆を(三四)憑恃し、兵を稱げて內に侮る。此の時に當り、王師寡弱にして、天下(三五)寒心し、固志あるなし。君大節を執り、精白日を貫き、其

【二七】稜威。威力なり。南厲は淮南に震ふこと。
【二八】呂布。建安三年曹操東征して之を破る。
【二九】乘軒。車なり。
【三〇】張揚。董卓の將なり。
【三一】眭固。張揚の將なり。
【三二】張繡。驃騎將軍濟の族子なり。衆を領して宛に屯す。
【三三】稽伏。拜伏なり。
【三三】袁紹。字は本初、獻帝紹を以て太尉となす。會〻曹操天子を迎へて許に都す、紹精兵十萬を率ゐて將に許を攻めんとす。
【三四】憑恃。自ら恃むこと。

武怒を奮ひ、諸の神策を運らし、(三六)官度に屆るに致んで、大に(三七)醜類を殲し、我が國家をして危墜を拯はしむ。此れ又君の功なり。師を(三八)洪河に濟し、(三九)四州を拓き定む。(四〇)袁譚高幹咸な其首を梟す。(四一)海盜奔迸し(四二)黑山軌に順ふ。此れ又君の功なり。(四三)烏丸三種亂を二世に崇ね、袁尙之に因り塞北に逼據す。(四四)馬を束ね車を縣け、一征して滅す。此れ又君の功なり。劉表背き誕き貢職を供せず、王師路に首ひ、威風(四五)先逝し、百城八郡臂を交へ膝を屈す。此れ又君の功なり。(四六)馬超成宜惡を同うして相濟し、(四七)河潼に濱據し、欲を逞うする所を求む。之を(四八)渭南に殄し、(四九)馘を獻ずること萬計、遂に邊城を定め、戎狄を撫和す。此れ又君の功なり。(五〇)鮮卑丁令譯を重ねて至り、(五一)單于白屋吏を請ひ

【三六】寨心。戰慄し懼るること。
【三七】固志。堅固なる志。
【三八】官度。地名、一に官渡に作る。建安五年曹操官渡に軍す。紹が衆大に潰ゆ。
【三九】醜類。惡類、袁紹の軍を指す。
【四〇】洪河。大河なり。
【四一】四州。青冀幽并の四州。
【四二】袁譚。紹の長子なり、青州を領す、建安十年曹操之を斬る。高幹は紹の甥なり、并州の牧を領す。
【四三】海盜。曹操東のかた海賊管承を征し、淳于に至り樂進をして之を擊破せしむ。
【四四】黑山。賊の據りし地。軌に順ふとは降りしこと。
【四五】烏丸三種。北狄なり。魏志に「三郡の烏丸、天下の亂を承け幽州を破り漢民を略有す、袁紹皆其首豪を立てて單于となす、故に袁尙兄弟之に歸し數〻塞に入りて害をなす」とあり。
【四四】馬を束ね事を懸け。險阻を行くこと。
【四五】先逝。軍行に先だちて威風の聞ゆること。
【四六】馬超、成宜。二人關中に據りて反す。
【四七】河潼。二川の名。
【四八】渭南。渭水の南。
【四九】馘。截りたる耳。戰勝てば死人の耳を截りて君に獻ず。
【五〇】鮮卑丁令。二國の名。
【五一】單于白屋。單于は後世の契丹、白屋は靺鞨。

職に帥ふ。此れ又君の功なり。

【大意】袁紹常道に悖り、其衆を恃み、內に天子を輕侮するの心を抱く。此時王師微力にして戰士堅固の志なし。公の精誠天日を貫き、武略を運らし、大に賊徒を官渡に破り、國家の危墜を免れしむ。更に大河を濟りて軍を進め、四州の地を拓き、袁譚高幹二人の首を梟す。又東海の賊を討つや、一は奔散し一は來り降る。又北狄烏丸二世亂をなし、袁尙之に因りて塞北に據るや、公險阻を越えて行き、一征して之を滅す。劉表國恩に背き貢賦を供せず。公之を征するや、遂に膝を屈して降る。又關中の賊馬超成宜を渭水の南に殄し、馘を獻ずること萬を以て算ふ。かくて邊城を定め戎狄を撫し、外夷來り服し、爲に吏を置かんことを請ふに至れり。此れ皆公の功なり。

君天下を定むるの功あり、重ぬるに明德を以てし、海內を(五二)班敍し、風俗を宣美し、勤敎を(五三)旁施し、刑獄を恤愼し、吏に苛政なく、民(五四)回慝せず、帝族を(五五)敦崇し、絕世を援繼し、舊德前功咸く秩でざるはなし。伊尹(五六)皇天に格り、周公四海に光くと雖も、之に方ぶれば(五七)蔑如たり。朕聞く先王竝に明德を建て、之に胙ゆるに土を以てし、之に分つに民を以てし、其寵章を崇くし、其禮物を備へ

【五二】班敍。秩序を立つること。
【五三】旁施。あまねく施す。
【五四】回慝。奸惡なり。
【五五】敦崇。尊崇なり。
【五六】皇天。天帝なり。
【五七】蔑如。遜に劣るをいふ。

ふるは、王室に（五八）蕃衛とし、厥世を（五九）左右する所以なりと。其れ（六〇）周成に在り、管蔡靖ならず。難に懲り功を念ひ、乃ち邵康公をして齊の太公に（六一）履を錫はしめ、東は海に至り西は河に至り、南は穆陵に至り北は無棣に至り、（六二）五侯九伯實に之を征するを得しめ、世〻太師を祚い以て東海に表せしむ。爰に襄王に及び、亦楚人王職に供せざるあり。又（六三）晉文に命じ登げて（六四）侯伯たらしめ、錫ふに二輅、虎賁、鈇鉞、秬鬯、弓矢を以てし、大に（六五）南陽を啓き、世〻盟主とならしむ。故に周室の壞れざるは、鑿二國に是れ賴る。今君丕顯の德を稱げ、明に朕が躬を保んじ、天命に奉答し、（六七）弘烈を導揚し、爰の（六八）九域を綏んじ、率俾せざるはなし。功（六九）伊周よりも高く、賞晉よりも卑し。朕甚だ恧づ。朕（七〇）眇身を以て兆民の上に託し、永く厥艱を思ふこと淵水を涉るが若し。君の濟す攸にあらずんば、朕任ふるなし。

【大意】公既に天下を定むるの功あり、又之に重ぬるに明德を天下に敷き、吏に苛政なく民奸惡なきを致す。伊尹、周公の德も之に比するに足らざるなり。朕聞く先王は明德ある人を建て、之に邦

【五八】蕃衛。援護なり。
【五九】左右。輔翼すること。
【六〇】周成。周の成王。管蔡は武王の弟管叔、蔡叔なり。
【六一】履。領地なり。
【六二】五侯。公侯伯子男。九伯は九州の長。
【六三】晉文。晉の文公。
【六四】侯伯。諸侯の長。
【六五】二輅。二種の車。虎賁は勇士。鈇鉞は兵器。秬鬯は黑黍の酒、宗廟の祭に用ふるもの。
【六六】南陽。地名。
【六七】弘烈。大業なり。
【六八】九域。九州なり。
【六九】伊周。伊尹周公。
【七〇】眇身。微力といふが如し。

土を與へ禮章を賜ひ、以て王室を援護せるの功に報ゆと。故に周の成王の時、管叔蔡叔の亂をなすや、齊の太公の功を念ひ、邵康公に命じて之に領土を賜ひ、諸侯を專征するを得しめ、世〻太師の官を與へて、東海に表たらしむ。其後襄王の時に至り、楚人貢賦を供せざるや、又晉の文公に命じて諸侯に長たらしめ、二輅以下の器物を賜ひ、南陽の地を與へ、世〻盟主たらしむ。周室の壞れざるは實に齊晉二國の力なり。今公明顯の德を以て、朕を輔けて大業を成さしめ、天下率服せざるはなし。公の功德伊尹周公に過ぎ、而も賞は齊晉に劣れり。是れ朕の大に恥づる所なり。況んや朕微力を以て、天子の位に在り、常に艱難を思ひて危懼を抱き、君の援護にあらずんば、朕の能く任ふる所にあらざるをや。

今冀州の河東、河內、魏郡、趙國、中山、鉅鹿、常山、安平、甘陵、平原、凡て十郡を以て、君を封じて魏公となし、使持節御史大夫（七一）虙をして、君に印綬、冊書、金虎符第一より第五に至る、竹使符第一より第十に至るまでを授けしむ。（七二）右君に（七三）玄土を錫ひ苴くに（七四）白茅を以てす。爰に爾の龜を契き、用て（七五）家社を建てしむ。昔在周室、畢公毛公入りて卿佐となり、周邵（七六）師保と

【七一】虙。郗虙、字は鴻豫、山陽の人。
【七二】右。一本此字なし。
【七三】玄土。黑土なり。古諸侯を封ずるには各方土を取り苴くに白茅を以てし以て社を作らしむ。東方は青、南方は赤、西方は白、北方は黑、魏は北に在り故に玄といふ。
【七四】白茅。白きチガヤ。

して出でて（七）二伯となる。外内の任君實に之に宜し。其れ丞相を以て冀州の牧を領することと故の如し。今更に（七）傳璽を下す。肅んで朕が命を將ひ、以て華夏に允にせよ。其れ故の傳武平侯の印綬を上つれ。

【大意】今因つて冀州の十郡を以て公を封じて魏公となし、郷慮に命じて印綬冊書等を公に授けしめ、又黒土を賜ひ、敷くに白茅を以てし、龜甲を灼きて卜し、以て大社を建てしむ。昔周王の時畢毛二公入りて卿となり、周郤二公出でて諸侯に長たり。今公宜しく内外を兼ね統ぶべし。丞相を以て冀州の牧を統領すること故の如くなれ。今更に魏公の印を授く。もと授けし所の武平侯の印は之を返納すべし。

今又君に九錫を加ふ。其れ敬んで後命を聽け。君が禮律を經緯し、民の軌儀となり、職業に安んじて（七九）遷志あるなからしむるを以て、是を用て君に（八〇）大輅戎輅各〻一、（八一）玄牡二駟を錫ふ。君分を勸め本を務め、民を嗇みて（八二）昏作せしめ、粟帛滯積して大業惟れ興る。是を用て君に（八三）衮冕の服を錫ひ、赤舄副へたり。君謙讓を（八四）敦尚し、民をし

【七五】冢社。大社なり。
【七六】師保。邵公太保となり、周公太師となる。
【七七】二伯。伯は諸侯の長。
【七八】傳璽。魏國を傳ふるの印。
【七九】遷志。心を他に遷すこと。
【八〇】大輅。金輅なり。戎輅は兵車。
【八一】玄牡。黒馬なり。二駟は八匹。
【八二】昏作。勉めて働くこと。
【八三】衮冕。禮服なり。赤冠は赤履。
【八四】敦尚。厚くしたつとぶ。

て興行し、少長禮あり、上下咸く和せしむ。是を用て君に（八五）軒懸の樂、（八六）六佾の舞を錫ふ。君風化を翼け宣べ、爰に四方に發し、遠人（八七）面を回らし、華夏充實す。是を用て君に（八八）朱戸を錫ひ以て居らしむ。君その（八九）明哲を研き、帝の難んずる所を思ひ、才を官にし賢に任じ、羣善必ず擧ぐ。是を用て君に（九〇）納陛を錫ひ以て登らしむ。君國の（九一）均を秉り、色を正し中に處り、（九二）纖毫の惡も抑退せざるはなし。是を用て君に虎賁の士三百人を錫ふ。君（九三）天刑を糾し虔み、厥の有罪を章かにし、（九四）關を犯し紀を干せば、（九五）誅殛せざるはなし。是を用て君に鈇鉞各〻一を錫ふ。君龍驤虎視して、旁く（九六）八維を眺、掩に逆節を討ち、四海に折衝す。是を用て君に（九七）彤弓一、彤矢百、（九八）兹弓十、兹矢千を錫ふ。君溫恭を以て基となし、孝友を德となし、明允篤誠朕が思を感せしむ。是を用て君に秬鬯副へたり。（一〇〇）珪瓚副へたり。魏國に丞相以下羣卿百僚を置くは、皆漢初諸王の制の如くせよ。君往いて欽めや、敬んで朕が命を服ひよ。簡に爾が衆を恤へ、時に（一〇一）庶功

【八五】軒懸。諸侯の樂なり。
【八六】六佾。佾は列なり。六列の舞。
【八七】面を回らす。臣服するも。
【八八】朱戸。赤戸なり。
【八九】明哲。明智なり。書經に「皐陶曰く、人を知るに在りと、禹曰く、咸く時の若きは惟れ帝も其れ之を難んず」とあり。帝は堯なり。
【九〇】納陛。階段なり。
【九一】均。政事なり。
【九二】纖毫。微細なり。
【九三】天刑。天子の刑法。
【九四】關紀。禁制なり。
【九五】誅殛。誅罰なり。
【九六】八維。八方の隅。
【九七】彤弓。朱塗の弓。
【九八】兹弓。黒塗の弓。
【九九】一卣。一樽なり。
【一〇〇】珪瓚。玉の杓。
【一〇一】庶功。衆功なり。

を亮にし、用て爾の顯德を終へ、我が高祖の（一〇二）休命を對揚せよ。

【大意】今又公に九錫を加ふ。公よく禮樂を脩め、民の儀表となり、民をして其職に安んじ、心を遷さざらしむ。故に輅馬を錫ふ。公また職分を勸め、農事に勉めしめしを以て、粟帛多く產す。因つて衰冕の服と赤舄とを錫ふ。公また謙讓を以て民を導き、上下 咸く和せしむ。故に舞樂を錫ふ。公また朕を輔けて風化を宣布し、遠人來り服し、中國殷富なり。又賢能を擧げて官に就かしむ。因つて朱戸納陛を錫ふ。公また國政を秉るに、大中の道を以てし、微細の惡も之を抑退せざるはなし。因つて虎賁三百人を錫ふ。又刑罰を謹み、四方を討伐す。因つて鈇鉞弓矢を錫ふ。また溫恭孝友の情朕を感せしむ。故に秬鬯と玉 杓とを錫ふ。魏國に丞相 以下の官を置くは、漢の諸侯の制の如くすべし。公往き愼んで朕が命を用ひ、朕が高祖の美命を 明にし、漢の社稷を安んずべし。

【一〇二】休命。天より受けたる美命。對揚は天意に答へ揚ぐることと。

令

（二）宣德皇后の令

宣德皇后敬んで（一）

【一】宣德皇后。姓は王氏、諱〳〵は寶明、琅邪臨沂の人。齊の〳〵武帝、文惠太子の爲に后を納

任彥升

具位に問ふ。夫れ功（三）不賞に在り、故に（四）庸勳の典蓋し闕く施造物に俾しければ、則ち謝德の途已に寡し。要は彊ひて之が名をなし、（五）荃宰をして寄するあらしめざるを得ず。（六）公實に天生の德、齊聖廣淵なり。（七）參辰を改めずして（八）九星仰止し、月月を易へずして（九）二儀貞觀す。在昔（一〇）晦明にして鱗を隱し翼を戢め、博く羣籍に通じて（一一）齒を一卷の師に讓り、（一二）劍氣雲を陵ぎて迹を萬夫の下に屈す。辯は天口を析てども言ふ能はざるに似、文は（一三）雕龍を擅にすれども成れば輒ち葉を削る。爰に（一四）弱冠に在り、首として（一五）弓旌に應じ、（一六）梁朝に客游すれば、則ち聲華籍甚し、名を（一七）宰府に薦む

【一】具位。梁王蕭衍を指していふ。

【二】不賞。史記に「功天下を蓋ふ者は賞せられず」とあり

【三】庸勳。功勳なり。

【四】荃宰。君王をいふ。

【五】公。梁王を指す。

【六】參辰。星なり、參辰を改めずとは久時を經ざるをいふ。

【七】九星。九州をいふ。仰止の止は助辭。

【八】二儀。天地なり。貞觀は正しく視るなり。

【九】晦明。明を內に藏することと。

【一〇】齒を讓る。推尊することと。

【一一】梁朝に客游すること。

【一二】劍氣。勇氣なり。

【一三】雕龍。文章に巧なること。

【一四】弱冠。二十歲。

【一五】弓旌。詩經に「我を招くに弓を以てす」孟子に「大夫を招くに旌を以てす」とあり。

【一六】梁朝。漢の時、司馬相如枚乘の徒が梁の孝王の門に客遊せしに比し、梁王衍が巴陵王府の法曹となりしをいふ。

【一七】宰府。蕭衍の太尉となり

れば、則ち延譽自ら高し。〔八〕隆昌の季年王に勤むること始めて著れ、〔九〕建武の維新〔一〇〕締構斯に在り。功隆く賞薄く〔一一〕嘉庸疇ゆるなし。一馬の田、〔一二〕介山の志愈〻厲く、六百の秩、〔一三〕大樹の號斯に存す。

【大意】宣徳皇后ここに梁王に問ふ。梁王の功極めて大なるを以て、却つて賞せられず。恩施既に隆くして造化に等しきを以て、謝恩の道なし。然れども強ひて酬謝の名をなし、君主をして寄託の意を表せしめざるを得ず。王の徳は實に天生にして且つ廣深なり。故に暫くにして天下を定め、人皆其功徳を仰がざるはなし。その微なるや、能く其明を包藏し、博く羣書に通せるも其師を推尊し、勇氣天を衝くも萬夫の下に屈し、辯は事理を分別すれども、言ふ能はざるが如く、文は巧麗なれども、成れば乃ち稿を削る。弱冠にして召聘に應じ、巴陵王に仕へて聲名を博し、遂に大尉に登りて美譽を揚げ、其後王事に勤労して建武維新の事を畫策し、其功極めて大なるも、其賞甚だ薄し。然れども祿爵を辭し、介山馮異が己の功に伐らざるの心を以て心となせり。

〔一〕嘉庸。善功なり。
〔一二〕介山。介之推をいふ。左傳に「介之推祿を言はず、祿亦及ばず」とあり。
〔一三〕大樹。後漢書に「諸將竝び坐して功を論ず、馮異獨り大樹の下に屏き共に功を論ぜず、軍中號して大樹將軍となす」とあり。

〔八〕隆昌。鬱林王の年號。季年は末年。
〔九〕建武。齊の明帝の年號。
〔一〇〕締構。結合なり。

旄を〔一四〕司部に擁するに及び、〔一五〕代馬敢て南に牧せず。〔一六〕穀を樊鄧に推せば胡塵嘗て夕に起ること罕なり。惟れ彼の〔一七〕狡童凶を窮め虐を極め、衣冠泯絶し、禮樂崩喪す。既にして旅に鞠げ衆に誓ひ、言に王室を謀る。〔一八〕白羽一たび麾きて〔一九〕黄鳥底し定む。甲既に鱗のごとく下り、車亦兎のごとく裂く。天の〔二〇〕屆を致して〔二一〕羣后に拱揖す。豐功厚利得て稱するなし。是を以て祥光總て至り、〔二二〕休氣四に塞り、〔二三〕五老河に游び、飛星昴に入る。〔二四〕元功茂勳斯の若く盛なり。而も地〔二五〕四履よりも狹く、勢〔二六〕九伯よりも卑し。帝悪づるあり。〔二七〕輶軒率り止る。今某位某甲等を遣し、茲の〔二八〕百辟を率ゐ人〻をして其誠を致さしむ。庶くは〔二九〕匪席の旨遠からずして復せんことを。

〔一四〕司部。司州なり。
〔一五〕代馬。代は北胡なり。
〔一六〕穀を推す。天子將を遣す時は必ず跪いて其車轂を推す。樊鄧は二城の名。
〔一七〕狡童。東昏侯をいふ。
〔一八〕白羽。白旄なり。
〔一九〕黄鳥。地名なり。鸝子に「武王兵車を率ゐて以て紂を伐ち、黄鳥より起りて赤斧に至る」とあり。
〔二〇〕屆。誅なり。
〔二一〕羣后。百官なり。
〔二二〕休氣。祥瑞なり。
〔二三〕五老。論語比考讖に「帝堯首山に升り河渚を觀る、乃ち五老あり渚に游ぶ、飛んで流星となり上りて昴に入る」とあり。
〔二四〕元功。大功なり。
〔二五〕四履。履は領土なり。左傳に「昔我が先君太公に履を賜ひ、東は海に至り西は河に至り南は穆陵に至り北は無棣に至る」とあり。
〔二六〕九伯。九州の長なり。左傳に「昔我が先君太公に命じて曰く、五侯九伯汝實に之を征せよ」とあり。
〔二七〕輶軒。輕車の使。
〔二八〕百辟。百官なり。
〔二九〕匪席の旨。旨は意志なり詩經に「我が心席に匪ず、卷くべからず」とあり。

【大意】王出でて司州を鎭ずるに及び、胡馬敢て南牧せず。兵に將として樊鄧二城を守れば胡兵侵入せず。東昏侯の位に卽くや、暴虐を行ひ善良を誅戮し、禮樂悉く壞る。王乃ち軍旅に告げ恢復を謀り、凶徒忽ち滅ぶ。其の大功盡く說くべからず。故に祥瑞屢至れり。然も其領土は太公より狹く、其勢は侯伯より卑し。今某等を遣し、百官を率ゐて其誠信を披瀝し、天子の位を禪らしむ。庶くは從來の志を改め固辭するなからんことを。

教

(二)宋公が張良の廟を脩むるが爲の教　傅季友

綱紀、夫れ盛德泯びず、義祀典に存す。微管の歎、事を撫すること彌〻深し。張子房道黃中に亞ぎ、照殆庶に隣し。風雲玄感、蔚として帝師となり、項を夷げ漢を定め、大に橫流を拯ふ。固より已に軌を伊望に參へ、德を如仁に冠たらしむ。若し乃ち神圮上に交り、道商洛に契ふ。顯默の際、窅然として究め難く、淵流浩瀁として其端を測るなし。塗舊沛に次り、駕を留城に停む。靈廟荒頓し、遺像陳昧す。跡を撫し人を懷ひ、永歎寢に深し。大梁を過ぐる者、或は想を夷門に停め、九原に游ぶ者は、亦隨會に流連す。之を若人に擬するに、以て云ふに足る。棟宇を改構し丹靑を脩飾し、蘋藻行潦時を以て薦を致すべし。懷古の情を抒べ、不刊の烈を存せん。主者施行せよ。

【大意】夫れ盛德ある者は百世必ず之を祀る。吾れ張良の功を懷ふこと深し。彼の道

【一】宋公。劉裕なり、晉の時宋公に封ぜらる。義熙十三年劉裕北伐して彭城を過ぎ張良の廟を脩めんとし、乃ち此教を下す。諸侯の命を敎といふ。

【二】綱紀。主簿の官をいふ。敎は皆主簿之を宣す。故に先づ之を呼ぶ。

【三】祀典。常祭なり。

【四】微管。微は無なり。論語に「孔子歎じて曰く、管仲なかりせば吾其れ被髮左衽せん」とあり。

【五】張子房。張良、字は子房。

【六】黃中。易經に「君子は黃中にして理に通じ位を正し體に居る」とあり。

【七】殆庶。易經に「顏氏の子其れ殆ど庶幾きか」とあり。

に隣し。(八)風雲玄感、(九)蔚として帝師となり、(一〇)項を夷げ漢を定め、大に橫流を拯ふ。固より已に軌を(一一)伊望に參へ、德を(一二)如仁に冠たらしむ。若し乃ち神圮上に交り、道(一四)商洛に契ふ。顯默の際、(一五)窅然として究め難く、淵流(一六)浩瀁として其端を測るなし。塗舊沛に次り、駕を(一七)留城に停む。靈廟(一八)荒頓し、遺像(一九)陳昧す。跡を撫し人を懷ひ、永歎寢に深し。(二〇)大梁を過ぐる者、或は想を夷門に停め、(二一)九原に游ぶ者は、亦隨會に流連す。之を若人に擬するに、以て云ふに足る。棟宇を改構し丹靑を脩飾し、(二二)蘋藻行潦時を以て薦を致すべし。懷古の情を抒べ、(二三)不刊の烈を存せん。主者施行せよ。

【大意】夫れ盛德ある者は百世必ず之を祀る。吾れ張良の功を懷ふこと深し。彼の道

【八】風雲玄感。易經に「雲は龍に從ひ風は虎に從ふ」とあり、此れ感應を深くする也。

【九】蔚。盛なる貌。

【一〇】項。項羽。

【一一】伊望。伊尹及び太公望。

【一二】如仁。論語に「桓公諸侯を九合し兵車を以てせざるは管仲の力なり、其仁に如かんや」とあり。

【一三】圮上。圮は土橋なり。張良嘗て下邳の圮上に於て老人に遇ひ、太公の兵法を授けらる。

【一四】商洛。商山の四皓。

【一五】窅然。深遠なり。

【一六】浩瀁。深廣なり。

【一七】留城。張良の封ぜられし地。

【一八】荒頓。荒廢なり。

【一九】陳昧。陳は古、昧は暗。

【二〇】大梁。地名。史記に「侯嬴年七十、家貧にして大梁夷門の監者となる、太史公大梁の墟を過ぎ其の所謂夷門を問ふ」とあり。

【二一】九原。晉の大夫を葬りし處。禮記に「趙文子九原に遊びて曰く、死して作くべくんば吾誰にか歸せん、君を利して身を謀りて其身を忘れず、我は則ち隨武子か」とあり。武子は卽ち士會なり、邑を隨に食む。

【二二】蘋藻行潦。藻及び水。左傳に「蘋藻の菜、行潦の水、鬼神に薦むべし」とあり。

【二三】不刊。不朽なり。烈は業。

は黄中に次ぎ、行は顔回に近く、肝膽相照して漢の高祖の師となり、項羽を滅して大亂を救ひ、功徳伊尹管仲にまさる。圮上の老人と神交し、商山の四皓と默契す。其の廣深なること測り知るべからず。余今北伐して沛國に次り留城に佇るに、其廟荒壞して遺像塵に汙る。抑〻大梁を過ぐる者は侯嬴を懐ひ、九原に遊べば隨會を懐ふ。是れ實に人の情なり。今留城を經て豈この情なからんや。宜しく廟を脩理し、時を以て祀るべし。聊か懐古の情を表し、不朽の業を傳へん。主任者此の教を宣下せよ。

(二)宋公が(三)楚の元王の墓を脩むるが爲の教　傅季友

綱紀、夫れ賢を褒し徳を崇べば、千載彌〻光り、本を尊び始を敬するは、義の隆なること遠きより す。楚の元王、仁を積み徳を基し、(三)蕃を斯境に啓き、(四)素風道業範を後昆に作せり。(五)本支の祚實に鄙宗に隆に、遺芳餘烈百世に奮ふ。而して(六)丘封翳然として墳塋翦るなし。遠きに感じ往を存し、慨然として永懐す。夫れ人を愛し

【一】宋公。劉裕なり。晉の時宋公に封ぜらる。
【二】楚の元王。漢の高祖の異母弟にして楚に封ぜらる。墓は彭城に在り。
【三】蕃。藩なり。斯境は彭城。
【四】素風。儉約純素の風。
【五】本支。本家及び分家。
【六】丘封。墳墓なり。翳然は荒蕪なり。

て樹を懐ひ、(七)甘棠すら且つ猶ほ翦るなし。墟墓を(八)追甄すれば、信陵も尚ほ或は泯びず。況んや(九)瓜疇の興る所、源を開き本よりする者をや。墓に近き五家を(一〇)蠲復し、長く灑掃に給すべし。便ち施行すべし。

【大意】賢を崇べば千歳光輝を增す。祖先を敬するは古來の道なり。楚の元王は仁徳を積みて此地に封ぜられ、徳風を子孫に垂れ、我が身に至りて餘澤を受く。而も其憤墓荒蕪して灑掃する者なし。今往事を追懐し、慨然として長歎す。昔は其人を愛して樹木を斬らず、墳墓を脩めて信陵君を表せるあり。況んや元王は吾が祖先なるをや。宜しく墓に近き五家の賦稅を免じ、之をして長く墳墓を灑掃せしむべし。

【七】甘棠。木の名。召公嘗て甘棠の下に息ふ。後人其徳を慕ひ其樹を愛して敢て伐らず。
【八】追甄。甄は表示すること。信陵は魏の公子信陵君なり。漢の高祖信陵君の爲に守冢五家を置けり。
【九】瓜疇。瓜の蔓。
【一〇】蠲復。租稅を免除すること。

文

(二)永明九年、秀才に策せし文五首　(三)王元長

秀才の(三)高第明經に

【一】(二)永明。齊の武帝の年號。〜策は策問なり。　〜【一一】(三)王元長。王融、字は元長、

問ふ。朕聞く神靈文思の君、聰明聖德の㊃后は、道を體して居らず、善を見て及ばざるが如くす。是を以て㊄崆峒に順風の請あり、㊅華封に乘雲の拜を致す。或は旌を揚げて士を求め、或は㊆虞を設けて賢を待ち、用て能く化を一時に敷き、烈を千古に餘す。朕夤んで天命を奉け恭しく永圖を惟ふ。審聽高居して載ち㊇祇懼を懷く。㊈言事史に必すと雖も、㊉象闕未だ簫あらず。㊋嘉猷を寤寐し、忠實を㊌延佇す。㊍子大夫名を選ばれ學に升り、以て王に賓たるに利あり。懋めて㊎三道の要を陳べ、以て㊏四科の首を光せ。㊐鹽梅の和、屬して望むあり。

【大意】　朕今汝等明經に高第せる秀才に策問す。聰明の君主は道を體得し、功成りて居らず。善人を見ては之を望むこと及ばざるが如し。故に黃帝は崆峒に廣成子を訪ひ、堯は華の封人に就きて乘雲の敎を受け、舜は旌を揚げて士を求め、禹は鍾虞を設けて賢才を待つ。是を以て治化一時に敷き、功を千歲に傳ふ。今朕天命を受けて天子となり國家の長久を圖り、常に危懼を抱けり。言事必ず史官の記錄するあるも、宮闕の上未だ直言の士あらず。故に夢寐の間も忠言を聞かんことを望まざるはなし。汝等名を選ばれて大學に升り、王者の賓たるに至れり。宜しく三道四科の道を述ぶべし。是れ朕の汝等に望む所なり。

又問ふ。昔㊑周宣千畝の禮を惰りて、虢公諫を納れ、㊒漢文三推の義を缺きて賈生直言す。良に以ふに食は惟れ民の天、農は政の本たり。㊓金湯も粟にあらざれば守らず、水旱も待つことあれば遥るなし。朕式て前經を照にし、茲の稼穡を寶とす。㊔祥正しくして㊕靑旂事を肅

【三】高第明經。明經科に及第せる者。
【四】后。君なり。
【五】崆峒。莊子に「黃帝廣成子の崆峒に在るを聞き、往きて之に見ゆ、廣成南首して臥す、黃帝下風に順つて膝行して進み、再拜して問ひて曰く身を治むること奈何にして以て長久なるべきと、廣成子曰く、來れ吾汝に至道を語らんと」とあり。
【六】華封。莊子に「堯華封を觀る、華の封人曰く、ああ聖人をして壽にして且つ富み且つ男子多からしめんと、堯皆辭して曰く、男子多ければ懼多く、富めば事多く、壽なれば辱多しと、封人曰く、天の萬民を生むや、必ず之に職を授く、男子多くして之に職を授けば何の懼か之れあらん、富んで人をして之を分たしめば何の事か之れあらん、天下道なければ德を脩めて閑に就き、千歲世を厭はば去つて上僊す、彼の白雲に乘りて帝鄕に至らん、何の辱か之れあらんと」とあり。
【七】虞。鐘虞なり。
【八】祇懼。愼懼なり。
【九】言事。禮記に「言へば則ち左史之を書し、動けば則ち右史之を書す」とあり。
【一〇】象闕。宮闕なり。
【一一】嘉猷。善謀なり。寤寐はねてもさめても。
【一二】延佇。希望すること。
【一三】子大夫。秀才等を指す。
【一四】三道。國體人事直言。
【一五】四科。一に曰く德行高妙志節清白、二に曰く學通行脩經博士に中る、三に曰く法令を明曉し以て疑を決するに足る、四に曰く剛毅多略、事に遭ひて惑はず。

【一六】鹽梅。輔佐の臣をいふ。書經に「若し和羹を作らば爾は惟れ鹽梅」とあり。
【一七】周宣。周の宣王。千畝とは籍田なり。賦の部に見ゆ。
【一八】漢文。漢の文帝。三推も籍田なり。
【一九】金湯。金城湯池なり。
【二〇】祥正し。國語に「農祥晨に正しく土乃ち脈發す」韋昭注に「農祥は房星なり、晨正は立春の日、晨に午に中するなり」とあり。

み、(三二)土膏して朱紘典を戒む。將に(三三)杏花(三四)清明冷風述べ遵(三五)未を釋て牛を佩び、相沿りて反するなく、貧を兼ね富を擅にし、浸く以て俗をなす。若し(三六)井を爰へ制を開かば、懼くは愚民を驚擾せん。(三七)鬻鹵朕やすべきも、恐くは時に(三八)史白なきを。興廢の術厥謀を(三九)矢陳せよ。

【大意】昔周の宣王、漢の文帝は籍田の禮を惰りしを以て、虢公、賈誼の爲に諫められぬ。誠に農は政事の根本にして、穀は民の恃んで以て生くる所なり。城池堅固なるも、糧粟なければ守るべからず。水旱の災あるも、粟ありて之を恃めば、流亡の患なし。朕故に稼穡の道を重んじ、籍田の禮を行ひ、古義に遵ひ、民をして之に則らしめ、農事を廢することなからしめんとす。今や民或は農を惰り、相倣ひて改むるを知らず。富家は貧人を兼幷し、常に其利を奪ひて自ら專にし、漸く以て風を成す。今俄に易田の制を開かば、恐くは愚民を煩亂せしめん。溝渠を作りて水を引かば、薄地も尙ほ肥沃なるべきも、恐くは其事に通達する者なからん。易田引渠の事は實に

【二】青旗。籍田の旗。禮記に「孟春の月、天子蒼龍に駕し青旗を載て、躬ら帝籍を耕す」とあり。

【三】土膏。土の潤ふこと。朱紘は冠の飾。典は法なり。

【三】杏花。禮記月令に「杏花生じて百穀を種う」とあり。呂氏春秋に「冬至より五旬七日に葛始めて生ず、是に於て始めて耕す」とあり。葛は葛蒲。

【四】清明。明は田間の溝。呂氏春秋に「凡そ耕の道、明は小にして以て清きを欲す」とあり。冷風は和風、苗を養ふ所以なり。

【五】未を釋て。鹽鐵論に「儒者は耒耜を釋て不驗の語を學ぶ」とあり。漢書に「龔遂渤海太守となる、民に刀劍を帶ぶる者あれば、刀劍を賣りて牛犢を買はしむ、何爲れぞ牛を帶び犢を佩ぶると」とあり。

【六】井を爰ふ。爰は易なり。井は周禮に「畝百を夫となし夫三を屋となし屋三を井となす」とあり。

【七】鬻鹵。薄地なり。

【八】史白。史起、白公、ともに渠を爲り水を引き田に漑ぎて大功ありし人。

【九】矢陳。陳述なり。

國家興廢の術なり。汝等宜しく其の謀を陳述すべし。

又問ふ。獄を議し死を緩くするは、(一〇)大易の深規。法を敬み刑を邮ふるは、(一一)虞書の茂典なり。(一二)氓俗澆弛し、法令滋〻彰れしより、朕の(一三)明發まで容を動かし、(一四)昃食して慮を興し、(一五)秋茶の密網を傷み、夏日の嚴威を惻み、永く(一六)晝冠を念ひ、緬く(一七)刑厝を追ふ所以なり。徒以ふに(一八)百鍰の輕科、反つて(一九)季葉に行はれ、(二〇)腑石不寃の民少く、(二一)棘林夜哭の鬼多し。

【一〇】大易。易經なり。深規は重則。易經に「君子以て獄を議し死を緩くす」とあり。

【一一】虞書。書經舜典なり。茂典は盛法。舜典に「欽めや欽めや、惟れ刑を之れ邮へよや」とあり。

【一二】氓俗。民俗なり。

【一三】明發。曉なり。

【一四】昃食。晩食なり。

【一五】秋茶。茶は草の名。鹽鐵論に「秦法は秋茶よりも繁し」とあり。

【一六】晝冠。堯の時、衣冠を畫くこと常人の飾に異らしめ、罪ある者をして之を服せしめしに人皆罪を犯さず。

【一七】刑厝。厝は置なり、周の成王の世刑置いて用ひざること四十年なり。

【一八】百鍰。今の罰金なり。書經の呂刑に出づ。

【一九】季葉。衰世なり、周の穆王の時を指す。

【一〇】棘林。春秋元命苞に「棘槐を樹ゑて訟を其下に聽く」とあり。無辜を誅すれば鬼夜哭す。

【一一】虞書の茂典なり。(一二)氓俗澆弛し、法令滋〻彰れしより、朕の(一三)明發まで容を動かし、(一四)昃食して慮を興し、(一五)秋茶の密網を傷み、夏日の嚴威を惻み、永く(一六)晝冠を念ひ、緬く(一七)刑厝を追ふ所以なり。徒以ふに(一八)百鍰の輕科、反つて(一九)季葉に行はれ、(二〇)腑石不寃の民少く、(二一)棘林夜哭の鬼多し。

(四一)四支の重罰、爰に前古に創る。(四二)游禽を絶澗に訪ひて、霸を秦基に作し、(四三)雞鳴を闕下に歌ひて、仁を漢牘に稱す。二途爽へるが如きも、卽ち用て兼通す。(四四)昌言の安んずる所、朕將に親覽せんとす。

【大意】罪の輕重を議り、以て人命を緩赦すべきは、易經の敎ふる所にして、法を愼み刑を輕くせざらんことは舜典の訓ふる所なり。民俗澆薄にして法網益〻密なるに至りしより、寃罪を以て刑せらるる者多し。是れ朕の夙に起き晩く食ひ、容貌を動かし思慮を用ひ、刑法の酷暴なること夏日の畏るべきが如くなるを悲み、堯の時衣冠に畫けば法を犯さず、周成の時刑を用ひざること四十年なりしを追慕する所以なり。思ふに金刑は後世に行はれ、體刑は遠く上古に始まれり。峻法を用ひて秦霸をなし、肉刑を除きて文帝仁を成す。一は峻法を用ひ一は寬法を用ふ。此の二途各〻異れるも、兼用して始めて可なるが如し。汝等自ら信ずる所を述べし。朕將に之を親覽せんとす。

【四一】四支。身體なり。

【四二】游禽。韓非子に「董閼于趙の上地の守となり、石邑山中を行く、深澗深さ百仞、其左右の人に問うて曰く、嘗て人の此に入りし者ありやと、對へて曰く有るなしと、牛馬犬彘の嘗て此に入りし者ありやと、對へて曰く有るなしと董閼于喟然として曰く、吾能く治めん吾が法をして赦すなからしむること、猶ほ澗に入れば必ず死するが如くならば民敢て犯すなし、何爲れぞ治まらざらんやと」とあり。

【四三】雞鳴。漢の淳于公罪あり刑に當す、淳于公の少女緹縈闕に詣り雞鳴の詩を歌ふ、文帝其意を憐み遂に之を赦し、肉刑を除く。漢牘は漢の史籍。

【四四】昌言。美言なり。

又問ふ。人を聚むるに(四六)財といひ、政を次づるに(四七)貨といふ。泉流して其の匱しからざるを表し、(四八)懋遷して其の有無を通ず。既に(四九)龜貝積く寢み、(五〇)緡纏專ら用ふ。世代茲れ多く、(五一)銷漏參倍す。下貧(五二)兼辰の業なく、中產(五三)涉歲の貲を闕く。(五四)冨斜の谷開いて銅を出す。且つ後命あり、茲の(五五)鎔範を事とし、都內の金を充て、(五六)圓府の職に紹ぐ。ただ(五七)赤仄巧學の患を深うし、(五八)榆莢輕重の權に難し。(五九)開塞の宜しき所、心を悉して以て對せよ。

【大意】財貨は政事の要件にして人の利して聚る所なり。泉の如く流れて乏しからざらしめ、勉めて有無を通ずべきなり。古は龜甲貝殼を用ひしも、其制廢して今專ら錢を用ふ。然れども既に之を用ふること久しきを以て、銷磨缺漏して三倍を減薄せり。隨つて貧人兩日再歲の用を缺き、憂隱して嗟嘆す。上天下民に臨み、朕に美寶を賜ひ、山谷開けて銅を出す。乃ち錢を鑄て都

【四六】財。易經に「何を以てか人を聚むる曰く財」とあり。

【四七】貨。書經に「八政、一に曰く食、二に曰く貨」とあり

【四八】懋遷。勉めて融通すること。

【四九】龜貝。昔は錢のかはりに龜甲貝殼を用ひたり。

【五〇】緡纏。錢を貫く索、ここは錢の意に用ふ。

【五一】銷漏。銷磨缺漏。

【五二】兼辰。兩日なり。

【五三】涉歲。再歲なり。

【五四】冨斜。邛斜。蜀の山名。

【五五】鎔範。錢を鑄ること。

【五六】圓府。太公周の爲に九府圓法を立つ。圓法は錢なり。

【五七】赤仄。漢の錢の名。赤銅を以て郭となす。

【五八】榆莢。漢の錢の名。

【五九】開塞。取捨なり。

內に充たし、太公の職事を繼がんとす。ただ赤仄は重く榆莢は輕く、共に權宜をなし難し。汝等心を悉して取捨の宜しきを思ひ、以て奉答すべし。又問ふ。歷を治め時を明にし、遷革の運を昭にし、憲を改め法を勅へ、(六一)刑德の原を審にす。(六二)分命唐官に顯れ、文條(六三)鄒說に炳なり。嵎夷職を廢し、昧谷方を虧くに及び、漢(六四)素祇の徵を秉り、魏黃星の驗を稱す。紛諍空しく軫り、疑論歸するなし。朕(六五)洪基を纂ぐを獲て。至道を弘めんことを思ふ。庶くは日月をして(六六)休徵し、風雨をして(六七)玉燭し、(六八)克明の旨遠からず、(六九)欽若の義復た還らしめんことを。子大夫に於て何如ぞや。其れ(七〇)驪翰色を改め、寅丑建を殊にす。(七一)別白して之を書せよ。

【六一】刑德。淮南子に「冬至を德となし、夏至を刑となす」とあり。

【六二】分命。書經堯典に「分ちて羲仲に命じて嵎夷に宅らしむ暘谷といふ、分ちて和仲に命じて西に宅らしむ昧谷といふ云云」とあり。唐官は堯の官なり。

【六三】鄒說。鄒衍、天の五勝歷數の事を說けるをいふ。

【六四】素祇。祇は神なり。漢の高祖白蛇を斬りしこと。

【六五】洪基。大業なり、帝位をいふ。

【六六】休徵。祥瑞をあらはすこと。

【六七】玉燭。爾雅に「四氣の和する之を玉燭といふ」とあり。

【六八】克明。書經堯典に「克く俊德を明にす」とあり。

【六九】欽若。書經堯典に「堯羲和に命ず、欽んで昊天に若ひ云云」とあり。

【七〇】驪翰。夏后氏は黑を尙ぶ戎事には驪に乘る、驪は黑馬なり。建寅の月を正月となす。殷人は白を尙ぶ、戎事には翰に乘る、翰は白馬なり、建丑の月を正月となす。

【七一】別白。分別明白なり。

【大意】曆數を理めて其時を明にすれば、帝王變遷改革の運を知る。帝王の興る其法度を改むるは、以て刑德の本を審かにする所以なり。唐堯の分命。鄒衍の歷數之を明證せり。司曆の官廢するに及び、漢の高祖は白蛇を斬りし事を以て自負し、魏の興らんとするや、黃星楚宋の間に現る。此等五行日月の理、其事を紛爭する者甚多くして歸一する所なし。朕帝位に卽き、此に至道を弘めんことを思ふ。希くは日月祥瑞を呈し、四時和順にして、俊德を明にすること堯の如く、天時に順ふこと羲和の如くならんことを。此道を致すには、當に如何にすべき。又夏殷黑白色を改め、寅丑建を異にするは何故ぞや。汝等宜しく分別明白にして之に答ふべし。

(一)永明十一年秀才に策せし文五首

王元長

秀才に問ふ。朕(二)籙を秉り天に(三)御し、(四)樞を握り極に臨み、(五)五辰空しく撫ひ、(六)九序未だ歌はず。政を(七)明臺に思ひ、道を(八)宣室に訪ふに至りて、墜つるが若きの惻毎に勤め、傷むが如きの念恆に軫る。故に貧を恤み賦を緩くし、

【一】永明。齊の武帝の年號。

【二】籙。未來記なり。天子天命を受くる符なり。

【三】御。升ること。

【四】樞。北斗の第一星。極は八極。

【五】五辰。春夏秋冬と土用となり。書經に「五辰に撫ひて庶績其れ凝る」とあり。

【六】九序。六府（水火金木土穀）三事（正德、利用、厚生）をいふ。書經に「九功惟れ敍し九敍惟れ歌ふ」とあり。

【七】明臺。明堂なり、天子政

(九)徭を省き、獄を愼む。幸に四境虞なく、三秋式て稔す。而して黍多く(一〇)稌多きも兩穗の謠を興さず。褐なく衣なくして必ず(一一)七月の歎を盈つ。豈政を布くこと未だ優ならざるか、將た(一二)罷民業を難んずるか。爾を朝に登げ、是に(一三)宏議を屬す。心を同うし以て厥辟を匡さざること罔かれ。

【大意】朕天命を受けて天下に君臨するも、庶政未だ全からず。常に惻傷憂念せり。故に賦稅を寬にし徭役を輕くし刑獄を愼みて民を恤まんことを期せり。幸に邊境事なく五穀豐饒なるも、未だ兩穗の瑞なく、民褐衣なきを歎ず。豈政を布くこと未だ優ならざるが爲か、將た民疲弊して產業を成し難きが爲か。汝等を登げて大議に參せしむ。宜しく心を一にして其君を匡すべし。

又問ふ。惟れ王國を建て、惟れ(一四)典官を命ず。上は(一五)星象に叶ひ、下は川嶽に符ふ。必ず天爵具に脩まり、(一六)人紀咸く事とするを待ち、然る後才に沿りて職を授け、務を揆りて司を分つ。是を以て(一七)五正朱宣に置き、下民忒はず。(一八)九工

【一】七月。詩經豳風の篇の名　其句に「衣なく褐なくんば、何を以てか歲を卒へん」とあり。
【二】罷民。疲民なり。
【三】宏議。大議。
【四】典。常なり。
【五】星象。春秋含命孳に「三公は五岳に象り九卿は河海に法る、三公は三台に法り九卿は北斗に法る」とあり。
【六】人紀。人事の綱紀。
【七】五正。左傳に「郯子昭子に謂つて曰く、少皞の立つや
【八】宣室。漢賢良を召す所の殿の名。
【九】徭。夫役なり。
【一〇】稌。稻穀なり。詩經に「豐年には黍多く稌多し」とあり。

黃序に開いて庶績其れ凝る。(一九)周官三百、漢位兼倍す。茲を歷て以降、(二〇)游惰寔に繁し。若し(二一)閑冗畢く弃つれば、則ち橫議已むなく、(二二)冕笏澄まずんば、則ち坐談彌〻積まん。何の則か脩むべき。善く其對を詳にせよ。

【大意】王者の國を立つるや、常に賢良に命じて官職に居らしむ。而して其職星象川嶽に叶ふ。故に天爵人道俱に備はる者を得て然る後之に職司を授く。是を以て少皞五正を置きて民差はず、虞舜九官を設けて庶績成る。周は官を建つること三百、漢は殆ど之に倍す。其後閑冗の官ますます多し。然れども一時に之を廢棄すれば、怨嗟を招き、曠官多ければ、物議を生ず。之を如何にして可なる。汝等詳に之に奉答すべし。

【一九】周官三百。禮記に「殷官二百周官三百」とあり。
【二〇】游惰。游散の官、怠惰の職をいふ。
【二一】閑冗。閑職冗員。
【二二】冕笏。官の服飾なり。ここは官職の意。
【二三】賢牧。賢主長なり。公羊傳に「陝より以東は周公之を主り、陝より以西は召公之を主る」とあり。
【二四】鳴琴。呂氏春秋に「宓子賤單父を治め、琴を彈じて身堂を下らず、而して單父治る」とあり。
【二五】醇酒。漢書に「曹參相國となる、日夜酒を飲む云云」

に能く人を[二六]陥危の域より出し、俗を仁壽の地に躋す。是を以て賈誼言ふ、天下の惡あるは吏の罪なりと。頃ろ深く[二七]珪符を汰び、妙に[二八]銅墨を簡ぶ。而して[二九]春雉未だ馴れず、秋螟散せず。入りて朕が前に在れば、其智略を湊め、出でて城守を連ねては、闕爾として聞ゆるなし。豈に[三〇]薪樵の道未だ弘からず、網羅の目をなすこと尙ほ簡なるか。意を悉し辭を正うし、執事に侵さるるなかれ。

【大意】賢牧士を分けて治むれば、鄉邑美風をなし、功績を擧ぐるを得。日に琴を鼓し酒を飲みて、治功觀るべきものあるに至りては、文法を守ると雖も人を害せず、嚴肅なりと雖も下を害せず。故に能く民を危難より救ひ、人をして仁壽ならしむ。是を以て賈誼は『民の不善なるは吏の罪なり』といへり。このごろ郡守縣令の任命を愼むと雖も、尙ほ未だ十分の成績あらず。朕が前に居りては、智略輻輳すれども、一たび各地に赴任すれば功績擧らず。豈賢牧を求むるの道疏なるに因るか。汝等辭を正しくして之に奉答せよ。有司に枉撓せらるるなかれ。

【陥危】危難に臨むこと。
【珪符】刺史のシルシ。
【銅墨】銅印墨綬。縣令のシルシ。
【春雉】東觀漢記に「魯恭中牟の令となる、この時郡國蝗苗稼を傷ふ、獨り中牟に入らず、肥親、恭と俱に桑下に坐す、雉あり其傍に止る、傍に兒童あり、親曰く何ぞ之を捕へざると、兒曰く雉方に子を育すと、親歎じて曰く、蟲の境を犯さざるは一の異なり化鳥獸に及ぶは二の異なり、童子仁心あるは三の異なりと」とあり。
【薪樵】詩經に「芃芃たる棫樸、之を薪にし之を槱にす」と、毛傳に「山木茂盛なれば萬人得て之を薪にし、賢人衆ければ國家得て用つて蕃興す」とあり。

大賢の國を彊くするは惟れ舊に圖るなしと。豈飢を又問ふ。朕聞く上智の民を利するは禮に遡はず。太療するは[三一]鼎食を期せず。溺を拯ふは[三二]規行を待つなきにあらずや。是を以て[三三]三王道を異にして共に昌え、五霸風を殊にして[三四]烈を竝ぶ。今農戰脩まらず文儒是れ競ひ、[三五]本を弃て末に徇ひ、厥弊滋〻多し。昔[三六]宋臣禮樂を以て殘賊となし、[三七]漢主文章を鄭衞に比す。豈に聖を非り法を無せんと欲するか、將た以て道を既くして[三八]權するか。今士女を耕桑に專にし、鄉閭に習はすに弓騎を以てし。[三九]五都復して庠序を事とし、[四〇]四民富んで文學に歸せんことを欲す。その道奚若。爾[四一]面從するなかれ。

【大意】朕聞く上智の民を利するは、必ずしも舊法に據らず。皆權宜を取りて法度となすと。要は時の宜しきに應ずるを貴ぶに在り。故に三王五霸其政

【鼎食】鼎を列れて食ふ。
【規行】禮の規定にかなへる行。抱朴子に「規行矩步は以て火を救ひ溺を拯ふべからず」とあり。
【三王】禹湯武王。
【烈】功業なり。
【本】農なり。末は商なり。
【宋臣】墨翟なり。
【漢主】漢の宣帝。
【權】公羊傳に「權とは何ぞや、權とは經に反して然る後善ある者なり」とあり。
【五都】王莽五都に於て均官を立つ、五都は洛陽、邯鄲、臨淄、宛、成都なり。庠序は學校。
【四民】士農工商なり。
【面從】面前に於てのみ從ひ、實は異見を抱くこと。

道を異にすれども、其功業は相同じ。今や農兵の事を務めずして、文儒相競ひ、農を棄てて商に走り、其弊ますます甚し。昔墨翟は禮樂を賤んで暴賊となし、漢の宣帝は詩賦を以て鄭衞の淫聲に比す。此れ先聖の道を非り、法を無するものか、抑〻又道を窮めて權宜を取るものか。今民をして農織に勉めしめ、更に騎射を習はしめ、學校の教を謹み、遂に文學に歸せしめんと欲す。其術之を如何にすべき。忌憚なく之を述べよ。

又問ふ。晉氏(三)綱せず、(四)關河蕩析し、宋人馭を失ひ、淮汴(四)崩離せしより、朕(四)舊民を思念し、永く濟す攸を言ふ。故に將を選び邊を開き、(五)勞來安集す。加ふるに(七)款を納れ和を通じ、德を布き禮を脩むるを以てし、(八)皇華を歌ひて使を遣り、(九)膏雨を賦して賓を懷く。(一〇)關洛南望の懷を動かし、(一一)獯夷北歸の念を遽にする所以なり。夫れ(一二)危葉風を畏れ、驚禽落ち易し。干戈を待つなく、聊か辭辯を用ひ、片言にして(一三)三輔を定めん。斯路何にか階らん。人誰か或は謀を進むべき。志を誦し以て朕が心を沃げ。

【大意】晉綱紀を失ひて、州郡羣盜に分割せられ、宋勢を失ひて淮汴分裂す。朕民の亂離に苦めるを思ひ、之を救はんことを期す。故に將を選び兵を練りて邊境を開き、百姓を慰勞安集し、戎狄の誠を納れて和親を結び、德を布き禮を脩めて之を制し、使臣を遣りて之を懷け、我を仰ぐこと膏雨の如くならしむ。是を以て北齊、後魏南望（齊は江南に都す）の志を起し、北狄故地に歸り入る。朕干戈を用ひず、辯辭を以て之を臣服せしめんと欲す。其道果して如何、汝等各〻思ふ所を述べよ。

【四二】綱。綱紀なり。
【四三】關河。州郡といふが如し
【四四】蕩析は分裂なり。
【四五】崩離。分崩離散なり。
【四六】舊民。晉宋の民。
【四七】勞來。勞は勤苦を慰すること、來は至る者を撫すること。
【四八】款を納る。款は誠なり。戎狄の誠を納れて和親すること。
【四九】皇華。詩經に皇皇者華の篇あり、君使臣を遣すの詩なり。
【五〇】膏雨。左傳に「季武子晉にゆく、晉侯之を饗す、武子再拜して曰く、小國の大國を仰ぐや百穀の膏雨を仰ぐが如し」とあり。
【五一】關洛。洛陽長安地方。
【五二】獯夷。北狄なり。
【五三】危葉驚禽。北齊、後魏に喩ふ。
【五四】三輔。後魏の都する所。
【五五】五州。豫青徐兗冀をいふ。北齊の據る所。

(二)天監三年秀才に策せし文三首

任彦升

秀才に問ふ。朕(二)樊鄧に長驅し、直に(三)商郊を指す。時來るに因藉して、此の(四)歷運に乘ず。(五)戾に當りて永く念ひ、猶は慙德を懷く。何者百王の敝、(六)齊季斯れ甚し。衣冠禮樂地を

【一】天監。梁の武帝の年號。
【二】樊鄧。地名。
【三】商郊。商は殷なり。齊の東昏侯無道なり。故に之が殷紂に喩ふ。
【四】歷運。天子たるべき順序。
【五】戾。天子の畀風。
【六】齊季。齊の末。

掃つて餘すなし。彫斲して方を刓るも經綸 (七)草昧なり。(八)三王の禮を採り冠履粗分れ、(九)六代の樂に因りて宮判始めて辨ず。而かも (一〇)百度草創、倉廩未だ實たず。若し (一一)終畝稅せずんば、則ち國用資るなし。百姓足らずんば則ち (一二)惻隱慮に深し。時に (一三)芻藁を入れ、歲に田租を課する毎に、愀然として懷を疚しめ、(一四)赤子を憐むが如し。今朕をして (一五)滿堂の念なく、民をして (一六)家給の饒あらしめ、漸く (一七)九年の蓄を登し、稍 (一八)關市の賦を去らんと欲す。(一九)子大夫此の (二〇)三道に當り用て王に賓たるに利あり。斯理何にか從はん。良說を聞かんことを佇つ。

【大意】 齊の東昏侯無道なりしを以て朕之を伐ち、時來の運に遭ひ其禪を受けて帝位に卽く。然も不德にして人君となりしは、自ら慚づる所なり。況んや齊末弊政最も甚しく、衣冠の制、禮樂の法悉く廢棄して餘すなきをや。今

【七】草昧。未だ秩序の整はざること。
【八】三王。禹湯武王。
【九】六代。黃帝堯舜及び夏殷周。宮は天子の懸樂。判は卿大夫の懸樂。
【一〇】百度。すべての制度。
【一一】終畝。民の田地全部。
【一二】惻隱。悲傷なり。
【一三】芻藁。枯草なり。以て馬の食に供す。
【一四】赤子。嬰兒なり。
【一五】滿堂。說苑に「古人の天下に於けるや、譬へば一堂の上今滿堂酒を飮むあり、一人あり獨り索然として隅に向つて泣けば、則ち一堂の人皆樂まざるが如し」とあり。
【一六】家給。給は足なり。民皆富みて衣食足ること。
【一七】九年の蓄。禮記に「國に九年の蓄なきを不足といふ」とあり。
【一八】關市の賦。關所及び市場の稅。
【一九】子大夫。秀才等を指して言ふ。
【二〇】三道。國體人事直言をいふ。

先王の法度を採り、法制を定めたれども、百事草創にして未だ完備せず。倉廩また未だ實たず。若し賦稅を免じて取らずんば、國用給せず。百姓窮すれば、朕が心を憂へしむ。是を以て租稅を課する毎に獨り心を痛む。今朕をして不樂の念なく、民をして給足せしめ、國用足り關市の稅廢するに至らしめんと欲す。汝等各〻意見を陳述すべし。

問ふ。朕もと諸生よりし、(二一)弱齡にして志あり。戶を閉ぢて自ら精くし、卷を開いて獨り得たり。(二二)九流七略、頗る嘗て觀覽し、六藝百家 (二三)牆面にあらざるに庶し。(二四)一日萬機、早く朝し晏く罷むと雖も、聽覽の暇、(二五)三餘失ふなし。上の下を化する、草偃風從す。惟れ此の虛寡、俗を動かす能はず。昔 (二六)紫衣の賤服、猶ほ齊風を化し、(二七)長纓の鄙好なる、且つ鄒俗を變せり。德は往賢に慙づと雖も業は前事に優れり。且夫れ (二八)搢紳の道行はるるは祿利然るなり。朕心を (二九)駿骨に傾く。(三〇)眞龍を懼るるに非ず。(三一)輞軿靑紫地芥を拾ふが如し。而も惰游して業を廢

【二一】弱齡。少年なり。
【二二】九流。儒家、道家、陰陽家、法家、名家、墨家、縱橫家、雜家、農家なり。漢書に「劉歆羣書を總べて其七略を奏す」とあり。
【二三】牆面。面墻に向ひて見る所なきをいふ。
【二四】一日萬機。書經に「一日二日萬機あり」とあり、天子の職事をいふ。
【二五】三餘。冬は歲の餘、夜は日の餘、陰雨は時の餘。
【二六】紫衣。韓非子に「齊の桓公紫を服するを好む、一國盡く紫を服す」とあり。
【二七】長纓。長き冠の紐。韓非子に「鄒君長纓を好む、左右皆長纓を服す」とあり。
【二八】搢紳。大官をいふ。
【二九】駿骨。賢才に喩ふ。
【三〇】眞龍。賢才に喩ふ。

するもの、十室にして九なり。(三三)鳴鳥聞くなく、(三三)子衿作らず。(三四)弘奬の路斯れ既に然り。猶ほ其れ寂寞たるも、應に(三五)良規あるべし。

【大意】朕は本書生より起る。故に九流百家の書悉く誦讀せざるはなし。既に天子となりし後も、萬機の暇三餘の時を以て猶ほ勉學を怠らず。夫れ上の下を化するは風の草を靡かすが如きも、我が學を好むこと虛寞なることを以て、未だ時俗を動かすに至らず。朕が德徃賢に劣れりと雖も、事功は往時にまさるべし。且つ官吏の道行はるるは、祿利を饒にすればなり。朕は賢才を得て之を用ひんことを思ふ。故に學成りて經術に明らかば、貴位高官を取ること塵を拾ふの易きが如くならん。然も學業を惰る者多く、未だ鳳鳴を聞くに至らざるは何ぞや。ただ奬勵の一途に在り。汝等意見を陳述せよ。

と問ふ。朕諫鼓を立て謗木を設くること茲に三年。比ろ闕下に輻湊すと雖も、多くは政要にあらず。日に(三六)青蒲に伏すれども能く切直なること罕なり。將た齊季(三七)多諱にして風流遂に往けるか、將た朕寡薄にして古を慕ひ、(三八)虛受弘からずと謂へるか。然れども(三九)萬寓に君臨し、民上に(四〇)介在してより、何ぞ嘗て一言旨を失するを以て、(四一)朔方に轉徙し、(四二)睚眦違ふありて左校に論輸し、直臣をして口を杜ぎ、(四三)忠讜をして路絶えしめんや。將た恐くは(四四)弘長の道、別に未だ周からざるあらんことを。意を悉し以て陳べ、極言して隱すなかれ。

【大意】朕鼓を朝に立て、諫めんと欲する者あらば之を擊たしめ、誹謗の木を闕に設け、誹らんと欲する者あれば之を擊たしめ、以て直諫を歡迎す。乃ち諫むる者多しと雖も、政事の要にあらず。日に內庭に來れども直言する者少し。夫れ或は齊末多忌なりしを以て、直諫の風廢れたるか。或は朕を以て空しく古を慕ひ、眞に虛受の心なしとなすか。然れども天子となりてより以來、朕が旨に逆へるを以て、官職を黜けたる事あらず、又忠言の路を壅ぎし事なし。夫れ或は奬勵の法未だ完からざるに因るか。汝等意見を陳述すべし。

【三一】輜軿。車なり。青紫は高官の服。
【三二】鳴鳥。鳳なり。天子聖明にして功業成れば鳳凰見はれ然らずんば鳳凰至らず。
【三三】子衿。詩經の篇の名。序に「學校の廢せるを刺るなり」とあり。
【三四】弘奬。大に勸むること。
【三五】良規。善き意見。
【三六】青蒲。天子の內庭。
【三七】多諱。忌諱多きなり。
【三八】虛受。虛心にして人言を容るること。
【三九】萬寓。萬國なり。
【四〇】介在。介は特なり。
【四一】朔方。北方なり。後漢書に「蔡邕上疏す、帝覽て歎息す、邕を洛陽の獄に下す、詔して死一等を減じて朔方に徙す」とあり。
【四二】睚眦。疾視すること。後漢書に「李膺河南尹となる、時に宛陵の大姓羊元羣、北海郡を罷め贓罪狼藉たり、膺其罪を罰せんと欲す、元羣賂を官豎に行ふ、膺反つて坐して左校に輸作す」とあり。論輸は罪を論じて官を徙すなり。
【四三】忠讜。忠直の言。
【四四】弘長。奬勵なり。

卷の第十九

表

禰衡を薦むる(一)表

孔文舉

臣聞く、洪水横流して(二)帝乂め俾めんことを思ひ、旁く四方に求め以て賢俊を招くと。昔(三)世宗統を繼ぎ、將に祖業を弘めんとす。疇か咨載を熙めん。羣士嚮のごとく臻る。(四)陛下叡聖にして纂ぎて基緒を承け、(五)厄運に遭遇して、日の仄くに勞謙す。惟れ(六)岳神を降し、異人並び出づ。

【大意】堯の時、洪水天下に横流するや、之を治めんが爲に賢俊異能の士を四方に招き、武帝位を繼ぎ祖業を弘めんとし、廣く賢才を求むるや、衆士響應して至れり。陛下大業を繼承するや、董卓の難起る。乃ち勤勞恭謙して、日晩るるまで食はず、以て賢才を求む。是に於て山岳靈を降し、異人を生めり。禰衡是れなり。

【一】表。天子に進むる文をいふ。
【二】帝。堯なり。書經に「湯湯たる洪水方に割ふ、能くするあらば乂めしめん」とあり。
【三】世宗。漢の武帝。
【四】陛下。後漢の獻帝を指す。
【五】厄運。董卓洛陽を破り帝を長安に遷せるをいふ。
【六】岳。山の神なり。詩經に「維れ嶽神を降し、甫及び申を生む」とあり。

竊に見るに(七)處士平原の禰衡、年二十四、字は正平、(八)淑質貞亮にして英才、(九)卓躒たり。初め藝文を渉り、堂に升り奥を覩る。目一たび見る所輒ち口に誦し、耳暫く聞く所心に忘れず。性道と合ひ、思神あるが若し。(一〇)弘羊が潛計、(一一)安世が默識、衡を以て之に準ずるに、誠に怪むに足らず。忠果正直にして志(一二)霜雪を懷き、善を見ては驚くが若く、惡を疾むこと讎の若し。(一三)任座が抗行、(一四)史魚が厲節も、殆んど以て過ぐるなし。(一五)鷙鳥百を累ぬるは、一鶚に如かず。衡をして朝に立たしめば、必ず觀るべきあらん。辯を飛ばし辭を騁せ、溢氣坌涌し、疑を解き結を釋き、敵に臨んで餘あり。昔賈誼(一六)屬國に試みられ、詭りて(一七)單于を係がんことを求め、(一八)終軍長纓を以て勁越を牽き致さんと欲す。弱冠にして慷慨なる、前代之を美とす。近日

【七】處士。仕官せざる士をいふ。平原は郡名。
【八】淑質。天質善良なり。
【九】卓躒。高絕なり。
【一〇】弘羊。漢書に「桑弘羊心計を以て年十三にして侍中に拜せらる」とあり。
【一一】安世。漢書に「張安世郎となる、上河東に行幸す、嘗て書三篋を亡ふ、詔問するに能く知る者なし。唯安世之を識る」とあり。
【一二】霜雪。潔白なること。
【一三】任座。呂氏春秋に「魏の文侯諸大夫に問ふ、寡人は何如なる主ぞやと、任座曰く、君は不肖の君なり、中山に克ちて弟を封ぜず、是を以て不肖の君なるを知る」とあり。
【一四】抗行は高行なり。
【一五】史魚。論語に「直なるかな史魚云云」とあり。厲節は高節。
【一六】鷙鳥。鷹の類の猛鳥、鶚はワシ。此一句は衆凡人は一傑士に如かざるをいふ。
【一七】屬國。夷狄をつかさどる官名。
【一八】單于。匈奴の王。
【一九】終軍。人名。長纓は長き紐。勁越は強き南越王。

路粹、嚴象も亦異才を用て擢んでられて(一九)臺郎に拜せり。衡は宜しく輿に比たるべし。如し(二〇)天衢に龍躍し、翼を(二一)雲漢に振ひ、聲を(二二)紫微に揚げ、光を(二三)虹蜺に垂るるを得ば、以て(二四)近署の多士を昭にし、(二五)四門の穆穆を增すに足らん。(二六)鈞天廣樂心ず奇麗の觀あり。帝室皇居必ず非常の寶を畜ふ。衡等の輩の若きは多く得べからず。(二七)激楚陽阿、至妙の容は、掌技者の貪る所、(二八)飛兎騾裹、絕足奔放は、(二九)良樂の急にする所なり。臣等區區として敢て以聞せざらんや。陛下篤く士を取るを愼めり。必ず須らく效し試みるべし。乞ふ衡をして(三〇)褐衣を以て召見せしめよ。必ず(三一)觀采すべきなくんば、臣等(三二)面欺の罪を受けん。

【大意】思ふに平原の禰衡は、天質善良にして才能高絕なり。學藝を脩めて蘊奥を窮め、思謀深遠にして神明の如し。桑弘羊、張安世の如きも、之を衡に比すれば敢て異とするに足らず。且つ果決にして潔白、善を見ては及ばざるが如くし、惡を見ては之を憎むこと讎の如し。辯論風發し、疑團を氷釋し、敵を屈して餘裕あり。宜しく之を擢んで、路粹、嚴象の輩と肩を比せしむべし。若し一たび宮廷に用ひらるるを得ば、必ず官僚の面目を一新するに足らん。陛下須らく褐衣を以て召見すべし。若し採るに足らざる所あらば、臣甘んじて面欺の罪に服せん。

【一】臺郎。尙書郎。
【二〇】天衢。天路なり。
【二一】雲漢。あまのがは。
【二二】紫微。天子の宮殿。
【二三】虹蜺。虹なり。
【二四】近署。天子の左右。
【二五】四門。四方の門。穆穆は和親なり。
【二六】鈞天廣樂。天帝の音樂。
【二七】激楚陽阿。歌曲の名。
【二八】飛兎、驟裹。古の駿馬の名。
【二九】良樂。王良、伯樂。古の能く馬を御せし人。
【三〇】褐衣。賤人の服。
【三一】觀采。觀て採用すること。
【三二】面欺。まのあたり欺くこと。

出師の表

(二)諸葛孔明

臣亮言す。(三)先帝業を創むること未だ半ならずして、(四)中道に崩殂す。今天下(五)三分して(六)益州罷弊す。此れ誠に危急存亡の秋なり。然れども侍衞の臣(七)内に懈らず、忠志の士身を(八)外に亡るる者は、蓋し先帝の遇を追ひ、之を陛下に報いんと欲すればなり。誠に宜しく聖聽を開張し、以て先帝の遺德を光にし、志士の氣を恢にすべし。宜しく妄に自ら(九)菲薄し、喩を引き義を失ひ、以て忠諫の路を塞ぐべからず。(一〇)宮中府中倶に一體となり、(一一)臧否を陟罰し宜しく(一二)異同あるべからず。若し姦を作し科を犯し、及び忠善をなす

【一】諸葛孔明。名は亮、字は孔明、蜀に仕ふ、後主の建興五年、亮軍を率ゐて北のかた漢中に駐る、發するに臨んで上疏す。此篇是れなり。
【二】先帝。蜀の先主、劉備を指す。
【三】中道。中途なり。崩殂は死なり。
【四】三分。吳魏蜀の分立すること。
【五】益州。蜀なり。罷弊は疲弊なり。
【六】内。宮中なり。
【七】外。邊疆なり。
【八】菲薄。自ら輕んずること。
【九】宮中。禁中なり。府中は大將軍の幕府なり。
【一〇】臧否。善惡なり。陟罰。陟は升なり。

者あらば、宜しく(一一)有司に付し、其刑賞を論じ、以て陛下平明の治を昭にすべし。宜しく(一二)偏私して(一四)內外をして法を異にせしむべからず。

【大意】先帝漢室興復の大事（劉備は漢の裔なり）を創め帝位に卽きしも、僅に三年ならずして崩御し、今天下は吳魏蜀の三國に分れ、而して我が蜀尤も微弱なり。誠に危急存亡の秋と謂ふべし。然れども侍衞の臣忠勤を宮中に勵み、志士身を忘れて邊疆に勇戰するは、先帝の恩遇を追想し、之を陛下（後主を指す）に報いんと欲すればなり。故に陛下は能く忠諫の言を納れ、先帝の遺德を大にし、志士の意氣を通達せしむべきなり。決して自ら輕んじ非義の喩を引きて、諫言を納れざるが如き事あるべからず。宮中と府中とは、宜しく步調を一にし、善人を陟せ惡人を罰するに、法を異にすべからず。姦惡をなし罪科を犯し、或は忠善をなす者あらば、有司に付託して、賞すべきは賞し罰すべきは罰し、以て公平明白の治道を示すべし。偏頗私曲に流れて宮中府中其法を異にすべきにあらず。

(一五)侍中侍郎郭攸之、費禕、董允等は、此れ皆良實にして志慮忠純なり。是を以て先帝（一六）簡拔し、

【一】異。同。異ること。
【二】有司。かかりの役人。
【三】偏私。偏頗なり。
【四】內外。宮中と府中と。
【一五】侍中。官名。郭攸之、費禕、ともに侍中となる。侍郎は官名。董允黃門侍郎たり。
【一六】簡拔。選拔なり。

以て陛下に遺せり。(一七)愚以爲へらく宮中の事、事大小となく、悉く以て之に咨り、然る後施行せば、必ず能く(一八)闕漏を裨補し、廣益する所あらん。將軍向寵は性行(一九)淑均にして、軍事に(二〇)曉暢す。昔日に試用せらる。先帝之を稱して能といへり。是を以て衆議寵を擧げて(二一)督となす。愚以爲へらく、營中の事、悉く以て之に諮らば、必ず能く行陳をして和穆せしめ、優劣をして所を得しめん。賢臣を親み小人を遠けしは、此れ(二二)先漢の興隆せし所以なり。小人を親み賢士を遠けしは、此れ後漢の傾頽せし所以なり。先帝在し時、毎に臣と此事を論じ、未だ嘗て(二三)桓靈に歎息痛恨せずんばあらざりしなり。(二四)侍中尙書長史、參軍、此れ悉く(二五)貞亮死節の臣なり。願くは陛下之を親み之を信せよ。則ち漢室の隆、日を計りて待つべし。

【大意】郭攸之、費禕、董允等は、忠良貞實にして純忠の士なり。故に先帝之を選拔して陛下に遺せり。陛下事を行ふに方り、此三人に諮詢せば、闕失を補ふを得べし。向寵は善良公平にして

【一七】愚。諸葛亮自ら謂ふ。
【一八】闕漏。闕失遺漏。
【一九】淑均。善良公平なり。
【二〇】曉暢。通達なり。
【二一】督。總督なり。
【二二】行陳。陣中の士卒。和穆は和睦なり。
【二三】先漢。前漢なり。
【二四】桓靈。後漢の末の天子、ともに宦官を用ひて失敗せり。
【二五】侍中尙書。官名、陳震をいふ。
【二六】長史。官名、張裔をいふ。參軍も官名、蔣琬をいふ。
【二七】貞亮死節。忠誠にして節義の爲に死すること。

軍事に明なり。先帝も嘗て之を評して能者といへり。故に衆議により寵を擧げて總督となしぬ。軍事は宜しく彼に諮詢せらるべし。然らば陳中の士卒をして、能く一致和合せしめ、優者劣者各〻宜しきを得べきなり。前漢は賢士を親任して興隆し、後漢は小人を親任して傾頽せり。國家の盛衰は用ふる所の臣に因る。陳震、張裔、蔣琬の三人は忠貞死節の臣なり。願くは陛下の之を親任せんことを。然らば漢室の興復は期して待つべきなり。

臣もと〔二八〕布衣、躬ら〔二九〕南陽に耕し、苟も〔三〇〕性命を亂世に全うし、聞達を諸侯に求めず。先帝臣の卑鄙なるを以てせず、猥に自ら〔三一〕枉屈し、臣を草廬の中に三顧し、臣に諮るに〔三二〕當世の事を以てす。是に由りて感激し、遂に先帝に許すに驅馳を以てす。後〔三三〕傾覆に値ひ、任を敗軍の際に受け、命を危難の間に奉ず。爾來二十有一年なり。先帝臣の謹愼なるを知る。故に崩ずるに臨み、臣に寄するに〔三四〕大事を以てす。命を受けて以來、夙夜憂歎し、〔三五〕託付の效あらずして、以て先帝の明を傷けんことを恐る。故に五月〔三六〕瀘を渡り深く〔三七〕不毛に入る。今南方已に定り、兵甲已に足る。

【二八】布衣。賤人なり。
【二九】南陽。郡名。
【三〇】性命。生命といふが如し。
【三一】枉屈。節を屈すること。
【三二】當世の事。漢室興復の事。
【三三】傾覆。獻帝の建安十三年、劉備曹操と當陽長坂に戰ひて敗れしをいふ。
【三四】大事。討賊興復の事。
【三五】託付。依託なり。
【三六】瀘。川の名。
【三七】不毛。炎熱の爲に草木の生ぜざる地。

當に三軍を帥將し、北のかた〔三八〕中原を定むべし。庶くは駑鈍を竭し〔三九〕姦凶を攘除し、漢室を興復し、〔四〇〕舊都に還さんことを。此れ臣の先帝に報いて陛下に忠なる所以の職分なり。

【大意】臣はもと微賤の身にして、南陽に躬耕し苟も生命を亂世に全うし、諸侯に仕へて名聞利達を求めざりき。然るに先帝は臣の微賤なるを顧みず。猥に尊貴を屈して三たび臣を草廬の中に訪ひ、興復の事を諮詢せらる。臣その意氣に感じ先帝の爲に奔走せんことを許しぬ。其後當陽長坂の敗戰に値ひ、命を受けて救援を吳に求め、危難の間に奔走す。指を屈すれば今既に二十一年を經たり。先帝又臣の謹愼なるを知り、崩御に際し、臣に委するに討賊興復の大事を以てせらる。此委託を受けてより、夙夜憂慮し、委託の實効なくして先帝の明鑑を害せんことを恐れ、建興三年炎熱を犯して南征し、今南方既に平定し、また後顧の憂なし。當に大軍を率ゐて北方魏國を平定すべきなり。願くは魏王を討伐し漢室を興復し舊都に還さんことを。此れ臣の先帝の恩に報い、陛下に對して忠なるべき當然の務なり。

〔四一〕規益を斟酌し忠言を進め盡すに至りては、則ち攸之、禕、允の任なり。願くは陛下臣に託するに討賊興復の效を以てせよ。效あらずんば則ち臣の罪を治め、以て先帝の靈に告げよ。若し德を興すの

【三八】中原。魏を指す。
【三九】姦凶。魏を指す。
【四〇】舊都。雍洛の二州をいふ、兩漢の都せし地なり。
【四一】規益。一本に損益に作る。斟酌は加減すること。

言なくんば、則ち允等を戮し以て其慢を章せ。陛下亦宜しく自ら謀り、以て善道を㊀咨諏し、㊁雅言を察納し、深く先帝を追ふべし。臣恩を受くるの感に勝へず。遠く離るるに當り、表に臨んで涕泣し、云ふ所を知らず。

【大意】害を損し利を益し、忠言を進むるは、郭攸之等の任務なり。願くは陛下臣に託するに專ら討賊興復の事を以てせよ。若し其効なくんば、臣を罪に處し、先帝の靈に告げよ。若し陛下の德を興すべき忠言なくんば、攸之等を罪し、其怠慢を天下に公表せよ。陛下も亦自ら勘考し、正言を納れ、先帝の意を遂げんことを期せよ。今遠く去るに當り、此表を草するも、涕泣して云ふべき所を知らず。

【一】咨諏。とひはかること。
【二】雅言。正言なり。

(二)自試を求むる表

曹子建

臣植言す。臣聞く士の世に生るるや、入りては則ち父に事へ、出でては則ち君に事ふと。父に事ふるには親を榮するを尚び、君に事ふるには國を興すを貴ぶ。故に慈父も無益の子を愛する能はず、仁君も無用の臣を畜ふ能はず。夫れ德を論じて官を授くるは成功の君なり。能を量りて爵を受くるは㊁畢命の臣なり。故に君に虛授なく、臣に虛受なし。虛授之を謬舉といひ、虛受之を㊂尸祿といふ。詩の㊃素餐の由りて作る所なり。昔㊄二虢兩國の任を辭せざるは、其德厚ければなり。㊅旦奭燕魯の封を讓らざるは、其功大なればなり。今臣國の重恩を蒙ること今に㊆三世。正に㊇陛下升平の際に値ひ、聖澤に沐浴し德敎に潛潤す。厚幸と謂ふべし。而も位東藩を竊み、爵上列に在り。身輕煖を被り口百味に厭き、目㊈華靡を極め耳絲竹に倦む者は、爵重く祿厚きの致す所なり。退いて古の爵祿を受けし者を念ふに此に異るあり。皆功勤國を濟ひ、主を輔け民を惠むを以てなり。今臣は德の述ぶべきなく、功の紀すべきなし。此の若くにして年を終らば、國朝に益なく、將に㊉風人彼己の譏に掛らんとす。是を以て上は㊊玄冕に慙ぢ、俯しては㊋朱紱に媿づ。

【大意】人の生くるや當に忠孝を全うすべし。孝は爵祿名譽を得て、親を榮するを尚び、忠は君に

【一】自試。魏志に太和二年曹植雍丘に還り、常に自ら利器を抱いて施す所なきを憤怨す、乃ち上疏して試用せられんことを求む。

【二】畢命。命を盡すこと。
【三】尸祿。無能にして祿を食むこと。
【四】素餐。尸祿に同じ。詩經に「彼の君子、素餐せず」とあり。
【五】二虢。虢仲、虢叔の二人。共に文王の卿士たり。
【六】旦奭。周公旦は魯に封ぜられ、召公奭は燕に封ぜらる。
【七】三世。魏の武帝、文帝、明帝をいふ。
【八】陛下。明帝を指す。升平は泰平。
【九】華靡。華美なり。
【一〇】風人。詩經の詩を作れる人。彼己は詩經に「彼己の子、其服に稱はず」とありて、不德にして高位に在るを譏れるなり。
【一一】玄冕。黒き冠、官服なり。
【一二】朱紱。赤き紱、官服なり。

事へて國を盛にするを尙ぶ。故に慈父も無益の子を愛する能はず、仁君も無能の臣を畜ふ能はざるなり。君臣德の優劣を觀て、之に官爵を授くれば成功あり。臣己の材能を量りて官爵を受くれば、君命を全うするを得。故に明君は虛授せず、忠臣は虛受せず、無能にして君の祿を食めば素餐の譏を招く。昔二虢周召の封爵を辭せざりしは、周室に功德ありし故なり。今臣は國の重恩を受くること既に三世に及ぶ。誠に厚幸と謂ふべきなり。東藩に封ぜられて榮爵に列し、榮華を窮むるは、爵祿の厚きが爲なり。然も功德の稱述すべきなし。此の如くにして生を終らば、素餐の譏を免るる能はず。常に衣冠に對して自ら恥づ。

方今天下一統して（一三）九州晏如たり。顧ふに西のかた尙ほ違命の蜀あり、東のかた不臣の吳あり。邊境をして未だ甲を稅ぐを得ず、謀士をして未だ枕を高うするを得ざらしむる者は、誠に宇內を混同し以て太和を致さんと欲すればなり。故に（一四）啓有扈を滅して夏功昭に、（一五）成商奄に克ちて周德著る。今陛下聖明を以て世を統べ、將に（一六）文武の功を卒へ（一七）成康の隆に繼がんと欲す。良を簡び能に授け、（一八）方叔、邵虎の臣を以て四境を鎭衞す。國の爪牙たる者當れりと謂ふべし。然れども（一九）高

【一三】九州。天下なり。晏如は無事。
【一四】啓。夏王の名、禹の子なり。有扈は夏の諸侯、貢職を供せず。
【一五】成。周の成王。商奄は二國の名。
【一六】文武。周の文王武王。創業の君なり。
【一七】成康。周の成王康王、守成の君なり。
【一八】方叔邵虎。周の宣王の賢臣。
【一九】高鳥。蜀に喩ふ。輕縗はイグルミ。
【二〇】淵魚。吳に喩ふ。鉤はツリバリ。
【二一】車右。車上にて君に侍する臣。鳴轂は車轂の軋りて音を發するを。說苑に「越兵齊に至る、雍門狄死を請ふ、齊王曰く矢石未だ交らず、長兵未だ接せず、子の死を請ふは何ぞやと、狄對へて曰く、昔王圉に

鳥未だ輕縗に挂らず、（二〇）淵魚未だ鉤餌に懸らざる者は、恐くは釣射の術或は未だ盡さざればなり。昔耿弇光武を俟たず、亟に張步を擊つ。言ふ賊を以て君父に遺らじと。故に（二一）車右劒に鳴轂に伏し、雍門首を齊境に刎ぬ。此の二子の若きは、豈生を惡んで死を尙ばんや。誠に其主を慢りて君を陵ぐを恐ればなり。夫れ君の臣を寵する、以て患を除き利を興さんと欲す。臣の君に事ふる、必ず身を殺し亂を靜め、功を以て主に報いんとす。昔賈誼は弱冠にして（二二）屬國に試みられんことを求め、（二三）單于の頸を係ぎて其命を制せんことを請ひ、終軍は妙年を以て越に使し、（二四）長纓を得て其王を占り、（二五）北闕に縲致せんと欲す。此の二臣、豈好んで主に夸りて世俗に燿かすをなさんや。志或は鬱結し、才力を逞うし能を名君に輸さんと欲すればなり。昔漢武霍去病の爲に第を治む。辭して曰く、匈奴未だ滅びず。臣家を以て爲すなきなりと。固より夫れ國を憂へ家を忘

【二〇】淵魚。吳に喩ふ。鉤は釣針。
【二一】車右。車上にて君に侍する臣。鳴轂は車轂の軋りて音を發するを。說苑に「越兵齊に至る、雍門狄死を請ふ、齊王曰く矢石未だ交らず、長兵未だ接せず、子の死を請ふは何ぞやと、狄對へて曰く、昔王圉に田す、左轂鳴る、車右死を請ふ。王曰く子何ぞ死する、車右曰く、轂鳴るが爲なりと。王曰く此れ工師の罪なり子何ぞ死すると、車右曰く臣轂の鳴るを見て工師を見ず、遂に頸を刎れて死す。今越兵至る、轂の鳴るより甚し、安んぞ死せざらんやと。遂に劒に伏して死す」とあり。
【二二】屬國。夷狄を掌る官。
【二三】單于。匈奴の王。
【二四】長纓。長き紐。
【二五】北闕。天子の宮殿。縲致は縛送なり。

れ、軀を捐て難を濟ふは、忠臣の志なり。

【大意】今天下一統、四海無事なりと雖も、尚ほ吳蜀二國の臣服せざるあり。武士甲冑を脫するを得ず、謀臣枕を高うするを得ず。宜しく之を討滅し眞の一統を圖るべきなり。今陛下聖明の資を以て天下を統べ、祖業を全うし守成の功を成さんと欲し、賢能の臣を用ふること當れり。然も吳蜀の未だ滅びざるは征伐の術尚ほ未だ全からざるに由る。昔耿弇、張步の攻むる所となるや、光武帝將に往きて之を救はんとす。耿弇曰く賊虜を以て君父に遺るべけんやと、救援を待たずして進み戰ふ。齊王の車右、齊王の臣雍門狄、亦皆君の爲に身を殺しぬ。此二子豈身を惜まざらんや。君を慢り君を凌ぐ者を憎めばなり。賈誼、終軍亦君の爲に外敵を縛せんことを請へり。是れ皆志鬱結する所あり、誠を君に致さんと欲すればなり。漢の武帝、將軍霍去病の爲に邸宅を築かんとするや、去病は匈奴の未だ平がざるを以て之を辭せり。國を憂へ家を忘れ、身を棄てて難を救ふは、忠臣の志なればなり。

今臣外に居て厚からざるにあらざるなり。而も寢ねては席を安んせず、食ひては味ふに遑あらざる者は、(二七)伏して (二八)二方未だ剋たざるを以て念となせばなり。伏して見るに (二八)先帝の武臣宿兵、年耆い

【二六】伏して。一本に伏の字なし。
【二七】二方。吳蜀なり。
【二八】先帝。武帝を指す。

て (二九)世に卽ける者開ゆるあり。賢世に乏しからずと雖も、宿將舊卒由ほ戰を習ふ。竊に自ら量らず、(三〇)志命を效すに在り。庶くは (三一)毛髮の功を立て、以て受けし所の恩に報いん。若し陛下をして (三二)不世の (三三)詔を出し、臣をして (三四)錐刀の用を效さしめ、西のかた (三五)大司馬に屬し、(三六)偏師の任を統ぶるを得しめば、必ず危きに乘り險を蹈み、舟を騁せ驅を奮ひ、刃を突き鋒に觸れ、士卒の先とならん。未だ (三八)權を禽にし (三九)亮を馘る能はずと雖も、庶くは將に其 (四〇)雄率を虜にし、其醜類を殲さんとす。必ず (四一)須臾の捷を效し、以て終身の愧を滅し、名を史筆に垂け、事を (四二)朝槩に列せしめば、身は蜀境に分れ、首は吳闕に懸ると雖も、猶ほ生くるの年のごとくならん。如し微才試みられず、世を沒ふるまで聞ゆるなく、徒に其軀を榮して其體を豐にし、生きて事に益なく死して數に損なく、虛しく上位を荷ひて重祿を忝うし、禽息鳥視して、白首に終らば、此れ徒に (四三)圈牢の養物なり。臣の志す所にあらざるなり。然れども寢食を安んせざるは、吳蜀二國の未

【大意】今臣東藩に居て祿爵厚からざるにあらず。

【二九】世に卽く。死すること。
【三〇】命を效す。君の爲に身命を棄つること。
【三一】毛髮の功。微功なり。
【三二】不世。世に稀なること。
【三三】錐刀の用。小用なり。
【三四】大將軍。曹眞をいふ。
【三五】一校。偏軍なり。
【三六】大司馬。曹休をいふ。
【三七】偏師。一部隊なり。
【三八】權。吳主孫權。
【三九】亮。蜀の諸葛亮。
【四〇】雄率。首長なり。
【四一】須臾。少時なり。
【四二】朝槩。朝廷の榮譽。
【四三】圈牢。獸を養ふ檻。